

短歌のあゆみ

— 続「短歌のすすめ」 —

夜久正雄
山田輝彦 著

国文研叢書 13



国文研叢書

No. 13

短歌のあゆみ

— 続「短歌のすすめ」 —

社団法人 国民文化研究会

山田輝彦
夜久正雄
著

はしがき

前著「短歌のすすめ」は、「創作と鑑賞」と副題をつけたとおり、どちらかというに入門・導入的な色彩の強いものでしたが、本書は、研究的な色あいの濃いものになりました。副題のとおり、前著につづくものであります。

短歌を作っておりますと、一所懸命にやればやるほど、短歌を作ることが自分の生活にとってどういう意味をもつか考えるようになります。

本書第一部は、それに対する私どもの体験にもとづく答えを述べたものです。しかし、私どもは、ここに述べたことが短歌創作の意義を尽したとは考えていません。私どもの考え及ばぬさらに深い意味があることを予想しています。本書を読まれる方が、私どもの考えを参考にして、さらに深くさらに広く短歌創作の意義をきわめられるように、そして短歌を人生の友としてしたしまれるようにと願うものであります。そしてその道が新しい時代を切り開くことを私どもは信じております。

第二部は、古代精神の結晶した白鳳天平時代を背景に、万葉集の代表的歌人である大津皇子つのみこと柿本人麿かきのものひとまろと山上憶良やまのうえのおくらの生涯と作歌のあとをたどった文章と、近代の激動期に国と国民おんみんとに御身を捧げられた孝明天皇と明治天皇の御製ぎよせいについて述べた文章とから成り立っています。この方々の作歌態度に私どもは創作の根本精神を、学んでいるのであります。

第三部は、短歌表現の様式スタイルについての研究を略述しました。万葉調とか古今調とか新古今調とか連作短歌という、歌の詠みぶりの基礎的研究を述べたものでありまして、私どもの見地を卒直に表明したものでもあります。読者諸賢の御批判をいただきたいと思えます。

そして附録として、私どもの私淑する「亡き師亡き友」の歌についてのデッサンをかかげました。身近かの人々でもありますのでどうしても主観的に書くようになりましたので、附録として載せさせていただきました。世間には知られていない、かくれた歌のながれを汲みとっていただき、祖国をまもるころに「かなしきいのちつみ重ね」た先師先輩の心をおしのびいただけるならば、この上ないよろこびであります。

前著一書に書き尽せなかったために、国文研叢書としてつづけて本書を出していただいたことを、国民文化研究会に対して深く感謝いたします。

私どもとしてはちからを尽しましたが、未熟な点が多いことであろうと存じますので、お気づきの点は御遠慮なく御叱正願います。読者諸賢の御批評を得て、さらに深く正しく歌の道を御一緒にすすみたいと念じております。

なお本書の性質上、本文のかなづかいは当用の現代かなづかいにしましたが、短歌その他文語体の文章が歴史的かなづかいであることは申すまでもありません。なお短歌および文語文中の語のふりがなについては、人名、書名、漢字音のふり仮名のほかは歴史的かなづかいに拠りました。文章の統一を維持するためであります。

昭和四十六年九月二十一日

夜久正雄
山田輝彦

目次

表紙写真、大阪南蛮文化研究所蔵「南蛮屏風」より

はしがき

第一部 短歌創作の意義

一 序説

- (1) はじめに—短歌の呼称…………… 3
- (2) 情意の涸渴…………… 5
- (3) 作歌上の注意…………… 9

二 歌と学問—人生姿勢との関連において

- (1) 学問の出発点…………… 15
- (2) 詩と哲学の奪回…………… 18
- (3) 正しい国家像の確立…………… 23
- (4) 共に是れ凡夫…………… 25

三 歌心と人生

27

四 歌と政治……………41

五 歌会始詠進のこと……………52

六 表現と思想―習作と添削……………61

(1) 全体としての感想……………64

(2) 作者の心を理解する努力……………68

(3) 正しい表現への修練……………69

(4) 概括的表現を避けよ……………71

(5) 切実な経験を詠め……………74

第二部 短歌のしおり……………77

一 大津皇子―万葉の悲劇的精神……………79

(1) 大化改新前後……………79

(2) 大御皇女と大津皇子……………82

(3) 壬申の乱……………85

(4) 十市皇女……………87

(5) 草壁皇子と大津皇子……………89

(6) 謀反……………94

(7) 悲歌……………97

二 柿本人麿かきのものこのひとまろと山上憶良やまのうえのおくら—万葉の「ますらを」たち……………101

(1) 柿本人麿……………101

(2) 山上憶良……………115

三 孝明天皇の御歌……………125

四 明治天皇の御歌……………141

(1) 散佚した明治天皇御製（孝明天皇追悼）四十余首……………141

(2) 御製集の刊行について……………153

(3) 御晩年の御歌と「しきしまのみち」……………159

第三部 短歌のながれ……………169

一 古代歌風の開展—記紀・万葉から古今、新古今への開展……………171

(1) 短歌のはじまり—「古事記」「日本書紀」の短歌……………171

(2) 万葉集の具象的直観的表現……………180

(3) 古今集の抽象的理智的表現……………189

(4) 新古今集の象徴的夢想的表現……………205

二 近代の連作短歌―正岡子規と「アカネ」系歌人……………218

附録 亡き師・亡き友の歌(抄)……………245

(一) 三井甲之先生・三代の歌と歌論と思想……………248

①まえがき―正岡子規の系譜と三井甲之 ②青年時代の歌と歌論 ③先生の
求道心と明治天皇崩御 ④大正時代の言論活動と長詩への開展 ⑤短歌二首

⑥日本主義宣説とマルクシズム批判 ⑦敗戦―墓碑銘 ⑧「今上御歌解説」

(二) 川出麻須美先生・三代の歌人逝く……………278

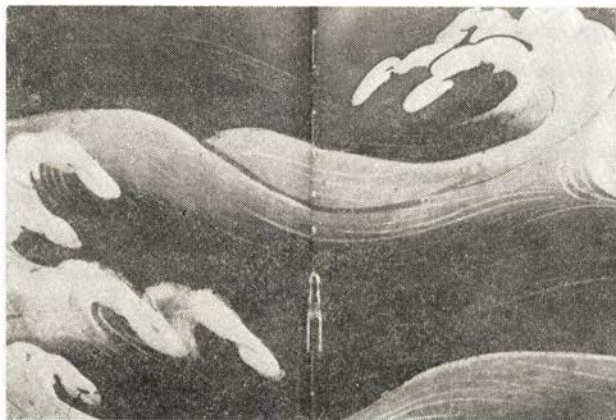
(三) 黒上正一郎先生・友情の歌……………292

(四) 田所廣泰さん・国土の悲歌……………299

あとがき……………313

ハ参考V「短歌のすすめ」の目次……………315

第一部
短歌創作の意義



大阪南蛮文化研究所蔵「南蛮屏風」より

第一部 短歌創作の意義

- 一 序説
- 二 歌と学問——人生姿勢との関連において
- 三 歌心と人生
- 四 歌と政治
- 五 歌会始詠進のこと
- 六 表現と思想——習作と添削

一 序 説

- (1) はじめに——短歌の呼称
- (2) 情意の渦渦
- (3) 作歌上の注意

(1) はじめに——短歌の呼称

短歌という呼称と、和歌という呼称はいくらかニュアンスが違うばかりでなく、その包括する内容も違います。和歌はいうまでもなく漢詩の対照語であって、その中には長歌や旋頭歌せどうも含まれます。しかし、短歌形式が最も長い生命をもって伝承されて来ましたので、今日では和歌と短歌は殆んど同義語として使われています。ただ和歌という言葉には、中世の二条派的な発想や表現のイメージがつきまといまいますので、そういううし

ろ向きのイメージを排除するために短歌という呼称を使いたいと思います。しかし、われわれが短歌という場合は、万葉以降の伝統に連結した「うた」を意味するのであって、和歌と呼んでも少しも差し支えはないのです。

また短歌は「敷島の道」ともいわれて来ました。「道」というと、いかにも中世的な感じがしますが、近代の芸術がもつばら孤立した「個」の表現として理解されて来たのに対して、短歌は永い歴史性を背負い、広い共感の基盤の上に、人と人がその心を通してゆくと、という本来の機能を果して来ました。短歌のこのような性格は、ともすれば類型化やマンネリズムへ埋没する危険をいつも内包していますが、人間を閉鎖的な個の世界から解放して、広やかな共感の世界へ導くという健康な性格は、もう一度確認されるべきことだと思われます。思想を深めたり、知的な面を錬磨したりする、いわば現代の生活が必然的に要求することと、短歌の創作という、一見きわめて趣味的な行為とは、一体どこでどのようにつながるのかという問題が改めて考察の対象となるわけです。

(2) 情意の涸渇

現代のわれわれをとりまいている環境をよく注意してみますと、その一番大きな特色は、人間の情意というものが涸渇している状態ではないかと思われまします。情意というのは、感情という言葉とは少し違って、豊かな感情とそれを統一する意志が一緒になったような心の状態を申します。判りやすい言葉でいえば「うるおい」と言ってもいいのですが、そういう情意が涸れ果てているような気がします。激情や感傷は、実は感情の衰弱から来るのであって、健康な状態ではありません。しかし、自分をもふくめて、我々はその渦中に生きているために、情意の涸渇ということを意識できない。他人のいい表現に触れた時、始めて自分の情意がいかに涸れ果てているかということに気づくのです。これは何も日本だけの問題ではなく、文明の必然的な動きであり、機械文明が次第に人間の生活を征服して行くところに原因があるうと思われまします。最初は人間の肉体の代用をしていた機械が、既に人間の知能の代用をするような段階に向っています。電子計算

機のようなものができずと、人間の思考よりも数等正確な思考ができません。電子計算機の知能指数は一〇〇〇だと言われていますが、人間の知能指数が一〇〇〇前後であるのに比べると、途方もなく正確なものが出て来たことになりました。そういう時代なので、人間が機械に抑圧されて、すべての生活が非常にメカニカルになって来るのです。そこで、人と人とのつき合いも、機械的な、事務的なものになって来ます。事務的であるということは知性の領域なので、必然的に情意というものがなくても営まれるのです。もっと正確に言いますと、情意のない方がかえって営まれやすいというような社会生活が現在の実態であらうと思われまます。

六〇年代の後半から、「イデオロギーの終焉しゅうえん」ということが盛んに言われました。十九世紀的な大思想の時代は去ったといわれます。ヘーゲルやマルクスによって代表されるような、例えば「絶対精神」とか「物質」とかいう大前提が初めにあって、そこから演えん繹ぎやくしてゆくようなグラント・セオリーは崩壊してしまつた。もう一度個々の人間の経験を大事にすることに帰らないと、本当の意味で、人間疎外から回復はできないという状態になって来ています。先年来日致しましたフランスの代表的な実存主義の哲学者マル

セルなども、今のような機械文明の圧倒的な情勢の中では、人間の情意というものは遠からずして根こそぎにされてしまうということを言つて、その危機を訴えていましたが、現代はそういう時代だと思ひます。これは、イデオロギーの問題よりも、もっと重大な問題ではないかと思ひます。人間が人間として心を通わせ合うことができなくなる時代というのは、いくら文明が進んでも、不幸な時代ではないだろうか。そういう途方もない人間疎外の時代が到来しようとしているのです。だから、われわれが情意というものを洗練し、それを表現し、人と人の心をつないでゆくことをしなければ、今までの一切の文明の営みというものが、全くむなしくなってしまうような、恐しい時代が来ているのではないかと思ひます。歌の創作は、そういう情意の涸渇という状態から人間を回復する最も有効な方法の一つだと思ひます。

さて、このように情意の重大さを強調すると、論理と情意を対立概念と考える人は、必ず、それは論理の蔑視に通ずるのではないかと反論されるでしょう。しかし、決してそうではないのです。情意というものは、人間として不可欠のものですから、情意の欠落した人間の組み立てた論理は必ず欠陥が出て来ましよう。正しい情意に裏うちされな

ければ、人間の生活に密着した本当の正確な論理は出て来ないと思われまゝ。われわれは決して論理を輕蔑するわけではなく、正しい論理が駆使されるためには、正しい情意がなければならぬと考えるものです。ところが、その情意の錬磨は、現在どこの社会でも殆んど行われていないのです。現在の情意の生活をかろうじて支えているのは、家庭生活だけです。しかし、一度社会に出たり、学園の生活をしたりすると、殆んど情意というものは無い状態です。

ただ、情意と感傷とは違うのです。例えていうならば、情意とは心の中に溢れている泉のようなものです。そして、正しい情意というものは必ず結晶し、統一されていくものだという意味で、非常に創造的なものです。一方、センチメンタリズムというのは、流れて、消えてしまうものです。流行歌に歌われているような感情は、非生産的なもので、決して形にならないものです。歌を作れというのは何かセンチメンタリズムで論理をごまかすのだからというように考えてはいけません。一人一人が幸福になり、一人一人の幸福の上に日本人全体の幸福が築かれるためには、心の中に溢れるような情意の泉がたたえられなくてはならないと思ふのです。

(3) 作歌上の注意

以上、きわめて簡単ですが、われわれが短歌を作る意味を考えてみたわけでは、
どういう方法で歌を作るのかという質問が次の問題として出て来るはずで、それは、
感じたことを、五・七・五・七・七の定型の言葉に定着させることだと定義できましょ
う。ある約束の中に、自分の感情をはめこむのですから、「技術」や「技巧」が必要に
なつて来るのは当然です。そして「技巧」が問題になると、うまく詠もうとする意識が
働くのも当然のことです。しかし実はそこに作歌のかんせい陥穽があるのであって、「うまく」
詠もうとするより「正確に」詠もうと心がけることが大切です。うまく詠もうすると、
必ず感情の誇張や事実の美化が起り、それが歌を退廃させ、衰弱させて来たのです。正
岡子規が「写生」を強調した背景には、こういう陥穽に対する鋭い洞察があったと思わ
れます。

序 説

① 一体、短歌は最も純粋な抒情詩であつて、感情が一点に集中していなければなりません。

ん。言葉を変えていうと、焦点が一つに絞られていなければなりません。一首一文とい
って、原則として一つの文章で一つの歌が構成されるわけです。もっとも、途中で切れ
たり、倒置法で語順が逆になったりしているものもありますが、その時も一貫した情意
の波が必要なのです。例えば万葉の防人の歌に、

忘らむと野ゆき山ゆきわれ来れどわが父母は忘れせぬかも

というのがあります。この歌のポイントは勿論「わが父母」にあります。それに触発さ
れた感情が一首の内容です。優れた歌というものは、殆んど焦点が一つであって、二つ
も三つも焦点がありますと、統一感のある、印象鮮明な歌になりません。だから、焦点
が三つ出来るようなら、その三つの一つ一つを中心に据えて、三首の連作短歌ができな
ければいけないのです。とにかくポイントは一つであるべきで、その他の部分はそのポ
イントの修飾とか、それを導き出すためのイントロダクションとかの役割を演ずべきも
ので、ポイントが二つに分裂することは絶対に避けるべきです。

これは短歌と俳句の最大の相違点で、俳句には原則として焦点が二つあります。二句一章と云って、二つの句が一つの文章を成しています。例えば秀れた俳句を読んでみますと、

荒海や佐渡に横たふ天の河

という句には、「荒海」という一つ概念と、「天の河」という一つ概念があります。二つのイメージがあるといってもよい。その二つの概念の間には飛躍があるわけです。その飛躍が俳句の面白さなのです。だから俳句の面白さは、その中に知的な面白さ、着想の面白さ、論理の飛躍の面白さをふくんでいると言えます。俳句では論理の飛躍はむしろプラスなのですが、短歌では論理が一貫していなければいけないのです。

最初の定義で「感じたことを詠め」と言いましたが、それは自分の経験したこと、体験したことを詠めということ。ところが、体験したことを詠めば、何でも歌になるかという、そうではないのです。そこにはやはり選択の行為というものがあります。

深く自分の心に残ったことを詠まなくてはいけない。しかし必ずしも深く心に残る体験ばかりがあるわけではない。選択に値するような経験がないという人もあるでしょう。しかし、歌を詠もうと思つて物を見ると、今まで見えなかったような自然が見えたり、今まで気がつかなかったような人の心の微妙なゆらぎが分つたりする。そして歌の源泉である感動をキャッチできるといふ逆の現象もあり得るのです。見たり、感じたりするということも、修練によつて深くなつてゆくので、感覚は人間に与えられた普遍的な本能だというように簡単に片づけられるものではありません。最初から感動的な経験だけを詠めといつても無理なので、出来るだけ自分の経験を正確にみつめてゆくという姿勢が必要です。

それから、理屈を詠んだらいい歌にならないと正岡子規がくりかえして言っています。例えば物理的事実というものは歌になりません。「わが持ちし鞆は下に落ちにけり万有引力のある故ならん」というのは歌ではありません。萩原朔太郎が「大学は卒業したが社会では食へないといふ事実を知つた」というのが詩であり得ないことを、長い論文に書いています。日記の一行ならそれでもいいのですが、人に訴えるものがありません。

社会現象とか、単なる事実だけでは歌にならないので、そういう現象や事実に触発された心の動きが表現されなければ歌にならないのです。

まず経験の選択があり、次に言葉の選択があります。豊富な語彙いを持っている人は、今の自分の感情は、この言葉によって一番正確に表現できるというように選択の自由を行使することができます。フローベルには有名な一語説というのがあります。一つのことを正確に表わすにはたった一つの言葉しかない。その一つの言葉を選べ、それがすぐれた文学者のつとめだということのようです。しかし、初心の人にはそういうことはできません。ある一つの感情を表わす言葉がない、或いは持ち合せが一つしかないという場合もあるでしょう。そこに表現の苦しみとか難しさがあって、もどかしいなという気持ちになるわけです。自分の考えていることが正確に表現されれば、そこにある解放感があります。何かもどかしいという気持ちがある間は、やはり自分の本当の歌になっていないわけです。もどかしさがなくなるまで推敲すいこうすることが大切です。初心の人にはむずかしいことですが、感動の波がそのまま言葉のリズムになって来るようになれば、その歌は必ず人の心に伝わって行くと思えます。

最後に言葉の問題にふれますが、短歌は大体文語の定型詩ですから、文語の語法によって作るのが原則です。しかし、最初から余り語法にこだわったりすると、そのために自然な感情が抑圧されてしまいますから、口語的な発想でも、現代仮名づかいでもいいから、自分の思ったことを卒直に歌うことから始めることです。子規は人の心を感動させる歌はまごころの表現だと言っています。まごころという言葉に抵抗を感じるなら、真実の表現と言ってもいいのです。真実の表現は人に伝ってゆくものだということを歌を作ることを通じて「体験」することが大切です。短歌のもつ定型という約束は窮屈なものですが、それはわれわれの永い伝統の中で、多くの人々が哀歎を盛りこんで来た器うつわなのです。定型を埋めるために、乏しい内容をうすめてひきのばすのではなく、豊かな内容を凝縮するという方向でそれを生かすべきです。その時、短歌という定型は密度の高い内容によって充滿し、緊張した姿と、きびしい韻律をもって、われわれの心の奥をゆさぶらずにはおかないのです。

(山田輝彦)

二 歌と学問

— 人生姿勢との関連において —

- (1) 学問の出発点
- (2) 詩と哲学の奪回
- (3) 正しい国家像の確立
- (4) 共に是れ凡夫

(1) 学問の出発点

しらぬひの筑紫つくしの野辺にますらをが立てし誓の消ゆる日あらめや

これは若くして死んだ一人の友、江頭俊一君（旧制佐賀高等学校を経て東大へ進み在学中病死）の辞世の歌です。長い鏝つばのとれかかった白線帽に、マントを引っかけ、ちびた下駄をはいて大またに歩いていた長身の姿は、今も眼底にありありと浮びます。まことに青春と

は純粹な激しい生命の燃焼の日々です。それは少年の日に訣別を告げて、茫漠ぼうぼくとして果しない人生に真向う時なのです。青春の栄光と苦悩は、すべてこの不可知なものを探し求めずにはやまない緊張の姿勢にあるというべきでしょうか。

古人はそれを立志の日としました。自己の責任において人生の方向を決定するという意味なのです。そして、その方向へ向っての努力を学と呼んだのです。学問とは、人生の意義と本質を、生命を賭かしても追求しなければやまぬという情熱に支えられるべきものであって、お仕着せの思想や理論体系にすがって能事終れりとするものであってはなりませんまい。

現代の思想の混乱は、学問の方法論の誤りに根ざしているようです。それは人間を対象とした科学に、自然科学の方法を適用します。自然科学は十九世紀の文明を支配し、その利用によって人間は異常な進歩を経験しました。この強烈な印象が「科学的」ということへの盲信を生みました。「科学的」とは殆んど「自然科学的」と同義語に使われています。自然科学は物質の世界を対象とするものであり、人間の精神そのものの直接経験とは、一応切り離された世界をとりあつかいます。勿論、自然科学にも数学のよう

に純粹抽象の世界から、生物学のように生命現象をとりあつかうものまで、広い領域を含んでいます。しかし、その対象が人間の心から離れて存在し、それを客観的に観察したり、実験したりすることが出来るという点では共通の要素を持っています。しかし、人間の心を対象にした学問では、こういう方法が果して正しく適用できるかどうか甚だ疑問です。例えば日本の歴史を対象にする学問は、生物史と同じ方法で果してなし得るでしょうか。そこには事実を事実として究明する刻明な努力と同時に、祖国の過去と未来への愛情なしには正しい学問は成立しないでしょう。自己の祖国の歴史を呪咀じゆその対象とするマルキシズムが、事実を歪曲わいぎよくし、憎悪によって体制の変革を企図していることが「科学的」といわれ、それを容認する雰囲気ふんぎが学界に支配的な力となって存在するに至ったことは、如何にも今日の日本の異常さを示すものです。それと共に、愛国を一つのイデオロギーにしてしまつて、一人びとりの心の中で国を愛する心を鍛えなかった、かの戦時中のわが国の指導的言論もまた、同じく重大な誤謬ごびやうを犯していたものでした。これらはいずれも、本当の意味で過去の蓄積を大切にするという根本のものが失われていたと思われまふ。こういう具体例一つをとって見ても、正しい人生体験なしに正しい学

問—人間の心を扱う学問—はあり得ないことが痛感されます。

思えば近代日本は常に西洋思想の激流にさらされて来ました。知識階級思想は、国民から浮き上って著しく観念的となり、ラディカルになりました。祖国蔑視べっしの風潮がアカデミズムの本流となりました。個人人格を至上とする立場か、個我を抹殺してプロレタリア的連帯を志向する立場か、凡そ日本の精神的伝統とはかけ離れた雰囲気ふんいきが学園を長く支配して来たのです。そういう思想のかたよりが正されないまま、筆者もまた昭和十年代の学生生活を送ったものでした。

(2) 詩と哲学の奪回

この時代には、軍部の発言力が次第に強まり、政治の運営が帝国憲法の規制を逸脱しはじめました。それといわゆる「革新思想」が結びついて、「新体制」という国家統制が固まりつつあった時期です。激動する国際情勢と、国内政治の変革の中で、学園には何らの痛感なき学問と独善が支配していました。国家の運命と相渉らぬ空しい抽象理論

の弄もてあそびは、肌で感ずる危機とうらはらのものでした。志ある学生・青年が思想改革、学術改革の狼火を上げて、激しい運動を展開しはじめたのは丁度そのころでした。

全国の高等専門学校、大学の有志学生の間交流がはじまり、幾度か合宿が催されました。それは、まことに痛烈な体験でした。はじめて個我の迷執をうちやぶる苦しみと、それをのりこえて他とつながる喜びを体験したのです。「詩と哲学の奪回」(附録所載の田所広泰氏のことば)という呼びかけが、実に鮮かなひびきで迫って来たことを覚えています。緊張した生命には、古典のきびしい言葉がまっすぐにひびいて来ました。「古事記」のブリミティブな生命や、「万葉」の相聞歌のなまなましい心を、あの時代ほど新鮮な感動で受け取ったことはありません。歌の創作を学んだのも、その頃でした。歌は個人的な詠嘆の芸術ではなく、友と心をかよわせるシキシマノミチであったのです。歌をうたいかわすことによって、生命が孤立したものでないことを実感しました。こうして、祖国の生命につながるきびしい学問の中で友情が育って行ったのです。時代そのものも、われわれの情意も、まさに「疾風怒濤」でした。

やがて日本は大東亜戦争に突入しました。昭和十七年十二月一日、学徒出陣。今、当

時の友の歌を集めた「若桜集」わかざくらしゅうをひもとくと、緊張した思いが今更のように胸に迫って来ます。軍閥にだまされたというような卑怯なくりごとは返上しなければならぬと思います。以下引用の歌の作者の年齢は作歌当時のそれを示します。

（加藤敏治22歳、現八代市助役）

ほろびざるみくにのいのち信じつつしたがひゆかむ大みいくさに
亡き友の立てしちかひのとどまりしつくし国原いまさかりゆく

（松吉正資20歳、東大在学中戦死）

ゆく身にはひとしほしむるふるさとの人のなさけのあたたかきかな

（川井修治21歳、現鹿児島大学教授）

国のため死ねといはねどいもうとがわかれをこめてささぐ御酒はや

筑紫路の秋も深みぬ征く身には今年ばかりの秋と思ふに

(三根淳20歳、現会社社長)

防人と遠き海辺をさしてゆくおのがいのちと萌えよ柿の葉

(小柳陽太郎20歳、現修猷館高校教諭)

こうして、多くの友は勇躍して戦線におもむきました。別れに際して握り合った^{たなごころ}掌のあたたかみは、まだありありと残っているのに、幾人かの友は再び戦線から帰って来ませんでした。「短歌のすすめ」で紹介した和多山儀平君が戦死した時、私は数首の挽歌をつくりましたが、次はその中の三首です。

いざ征かむさらばさらばと握る手のその手の力忘れじとはに

別るるにかたみに酌みし濁り酒再び君とくむよしもなき

あはれまたうつし世にしますすらをの君と相見む月日知らなく

今になって、一部の者は死屍に鞭うつような冷酷な戦争批判をしますが、戦いたおれた多くの英霊は、祖国の栄光を信じて死んで行ったのであって、それをしも犬死というのは国家生活の意義を知らぬ痴者の暴言です。

戦争は敗北に終わりました。人々はその苦悩のやり場を「絶対主義」とか「天皇制」とかいう言葉に求めました。古いものが、ただ古いという理由だけで、容赦なく断罪を受けました。「封建的」というのが戦後の殺し文句でした。そういう思想法によると、敗戦はすべて制度の誤りが原因でした。マルキシズムが変革の理論のエネルギーとなりました。しかし原因は果して制度だけの罪だったのでしょうか。個人至上の思想や、その裏がえしのマルキシズムが、日本の伝統に遠かったと同じように、戦争を指導した人々には、国民の忠誠心を真に貫徹させるだけの威力が欠けていたと思われます。それなら問題はやはり思想に帰ってゆくでしょう。われわれが若い生命をかけてガムシヤラに追求した問題は、決して的是をはずれてはいなかったのです。

敗戦によって国家機構は変革を強いられ、それに続く思想的混迷の中で、国民の心は個々に分断されてしまいました。このばらばらに切り離された心と心をつなぎ合わせる

ことなしには、国家生活は遠からずして崩壊の危機に見舞われるに違いありません。

(3) 正しい国家像の確立

先ず自己の体験を検証することなしに、何らかの理論体系を盲信する態度を打ち破らねばなりません。理論は複雑な現実を整理する手段であり、現実を説明する仮説に過ぎません。生命が主で理論は手段であり、その逆ではありません。同時に機構や制度への盲信を破らねばなりません。すべての悪は制度から発する、従って制度を変革すれば悪はなくなるという思考法です。あの「存在が意識を決定する」というテーゼです。しかし、制度は万能ではありません。人間が作るものである以上、如何に精緻せいじちな制度でも必ず欠陥があります。制度を少しでもよい方向へ変えて行く努力は、不断になされなければなりません。それですべてが解決するという考えは恐しいと思います。制度の改革は常に心を離れて論じられるべきではなく、むしろ制度をカバーする人間の意志の優位をこそ確認すべきでしょう。

以上の二点に加えて、国家についての素直な感情をとりかえすべきだと思えます。従来の国家論は、主として制度としての国家をとりあつかい、国家構造や国家権力に分析の力点が置かれました。国家はそういう側面を必須のものとして持つてはいます。しかし、国家には生命体としての他の側面があります。国家は祖先の永い意志の累積であり、個人の生命が依拠すべき永久生命です。祖国を生命の根源として仰ぐのは、人間のやみがたいねがいであって、ソビエトや中共の生徒守則にさえ「祖国」をうたわざるを得ない理由もここにあります。そういう人間の必然の感情を、停滞した大衆の後進性というようにしか説明し得ないところに、日本のいわゆる進歩主義の抜きがたい観念性があります。人類を国民の上に置くのは論理主義の錯覚です。具体的に存在するのは国民であり、人類とは一つの抽象概念だからです。日本に生れたことは、日本人にとって運命であり、選択の結果としてではありません。自らの祖国を「愛するに価しない国」という人は、愛国に条件をつけるものであり、国家に対する自らの責任を放棄したものだと思えます。正しい国家像の確立なくしては、思想の混迷は正さるべくもないのです。

(4) 共に是れ凡夫

われわれは、われわれの思想の源流として、永く聖徳太子を仰いで来ました。あの、血しぶきを浴びるような骨肉相剋の悲劇の中で、太子が求められた一すじの道、それは凡夫であるという痛感と、他と共に生くる外に道はないという人生法則の確認でした。人間としての正しい道を共に求めて行く、これがわれわれの初心でした。「共是凡夫」とは、「十七条憲法」のかなめとなる人間認識の原点です。すべてはそこからはじまり、そこへ帰って行くべきです。暴力とニヒリズムが学生運動を支配するようになったのは、恐らく第一次安保の「挫折」の頃からでした。その兇暴なエネルギーは彼らのむき出しの人間不信から発しているのです。このいびつに解体された青春像をすこやかな姿にもどすためには、恐らく永続的な大きなエネルギーが必要でしょう。それには、人間に関する学問の、質的な変化が前提とされるべきだと思います。その時、歌を読み、作るという経験が想像以上の大きな働きをすることを信ずるものです。そのことは、既に「短

歌のすすめ」において種々の方向から論及しました。ここでは学問の基本となる人生姿勢と歌の創作がどのようにかかわり合うかということ、体験的に述べてみたわけです。

(山田 輝彦)

三 歌心と人生

いつか宝辺正久氏（下関市「国民同胞」編集）が私の歌集を紹介してくれましたが、その文章の題は「歌心と人生観」とありました。そこで改めて私は「歌心」とは何だろうと考えてみました。もちろんそれは「歌をよむ心」である。では「歌をよむ心」とは、どういう心の働きなのでしょう。自分の経験をふり返って考えてみる。まず、何故歌なんか作るようになったのだろう？ ももちろん「歌」があるからである。

われわれはよく「歌を作る」とか「和歌を創作する」とかいう。しかし、歌というものの全くない世界から歌を創造するわけではありません。歌の作者には歌とはかくかくのものという大体の考えがあつて、それにのつとつて自分の感動を自分の言葉で述べるのです。

またよくわれわれは「自然に歌が生れる」というようなことをいう。これは、作爲的に歌を作ることを戒しめた言葉であつて、歌をよむ気が全くないのに、あるいは、歌を

知らないのに、自然に歌ができてしまうというわけではありません。もつとも、歌聖の明治天皇の御歌に、次の御歌みうたがあつて、歌を知らないでも歌が作れそうに見えます。

おもふことうちつけにいふをさなごの言葉はやがて歌にぞありける

(明治四十年「歌」五首の中——「新輯明治天皇御集」下)

「おもふことうちつけにいふ」とは、情意を卒直に表現するということです。したがつて、この御歌の全体の意味は、感動の卒直な表現である幼児の言葉はそのまま歌であつたよ、という意味です。この御歌からすると、「おもふことうちつけに」言へば、そのまま歌になるように見える。しかし「をさなご」は歌を知らない。ですから自分の言葉が歌だとは思わない。しかし、その直接的表現をこの歌の作者が「歌」とみたのであつて、子どもが歌を作つたとはいえない。歌というと、とかく形式とか技巧とかが偏重されるので、歌の原理が幼子のまごころに通うことを、この御歌はおよみになつたのです。

「明治天皇御集」にはまた

歌

おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも

〔をりにふれたる〕数十首の中——「新輯明治天皇御集」下〕

という御歌があります。明治四十五年の御歌で、旧刊「明治天皇御集」の最後から二番目の御歌で、位置内容ともに印象的に感じられる歌です。

その直前に次の御歌があります。

敷島のやまと心をうるはしくうたひあぐべきこのはもがな

(同前)

三井甲之先生(歌人・思想家、昭和三十八年歿)は、この「おもふこと思ふがままに」の御歌

について、「明治天皇御集研究」（昭和三年、東京堂）に「これまことに、三十一音の和歌の形式が、孤立形式より連作形式に、また和歌より分枝したる俳句の発達を撰取しつつここに新らしき自由の総合的の長詩形式に開展せしめらるべきを暗示せさせ給へる大御歌であるとあふがるるのである」と書いておられる。果して三井先生の言われたとおり、長詩形式を暗示するものかどうかははっきりとわかりませんが、ともかく「歌のしらべ」と「思ふこと思ふがままに」ということの間には、表現と形式という関係があることがわかる。つまり、ただ「おもふこと思ふがままに」述べたのでは「歌」にはならない。「歌」には「歌のしらべ」があるということになります。

それでは、「歌があるから歌をよむ」という「歌がある」という場合の「歌」とはどのようなものか。これは作者の「歌」についての知識であり経験でもある。「歌」についてのかんがえです。具体的にいうと、ある人々にとっては茂吉の歌であり、また、ある人にとっては万葉であり古今集である。あるいはその総合ということもいえます。ともかく、歌をよむ人が、歌というものはこういうものだと考えているひとつの考えがあつて、そうしてそれにあわせて自分の感動をよむのです。その時はすでに感動そのものの

歌についての考えの影響を受けているということができません。だからこそどの歌を目標にするかが重要です。いわば宗教教派の教典の選択と似ています。同じ仏教と言っても何経を經典とするかによって教派が分れるようなものである。このことはまた後で述べます。

ともかく、われわれは自分の心にいただいている「歌とはこういうもの」という考えにしたがって自分の歌をよむことになるのです。その自分の歌についての考えは、歌の存在によって規定されています。自分が人の歌を読んで感じた経験の累積が、はじめて歌をよむ人の指針になるはずです。

ですから、単に「五七五七七」の韻律をもつ言葉に自分の感動をのべてみなさいというだけでは歌はできません。「歌とはこういうものだ」と言って、一首なり二首なりの歌を読んでみることにってはじめて「歌」ができるわけです。つまりわれわれはまず先人の歌にしたがって歌をよむことになる。「歌があるから歌をよむ」のです。

この歌をよむ姿勢が「歌心」です。その姿勢は一種の模倣ですから、その原型である既存の歌そのものが「歌心」であると考えてもよい。したがって「歌心」とは歌に感動

する心とおなじことになる。同時にそれが歌を詠み出す心でもあるわけです。そこで、本来歌はどういう心持でよむかという、明治天皇は「思ふことうちつけに」「思ふことと思ふがままに」「思ふことありのまま」によめ、とお教えになられるのです。これを一言で「まこと」といいます。これがまた「歌心」というものです。

他の人の歌をよんで感動するというのは、その歌のことば通りに形成されてゆく作者の精神を自分の心になぞってみて感動するということです。そこに自己のまごころの表現をみとめるといふことです。したがってそれは、自分のまごころを表現することのかわりになるのです。「歌心」とは要するに「まこと」の表現ということにきわまるといえます。したがってまごころを表現しようとする心の姿勢が「歌心」ということになります。

ところがこの「まごころを表現する」ということも、抽象的な言い方で、どういふ歌がまごころの表現であるか、ということと言わないと具体的ににならないのです。われわれは、記紀万葉の歌とか万葉の系統を追う実朝さねともとか子規とか、三条実美さねともとか吉田松陰とかいう明治維新の志士たちの歌などがまごころの表現だとおもう。別して、歴代御製、

その総合ともいふべき「明治天皇御集」の御歌、今上天皇の御歌に、人間の至心の表現を感得するのです。もちろん、誰でもそう考えるわけではありません。御製なんてつまらない、という人もあるでしょう。また、今では少いが、万葉集よりも古今集を、金槐和歌集よりも新古今集を推す人もあるでしょう。子規よりも鉄幹、晶子、啄木の歌を価値ありとみる人もあるでしょう。そこで歌の批評ということが必要になります。

しかし、それはそれとして、自分の感じたり考えたりしたことを、五七五七七という一定のことばの調子にあわせて表現するというのは共通です。ですから大ざっぱにこれを「歌心」といってもよい。

「歌をつくる」ということは、ひとつの行為ですが、この行為は、ことばの世界に自己を表現することが主目的であって、他の実際の目的はない。普通われわれの日常の行為は、生きることを目的に行なわれている。ある行為はそれ自体で完結するものでなく、次の行為につづき、それはまた次につづいて、具体的生活意志を完成するのです。しかし「歌をつくる」という行為は、具体的行為の経験を言葉の世界に表現する

という精神的な行為です。それは、言葉に表現することによって完結する。継続するとすれば、作者の全人格の形成に参ずるので、現実的の行為につづくものではありません。賞金目あての歌作は、邪道であつて、歌の本道ではない。

深い感動がある。言葉にあらわしたいと思う。人につたえたいとおもう。——こうして歌をよむ作業がはじまります。

歌にしたいと思う感動をここらよみかえらしめる。その感動に心を集中する。まず、感動のリズムを言葉のリズムにあわせるようにする。同時に感動につつまれている経験のイメージを一番適確にあらわすことばをえらぶ。——これは心の中の働きですから、何処でも何時でも精神を集中すればできる。しかし例えば、道路を歩きながらこんなことをすると危いからやめた方がよい。ゆっくり林の中でも散歩しながら、旅行中の汽車の中でゆられながら——かえてこんな時の方がいい場合もある。身体がリズムミカルになつていて、自然に心にもリズムが生れてくるからでしょう。

歌の大たいのところは、こうしてできる。ことばをえらぶ——一言で言えば簡単ですがもつとも適切なことば、つまり感動と一体になったことばをえらぶのは容易ではありません。

せん。しかもそれが、歌一首全体の言葉の律動（しらべ）にあうようにえらぶのですから、なかなかその言葉はみつからない。油断をすればいいかげんなものにしてしまう。出来上りがきれいでも、自分で満足できないのは、自分でイッワリであることを知っているからです。

この言葉の選択としてあらわれる表現過程は、人間がまことの人間になる、おのれがまことのおのれにかえるプロセスですから、非常に緊張した、一種無我無心の境で行なわれなければならない。混沌たる自分の心がそっくりそのままの言葉にかわる瞬間である。昔の人の歌を読んでいて、その人の声が聞えるように感じられることがあるのは、この表現が、いわば完全に行なわれるからでしょう。その時人麿も実朝も読むものの心の中にいま生きている人のごとくによみがえるのです。

この過程の世界は、心の中の状態ですからよそから見れば何でもないが、まことの火でやかれる一種の煉獄です。また念仏であるともいえよう。よそめを飾ろうとする対他的自尊心、うまい歌を作ろうとする名誉欲、阿世の感情、權威主義、模倣根性、途中でやめてしまおうとする劣弱心——いわばさまざまの心の誘惑が悪魔のように乱れおそい

くる——その中で、自分の真実の表現をつらぬこうとする、一種のきびしい心の戦いです。しかも、それが真実の生れであることを予感しているので希望と期待とをもって行なわれる。道徳的反省も宗教的恍惚こゝろごころもありとあらゆる心の動きが、この過程の中にひそんでいる。その中から、まことの表現に至ろうとする。つまりいつわりのない自分の真情にむかいあい言葉にあらわそうとするのです。

つまり「歌心」とは一人の人間のはかなげな心の中で、人類文化の諸契機が雷鳴、閃光をともなつてたたかわれる大宇宙の創造過程、人生の創造過程そのものではないでしょうか。歌の生命が現実的創造性にあるのはこのゆえです。深淺さまざまながら「歌心」が人生の根底をなすのもこのころのはたらきが人生の創造的行為の本質であるからです。

それはまた、自分の生活感情を言葉に表現するという、心の中の作業によって自身身の経験した感動を整理、検討することになるのです。例えば、ある言葉が自分の表現しようとしている感動にふさわしいかどうかを検討することは、自分の感動の真実を探究していることにもなるのです。この、無私の、熱中した表現努力の中で、われわれは

自己の真実とむきあうことになる。自分の体験したことを本当に体験することになるともいえます。つまり、自己の経験——人生の意味を感得することになるわけです。ちょうどそれは、自分の心が鏡にうつるのを見るような、あるいは、自分の心を鏡に写し出すはたらきであるともいえよう。この鏡は「まこと」である。こう考えてくると、桑原暁一さんが「歴史の底にあるもの」の中で語られた言葉は、ぼくには、そのまま「歌心」の宗教的表現と受けとれるのです。「歌」と「念仏」とがひとつのものになるように思われる。(桑原暁一氏著「日本精神史鈔」参照)

このようにして、歌は生きることの意味を味わう心のはたらきであるから、生の意味を追求する心持のない場合には、ろくな歌はできない。自分の本心をいつわっても歌はできない。ただしく強く生きようという願いからこそまことの歌が生れるのです。そうしてこの人生とは、日常実際の生活に他ならないから、実生活の苦闘を回避すると、歌は、いわば表現の材料を失ってしまって、単なる形骸になってしまう。力ある歌は、人生の逃避からは生れない。(古今集、新古今集に比べて万葉集を推すのはこのためです)しかし、また、実生活だけあって歌がないなら、実生活の経験の意味は感得されないことに

なつて、人生はむなししいものとなつてしまふでしょう。「歌は実人生の表現」たるべきものです。

要するに「歌心」は、一首の歌に感動するところにあらわれ、自ら歌をつくるその心のはたらきの中にある。一見はかないことの意味を味わせ、人生の勇氣を与え、歴史を貫ぬく人生の大動力ともなるのです。

聖徳太子が菩薩ぼさつのゆくべき道として―つまりは日本人のふむべき道として大乘の道をお示しになつて、実人生と真実の道との関係をお述べになつた言葉があります。

「凡夫は常を計するが故に世を楽ねがひて厭離おんりせず。二乗は無常を観ずるが故に世を厭いとひて物を化せず。皆仏の意に違ひ、俱ともに中道を失す。菩薩は無常を観ずるが故に能く存著せず、厭離せざるが故に能く生死に留つて広く衆生を化し、二乗凡夫の偏に同じからずして妙に中道を得」

「凡夫」というのは僧以外の一般の人をいいます。一般民衆は日常生活のために働いてそのはかないことを思わないので、人生の快楽を追うのみに急で、人生を超越しようとしなない。「二乗」は、「声聞、縁覚」で、人生のはかないことをおもうが、自己一身の救いのみを求めて仏の周辺に集る人々、また一身の救ひのみを求めて学問をする人を用いのでしょう。この小乗の人たちは、実人生の無常を知っているので、実人生を厭離はするが、自己に執して民衆を教化することはしない。凡夫も二乗も俱に、仏の真意にかなわない。同じく中道を見失っている。大乘の菩薩は、人生の無常を知っているので人生に執着しないことができる、かといって人生を厭離して世を遁れることがない、実人生に留って広く衆生を教化し、ともに仏道にすすむことができる。二乗、凡夫の偏向したのとは同じでなく、まことにうるわしく中道を得ている、という意味です。

この菩薩の道、——実人生に執着して快楽を追うのみでなく、といってこれを厭離して観念瞑想裡に救いを求めるのでなく、すべての人とともに実人生を生きぬきつつ人生の永遠の意味を求める道をゆくこと、——限られた実人生に永遠の意味を求めて生きること、——その菩薩の道とは、実人生を生きつつその意味をうたい晴らす歌の道を示さ

れたようにも思えるのです。「凡夫」を歌を知らず人生の意味を思わない人、「二乗」を専門歌人専門歌学者としたら、太子の菩薩道が真の歌のあり方を示しているかと思われ
ます。明治天皇の御歌

白雲のよそに求むな世の人のまことのみちぞしきしまのみち

さまざまの世のたのしみもことのはのみちのうへにはたつものぞなき

のお歌は、太子のお言葉にも通う、真の歌の道をおしめしになられたものと仰がれます。

(夜久 正雄)

四 歌と政治

「詩」と「政治」というと、それぞれ相反する心のはたらきであると考えるのが今日の常識です。「詩」とはいうまでもなく「表現」ですから、自己の、人生の、真実を表現することによって、人生の意味を味わう心のはたらきです。「政治」は「支配」することと考えられています。本来は利害を調和して、国民生活の統一的生命の維持発展を目ざす操作ですが、今日では支配の技術と考えられています。政治家とは政治的権力を握るものことで、いわゆる実力者をいいます。「詩」が感情に傾くとすれば「政治」は実行の世界と見なされます。「詩」が精神の世界の満足を求めるとすれば、「政治」はあくまで行為の世界の満足を求めます。「詩」が自由を内心に味わおうとすれば、「政治」は自由を行為に実現しようとしています。「詩」は睦び「政治」は戦います。そこで「詩」と「政治」とは相反する心のはたらきであると考えられるのです。

したがって、政治家と詩人とは人生の両極端に位置することとなって内心お互いに嘲あざわら

り合っているのが今日の実情でしょう。政治家は詩人を、無力なくじなしとみて軽蔑します。詩人は政治家を、俗悪な権力主義者とみて軽蔑します。こうした政治と文学との敵対関係は、大局からみて明治以来ずっとつづいて来ているように見えます。二葉亭四迷は日露戦争の功臣桂総理大臣を諷刺したと思われる痛烈な作品「ひとりごと」を残しています。これなどはその一例です。一方、政治家は学者の意見を聞くことはあっても文学者の意見をきくことはほとんどありません。

しかし、私は最近、短歌の歴史を整理してみても、短歌が日本の昔の政治家にとって、重要な教養と考えられていたらしいことを知りました。政治家が歌をよむことは暗黙の伝統であったようです。

武人すら歌をよんだのです。日本歴史をふりかえてみますと、政治上の支配的権力を握ったのは、天皇・皇室は別として大まかにいって、蘇我、藤原、源平、北条、足利、豊臣、徳川の各氏と考えられます。この中で、歌人の出なかった氏族といえば、蘇我氏だけでしょうか。しかしその時代はまだ短歌が生れて間もなかった時代ですから、問

題になりません。北条とか徳川とかいう、「歌心」とはほとんど無縁な政治を行なった氏族でも、いわゆる名君といわれるような人物には、歌があります。北条氏では泰時から歌があり、徳川氏は、家康自身が、うまいますいは別として、歌をまじめに作ろうとした努力のあとがみられます。戦国時代の武将たちでさえ立派な歌人であったのです（川田順氏著「戦国時代和歌集」参照）。歴代天皇がすぐれた歌人であったことも申すまでもないことです（小田村寅二郎氏編「新輯・日本思想の系譜」参照）。したがって歌のうまいますいは別として、歌をよみ歌をつくるということは、政治的支配者にとっての伝統的の教養であつたはずです。そこで私は、もしギリシャが「哲人政治」を理想としたというなら、日本の政治理想は「詩人政治」であつたといえると思います。

ところで、明治以後、正確にいうと、いわゆる明治維新の志士たちが死んで、「帝国憲法」による政治が行なわれるようになる、歌のわかる、歌をよむ政治家——大臣はほとんどなくなります。憲法発布前、内閣制度成立前の政治的指導者は三条実美と岩倉具視とですが、二人とも死後に歌集を遺したほどです（三条実美「梨のかたえ」、岩倉具視「贈太政大臣岩倉具視集」参照）。岩倉は明治十七年、三条は明治二十四年、憲法発布に前後して死

に、憲法発布以後は「憲法義解」の名義上の著者伊藤博文が政治的指導者となります。こうして日本は立憲君主国として近代国家の第一歩を踏み出したわけで、この立憲法治国家の政治が爾後の強国日本を作りあげるのであるが、伊藤博文には漢詩はありませんが、短歌はありません。以後、総理大臣はもちろん大臣になった政治家の中で歌をよんだ人物はごくまれです。代議士にさえ多くないようです。つまり、日本は、立憲法治国家となったので、憲法と法律と外国語の知識が政治上の技術となって、歌心というような人間的なあたか味は不要になったのでしょう。大学の法科が政治家の養成機関となって、議員、官僚を生み出しましたが、「歌心」とは無縁です。（「聖諭記」参照）。大学として学生に歌をよませる——つまり、大学の一種の課程の中に短歌の創作のとり入れられたのは国学院大学一校のようですが、これは一般の人々からは全く例外のアナクロニズムと考えられたのです。大学側にもこうした思潮を批判すべき短歌哲学はなかったかと思われれます。一般に、歌がわかったり歌をつくったりするような正直者では政治家として落第だと考えられるようになったのです。ついに政治家は力ある文章さえも書けなくなつてしまいました。

今日、米英の政治家はじめ世界先進各国の政治家の文章に比して日本の政治家の文章が著しく見劣りすることは、こうした結果といふべきでしょう。二十世紀動乱の時代に対処した米英ソ中各国政治家の文章に「詩」があるのに、日本の政治家の文章に「詩」のないことは、日本の精神的弱体化を暗示しています。明治後期においてはただ、明治天皇だけが伝統の歌人政治家の理想を実現しました。前に明治時代後期の政治的指導者は伊藤博文と書きましたが、これはいわゆる「実力者」の意味で、明治最大の政治指導者は歌聖でもあつた明治天皇であつたといふべきだったので、〔明治天皇御集〕「新輯明治天皇御集」(下参照)。それにしても、博文その他明治時代前期に成長した人には漢学の素養があつて博文は漢詩を作りました。詩作や文章を馬鹿にするようなことはなかつたと考えられます。大正時代に入つてはもうこうした「詩」心は政治家と無縁になつたもののようにです。博文の競争相手ともみられる山県有朋が唯一の例外ですが、これは乃木大将とともに軍人といふべきでしょう。また、有朋は、歌が風流の余技になつて、実生活の表現とならなかつたのが欠点です。大正天皇は歌よりも漢詩を好まれたらしく、漢詩の価値が高く評価されていますが(木下彪氏著「大正天皇御製詩謹解」参照)、大正時代では漢詩は

既に国民生活全体に対する滲透力を失なっていて、国民的連帯感情から遊離しがちです。大正天皇が御病弱の故もあって国民生活から遊離せられたようにみられる原因の一半はここにあったのかも知れません。もともと大正天皇には歌集もおありで、御病気までのすぐれた御歌が残されています。（「短歌のすすめ」参照）

今上天皇は、最初から明治天皇にならって歌をよまれたと想察されますし、そのみ歌は「歌人天皇」と申上げることのできるすばらしい作であると思いますので、明治天皇の歌人政治家の後継者といふことができます。（拙著「歌人・今上天皇」参照）。しかし、今度は、戦後の「日本国憲法」が政治の世界から天皇を締め出してしまいました。政治と短歌との分離は完成したとみてよいでしょう。ひろく、文学と政治とも今日では全く対立矛盾するものと考えられるようになってしまいました。

そこで「政治」は「歌心」と全く相反するものとなってしまうたのです。「政治」は徹底的な利害の闘争、権力の争奪戦となってしまうと、国民生活は共通の地盤としての国民的連帯感を失ってしまったのです。こうした「歌心」——連帯感情のないところに真の立法精神の生れるはずはありません。憲法を制定し守ろうとする原理そのものが弱

くなつてしまつてゐるのです。国家の基礎がぐらついてしまつたわけです。

一方、独裁全体主義国家においては、その政治的指導者が思想芸術を統制するという現象が生まれました。つまり「政治」が「詩」を支配したのです。それにくらべれば「政治」と「詩」との乖離乖も悪くありませんが、政治家が詩的精神に欠けたのでは、いわば人間的な意味での不具者が国民生活全体の運命を牛耳ぎやうじることになるのですから、全く危つかしいことです。幸い、日本の戦後の指導者はアメリカに追随して大過なく今日まで来たようですが、アメリカの政治家の文章にあるような宗教的情操も芸術的感覚もないのでは、追隨も長つづきしないし、また追隨ばかりでは国民もたまりません。現在の平和と繁榮とは、敗戦日本の復興に立ち上つた戦中派がアメリカ式個人主義と自由主義とを取入れ、必死の努力をしてかち得たものです。政府の政治力はごくわずかだつたと思ひます。したがつて現在の平和と繁榮とを享樂する精神からは次代の繁榮を期待することはできないでしょう。

日本歴史の中で北条氏と徳川氏とがとりわけ「歌心」と遠かつたことを、鎌倉初期のあの恐ろしい暗黒政治や徳川時代の階級制度と對比させて考へてみたいと思ひます。も

つとも、ただ歌をつくれればいい、どんな歌でも作ればいいと言っているわけではありません。正しい歌の道をめざすものでなければならぬことは言うまでもありません。それにしても、つくらないのはいいもわるいもないのです。少くとも歌をよんで感動するという程度の「歌心」は日本人の教養として欠くことのできないものだと思います。戦前戦中の官僚政治や軍人支配が非人間的であったことの一因もまた「歌心」の喪失にあったと言えましょう。

私は自分の作歌の体験をふりかえってみて、短歌が作者にとって一の宗教的行為であることを感じています。少くとも短歌をよんだり作ったりして味わうよろこび、たのしみというものは、宗教の目ざす解脱の心情に似ているかと思っております。だから、歌をよむということは芸術的作業ですが、同時に一種の「行」^{ギョウ}でもあると思います。

この歌の宗教性というのは、つまるところ、自分が国語世界の一員であるということ、国民同胞の一員であるという感じです。一種の帰属感情ですから、性質としては宗派宗教の同信同朋の感じと似ています。しかし「短歌宗」などというものは成立しません。

それは、国語というものが普遍的ですから、徹頭徹尾国語に依存する短歌表現は、国語社会の全体に通じることを前提とするからです。もっとも同一趣味信仰にもとづく短歌結社というものがありませんが、これは一種の研究団体で、短歌を独占するものでもなく、短歌の普遍性をそこなうものでもありません。短歌はこの国語世界という事実にもとづいて、それを通して普遍的人間性・人道的価値を実現しようとしています。そこで短歌が日本人すべての教養とされたわけで、そういう話は枚挙にいとまありません。いわば短歌は、国民文化の潜在的のバック・ボーンであったわけでは、

ところが、短歌に対するこうした自明の認識は明治以後薄らいで、短歌は文芸の一式として、俳句や詩や小説と並列関係においてみられるようになりました。そうして、それらをひっくるめての文学は、創作と切りはなされた知識として教えられるようになったわけです。したがって、近代日本の支配階層に入るのに文学的教養などは不要なのです。

それが日本の近代化として日本人がその生活を向上させるのにとつたやむを得ぬ「伝

統の放棄」であるとするなら、それも致し方のないことですが、それならば、明治以前の歴史において短歌のはたして来たような国民文化のバック・ボーンを、現代文明のただ中に創造しなければなりません。政治家が短歌をよむという、詩心と政治との統一、いわば「詩人政治」という文化理想に代りうるものを近代日本は生み出すことができたでしょうか。明治天皇・今上天皇という歌人天皇がそうだといえればそれまでですが、今日の政治家の姿はどうでしょう。

仏教もうしない、儒教もうしない、かといって長い東洋文化の伝統のゆえにかえってキリスト教に熱中することもできず、マルキシズムにも走りえず、ただ自由主義とか民主主義とかいう御都合主義の借りもののイデオロギーで、国民文化の統一すなわち国民的連帯感情の原理が維持できるとおもったらとんでもないことです。現に、日本は、外国の利害によって左右されるイデオロギーの決戦場となってしまうと、不安と苦悩との日常生活を送っているわけです。マルクス・レーニン思想はソヴェト・ロシアと中国との国家原理であり、自由思想の母国はイギリスであり（斎藤勇氏著「英国国民性」）、デモクラシーはホイットマンのいうとおりアメリカの建国の精神、いわば一種の国民的宗教の

原理です。(ホイットマン「草の葉」参照)。それをただ単に社会制度として、あるいは選挙の方法としてしか受取らないところに、「歌心」を失った日本の知識階級の思いあがりがあるのでしょう。政治的経済的行動と宗教的芸術的思想とはなればなれになってしまったところに、実生活の人生的意味を思わないところに、つまりは生活に夢を失ったところに、今日の日本の最大の問題があるといえます。

その点、かつての日本は、詩人政治を理想としてその建国以来の歩みをつづけて来たといえます。歴代天皇が歌人であったことがその理想の象徴といえましょう。また歴代政治家の詩的教養も今日の政治家にくらべれば段ちがいなものだったといえます。現代世界の政治家たちの文章を読むと彼らは思想家として政治に当たっていることがわかりませんが、日本の政治家の文章をそれに比較してみるとがっかりしてしまいます。この落差がマッカーサー元帥をして十二歳の日本人と言わしめたと思えば腹も立てられません。この落差がやがて日本をして荒野をさまよわせる結果となることは、歴史の殷鑑です。

五 歌会始詠進のこと

歌会始うたかいはじめは新年恒例の宮中行事で、天皇陛下の御出席のもとに、天皇皇后両陛下はじめ皇族方の御歌、召歌めしうた（特に詠進を召された人の歌）選者の歌ならびに預選歌よせん（選に預った歌）を披講うたごかい（朗詠）する儀式です。「歌御会始」とも言いました。この儀式の起源は古く、奈良時代に遡ることができるようです。万葉集卷二十に大伴家持が書いているところによりますと、天平宝字二年（七五八）春正月三日、宮中に宴会があった節、諸王卿に対して「歌を作り詩を賦ふせよ」との勅みことりがあったといっています。彼の秀歌の一に数えられている、

初春はつはるの初子はつこの今日の玉箒手たまはらきに執とるからにゆらく玉たまの緒を

はその折の作であったと書いています。しかし彼は職務上の都合でこの歌を奏上することができませんでした。また、つづいて七日の侍宴のためにも歌を作っています。これ

を見ますと、当時朝廷の新年の宴会の折に一種の歌会のようなことが行なわれたとみる
 ことができます。平安時代に入って「古今集」(九〇五)の序文に、

△最近世の中が華美に流れ、人の心が浮薄になって、軽薄な歌ばかり出てきたので、
 歌はただいろごのみの家に隠れて、まじめな世界には出すこともできなくなりました。
 った。そのはじめはこうではなかった。昔の歴代天皇は春の花の朝、秋の月の夜ごと
 に、侍臣を召して、ことにつけつつ歌を奉らしめたまうのであった。▽

と書いていますから、「古今集」の出る頃には一時歌会なども行なわれなくなっていた
 のかも知れません。漢詩の会が行なわれていたのでしょう。

その後、和歌所の設立、「歌合」うたあわせの流行などもあって宮中の歌会も復興したようです。
 平安時代から鎌倉時代へかけて、朝廷における新年歌会の記事が公卿の日記の中に残
 っています。毎年行なわれたものかどうかよくわかりません。また、正式の儀式であ
 ったものかどうかともわかりません。これが宮中恒例の年頭行事となったのは後土御門天
 皇御在位(一四六四—一五〇〇)の御代のことといわれていますが、私にはまだはっきりわ
 かりません。

豊臣秀吉が聚楽第に公卿武将を集めて皇室に対する忠誠を誓わせ、行幸を仰いで歌の会を行なった（天正十六年＝一五八八）ことは、近世の国民的統一を象徴する画期的の行事ですが、宮中の歌会に範をとったものでありましょう。

桂離宮にある年中行事の屏風絵を見ましたところ、宮中行事の第一が四方拝の儀で、つづいて歌会始の儀式の図がありました。徳川時代の初期には宮中の年中行事として定着していたのかも知れません。

しかし、毎年恒例の行事として確定したのは、明治二年からのことだそうです。「孝明天皇紀」を見ますと、宮中における歌会がさかんに行なわれていきますから、明治二年にこれを制度化したもののようです。明治三年には、皇族、華族、勅任官以上のものに詠進させましたが、明治五年には範囲を広めて判任官以上に及ぼし、さらに明治七年には一般国民の詠進を許されることになりました。

昭和三十七年、住吉大社から、西宮一民教授の編著で「新年御歌会始歌集」という書物が出ました。この書物に、明治二年以降の歌会始の歌が全部出ておりますので、見るとわかりますが、明治十年前後までは、在朝の高官の詠進があつて、三条実美さねとみ、岩倉具とも

視、松平慶永、伊達宗城、副島種臣、佐佐木高行、戸田忠至、大木喬任、木戸孝允、大久保利通、山県有朋などのいわゆる政治家の詠進も見られました。一般国民の詠進が盛んになるとともに、いわゆる政府高官の詠進が稀になってしまったことは、まことに残念なことでした。

明治十二年には、一般国民の詠進の中の優秀のものを数首選んで天皇の御前で披露（朗詠）するようになりました。ほぼ、今日の形式が出来上ったのです。

爾来、天皇の御服喪、御旅行による御欠席のために欠けた以外には欠けることなく、今日まで行なわれてきました。天皇の御前で行なわれる儀式ですから、御病気などで天皇が御出席になれない場合には流会になるという定めですから、天皇の御出席が単に儀礼的なものでないことがよくわかります。昭和十九年、二十年という国家非常の時にも欠かさず挙行されたことにも、今上天皇のこの歌会始に対するおぼしめしが仰がれます。昭和二十三年からは、今上天皇のおぼしめしによって、預選歌の作者が儀式に参列することを許されました。また昭和三十七年にはこの儀式の模様をはじめてテレビで報道され、国民すべてが見聞することができるようになりました。テレビ放送で、全国民の

間接的参加が可能となったので、いわば全国民的の規模で行なわれる歌会始ということができましよう。

前年に発表された、天皇によって定められた歌の題（御題とも勅題ともいう）で、一定の書式によって誰にでも出詠できるのです。書式も題と一緒に発表されて新聞に出ます。そうして出詠された歌の中から選者が預選歌を選ぶのです。自作が御前で披講せられるということは非常な名誉のことですから、預選歌に選ばれることをねがうのは人情ですが、この歌会は、国民が天皇のもとにその年のはじめの心をあらわす一首の歌を詠進して、天皇の御歌をも拝誦するという、いわば天皇と国民とが歌によって心を通わすということが根本の趣旨であると思われます。それであれば、自己の卒直な思いを「詠進」するということに専念すべきで、懸賞募集短歌の投稿のような心掛であってはなりません。

一般国民の出詠が漸増して、明治末期から三万を越え、最近もそうした数ですから、明治時代のように天皇が出詠歌すべてに目をお通しになることが大変なことだとも拝されますが、詠進するものの心がけとしては天皇の御てもとに差し出しまつるという心を

もって詠進すべきでしょう。例年のことながら、テレビによって見ていても、日本国民の内的の統一感のふるさとがここにあると感じます。歌をよむことの意義もまたこの儀式によって象徴されているように感じます。日本独自の不思議な行事です。しかもこの行事に陪席した外国人が深い感動を受けたことを見ますと、外国の人の心をも打つ普遍的な価値をもった行事であることがわかります。イギリスの桂冠詩人ブランデン、アメリカのヴァイニング夫人の美しい感想記があります。この歌会始に詠進をすすめる意味の関正臣氏（横浜・舞岡八幡宮司）の文章を「国民同胞」61号からかりて、ひろく詠進をおすすめしたいと思います。書式その他は前述のとおり新聞発表によればよいのでごく簡略なものです。

（夜久 正雄）

△ 御歌会始詠進のこと——関 正臣 △

僕は、御題が発表されると直ぐにそれを手帖に記しつける。そして其の一年間を、其の御題で以て過すことにする。つまり、御題を念頭に置きながら、自分にも問ひ外界にも接するのである。

例へば「光」といふ御題があった。そうすると、一年中、光に注意し続ける。そして、

只一つの光をつかまへようとして努力する。何故なら、光にもいろいろあり、色々な感じが生まれて来るのに、詠進は「一首」と限られてゐるから。

今年は「魚」だった。僕は誰にも言はなかったが何時も魚を追ひ廻して来た。魚河岸や海にでも行かねばなるまいと本気に考へもした。ところが、偶然にも雲仙の近くの田んぼの溝で、大きなオタマジャクンが一杯泳いで居るのを見付けてこをどりする程嬉しかった。然しオタマジャクンは蛙の子であつて魚ではない事に間もなく気付いて、がっかりしてしまった。かういふ当り前の事にも気付かぬ位、とらはれてゐたのかも知れない。伊豆の三津にも、その後で、出かけたが、やはり駄目だった。

僕は今年、魚を取り逃してしまった。しかし、陛下は必ずしつかりと掴まへておいで遊ばすので、それを早く拝見させて頂きたいと今からお待ち申上げている。

「泉」「窓」「紙」といふ様な、目に触れるものは良いが「朝雪」とか「春山」とかに成ると、それぞれむつかしく成る。愚にもつかぬことだが、僕は、朝雪と雪朝とどの様に違ふのかについて相当長く考へ込んでしまった。雪の種類についても調べたりした。

その副産物として、文学的な雪には八種類はあることや、明治天皇が「夜雪」をお詠み

遊ばしてをられることも知った。

今、言つた様に、此の程度ならば、まだ良い方である。何とも閉口したのは「若」であつた。「若い」なのか「若さ」なのか、さっぱり見当もつかないまま、殆ど諦めかけて居た時「僕にとって『若』とは皇太子そのものなのだ」と気付いて、すっかり思ひ開かれたことも、いま省みて懐しい。しかも此の時、陛下は、ローマ・オリンピックで活躍する若人の姿を、はっきりと、つかまへていらっしやつた。それが何ともいへず嬉しかった。

分らぬと決め込んで居たものが、実は簡単具体的であつたり、一見簡単至極のもの——例へば魚——が到頭出来なかつたりといふのは、何かしら暗示的だが、打ち込み方の問題であることは確かである。

僕が、こんなに考へ続けるといふのは、陛下の思召を、何とか具体的に——といふのは、自分のものとして——畏まうとする気持からである。陛下と国民とが、一つのことを考へ、一つのものを追及しながら一年間を送る——これは実にすばらしいことではないだらうか。思ふだに心が弾んで来る。かういふわけだから、僕の詠進といふのは、陛

下に対する一年間の生活レポートといふことに成る。

「土」という御題があった。僕は其の頃、常に死を決して居たので土は即ち墓所であったから、そのやうに詠進した。ところが、陛下は「草を植えるためにやわらげる土」をお詠み遊ばした。これは僕にとっては、大変な驚きであった。僕は、自分の力みかへった姿が実ははづかしく成ったし、センチメンタルな態度を吹き飛ばされたやうに感じた。

かういふ感じは、実は、毎年、必ず、体験せしめられるのである。勿論僕は、自分の詠進歌を、御製とくらべて見ようなどといふ不埒ふちな考へを決して持つものではないが、自分の、いはば全力をしぼった上で拝する御製には、いつもきまった叩きのめされた様な——どうも適確に形容出来ないが——そして濶然と眼前が開けた様な実感を味はう。これが「分」といふものであらうか。

とも角僕は、今後も詠進を続けるつもりだ。選者に取捨選択されて、没にされる世上の募集とは全く異り、詠進は、しさへすれば、上手下手にかかはり無く、必ず陛下が御覧下さるといふ、それだけで満足至極であるから。（歴史的かなづかひ）

六 表現と思想

——習作と添削——

- (1) 全体としての感想
- (2) 作者の心を理解する努力
- (3) 正しい表現への修練
- (4) 概括的表現を避けよ
- (5) 切実な経験を詠め

本章一の序説から、歌を作る心の働らきをふりかえってみて、歌を作る意味を考え、また、日本の歴史の中で歌がどういう働らきを果してきたかということについて気づいたことのいくつかを述べてきました。歌を作ることには深い意味があり、大きく言えば、ここに日本の国のいのちがやどっているとさえ思われます。しかし、頭の中でその意味がわかっていても、実際に歌を作る経験を持たなければ、その意味は、理論でわかったとい

うだけで、からだでわかったということにはなりません。歌を作る意味は、歌を作ることによって、わかるのです。

そこで私どもは歌をつくりませんが、作ってみてすぐわかることは、思うような表現ができないということです。初めて歌を作る人はもちろんそう感ずるでしょうが、何十年作っていても、なかなか満足ゆく表現をすることができません。いつでも初心の苦勞と同じことです。

それで、歌を作る人は誰でも、自分で作った歌を自分でもよく直し、また人にも見せてその意見を聞き、満足のゆく表現を得るように努力します。これが、習作と添削です。

表現したいことがあって、それをまずことばにして心の中で五七五七七にならべますが、ことばの順序だとか、単語そのものの適否だとか、頭の中だけでやっているとはつきり考えられなくなります。そこで今度は、文字に書きあらわしてみ、それを歌の調子にあわせて読み返してみ、言葉を練ります。内容に対して最も適切な言葉をさがし

ます。また、最も適切な音調になるように、何度も何度もくり返えます。そして、満足のゆかないところがあれば、さらに推敲すいこうします。

こうして、ようやく満足に近い表現が得られても、人がそのままに味わってくれるとは限りません。正しいと思っている言葉づかいが間違っているかも知りません。そこで、自分の作った歌を発表して、人の意見をきくことが大切です。人の意見を聞いてまた考え直してみるのです。

こうして一步一步完成へ向っての努力をつみ重ねるのですが、この表現努力の過程が短歌創作の内容であり心の練磨の過程でもあるわけです。習作と添削ということは、短歌創作の内容そのものといふことができましょう。

その習作と添削の一例として、主として大学生がはじめて作ったと思われる歌をとりあげて批評添削してみます。なお、ここに取り上げてご紹介するのは、阿蘇における国民文化研究会主催の『合宿教室』の記録から取材したもので、講評の一部です。

(1) 全体としての感想

歌を詠む場合にはよく経験しますが、「うまい歌を詠んでやろう」と思うことがしばしばあります。しかし、それでは自分の真実というものは表現されません。従って、うまい歌を作ろうと思う気持をつとめて排除して行かねばなりません。人より優れてやろうとか、誇張した表現で人を驚かしてやろうとか、そういう心持を、歌を作る過程の中で排除して行くのです。いい歌を作ってやろうという意識はかなり根強いもので、世間からほめられるような見込みのない私でも、歌を作っている時には、たまには、何かすごい歌でも出来ないかと思うような気持が起ることがあります。まして若い諸君にそういう気持が起るのは、充分納得できますが、歌を作る中でそれをつとめて排除してゆかねばだめです。見かけのよい歌を詠みたいという気持では、ありのままの気持は表現できないのですから、そういう気持と戦いながら、それを排除してゆくとともに、真実の表現に達することが出来る道があります。誇張がいけない、と強くいわれるのは、そう

いう意味があるのだろうと思えます。結局、自分の真実の表現の為に邪魔になるものを排除しながら、真実の表現に向かって言葉を選択してゆく、これが作歌の根本の姿勢です。いくらいい歌を作ったからといって、褒美ほうびが出るわけでもないし、まずい歌が出来たからといって、「お前はだめだからもうやめろ」などということもありません。技巧の優劣を論ずる立場とは、根本的に違う立場で、私はこのことを申すのです。

先ず題材の方から考えて見ますと、合宿へ来て初めて父母に対して痛切な思慕の情を持ったこと、お母さんが恋しいとか、遠い旅に自分を出してくれる時の母親の心配がここに来てしきりに思われるとか、家庭、父母、遠い友人を偲んだ歌が相当数あります。それから、合宿の決意といったものを述べた歌、あるいは合宿に来て喜びや悲しみを感じたり、心のもどかしさを感じたりするというような歌が相当数あります。阿蘇の自然を詠んだ歌もかなりあります。川の流れ、激しく照り注ぐ陽の光、雄大な山なみ、それらの自然の姿がよまれています。これらの素材は、すべて我々の現在の心を動かしたものであり、感動がまだ生きています。現在の感動を歌ったものですから、或る程度生き

生きとした歌が出来る可能性を持った素材であるといい得るでしょう。

形式の方面から申しますと、連作短歌を詠んだらいい、ということをよく納得されて、大体連作の傾向を持つているようです。無理に一首の中に自分の感情を概括してしまふということではなしに、何首かに詠んでいるのは、歌の正しい道を行つて思ふのだと思ひます。

それらの連作短歌の全部をとり上げて批評することは、技術的にも時間的にも不可能ですから、ここに抜かれたものを中心に考えてみます。歌の数も多く、どれも形の上では一応歌になつてはいますが、内容が稀薄という感じがするのです。これは已むを得ない理由もあります。一首に多くの内容をこめよといへば、内容が充実して来ますから、むしろ形式を破るような緊張した強い歌が出来る可能性があります。しかし、自然の感情のままに何首も詠め、ということになりますと、感動の余りない歌が並ぶことになりまふ。ここが連作短歌のむずかしい所です。

感動が稀薄だということはどういうことでしょうか。歌はわれわれが経験したこと、あるいは現在の感動を言葉に表わすことですから、感動が稀薄だというのは、いまの自

分の気持を言葉に把えるだけの力が弱いということでしょう。言葉の修練が不足だから、これも仕方がないと言えはそれまでです。しかし、案外はじめてでも、もう少し強く感動を把えることも出来るのです。自分の経験を強くしっかりとみつめる、把えるということが出来ないのは何故でしょうか。それは強い意志力を持ち、緊張した姿勢で生活している、その心持が薄いからでしょう。心が張って、生き生きと動いているような場合は、自分の感動も、外部の自然も、その細かい微妙な動きまで、我々の目に映り、耳に聞こえるものです。無理に緊張するということではないのですが、平静な心であっても、その心が一つの強い気持を底に持っている、目に見えるものは瞬間の動きまで心に把えられるし、自分自身の心の動きも、その微妙なゆらぎまではっきり言葉に映るものです。もう少し強く求める心があれば、全体がもう少ししまった歌が出来るのです。もう少し調べが緊張した歌ができるのではないのでしょうか。

ここが非常に微妙なところで、一応素直でなだらかで、形がととのっているとしても、その素直さがぼおとして、焦点がぼけていては困るのです。素直であるということが、屈

折を乗り越えて行く強い意志を秘めた素直さでなければならぬ。それがわれわれの心の本当の姿であろうと思うのです。折角合宿に来たのですから、われわれはここで自分の心を鍛えるべきだと思いますし、われわれの求めるものの方向だけでもしつかりつかみたいという気持を持っているわけですから、その気持を強く引きたてて、お互いに訴え合つて行つたらいいのではないのでしょうか。全体としてそういう感じが致しました。

(2) 作者の心を理解する努力

これから一首一首の批評に入ります。初めの方から批評して行きます。私の批評は二回目の習作の後の相互批評の準備としてやるわけですから、批評の根本的態度について最初にお話し致します。

言うまでもなく、一首一首をよく読んで見ることです。一ぺんぐらい読んで、言葉遣いが難しくよく分らない歌があります。しかし、何百年の間名歌として伝わっているような歌だと大体はよく読めば分るのです。ところが、われわれお互いに作る歌には、

言葉の上の間違ひがありますから、いくら読んでも意味がわからない場合が出て来るわけです。語法が間違っているから分らないので、仕方がないのですが、その場合お互いに聞いてみるような努力をして、ともかく相手の気持をよく理解するということが第一段階です。ちよつとみて熟さない言葉などがあると、それを種に全面的に否定するといふような態度は最もいましめるべきです。

それから、いくら読んでもよく分らない、相手の気持に自分が共鳴できないということもあります。その時にも相手の身になって、どうしてこんな表現をしているのであるかと考えてやるのです。自分を主にして考えるのではなく、相手が何を言いたいのか、言いたいことが何かあるのか、どうしてこういう言葉になっているのか、という風に相手の気持を推察しつつその表現を確かめて行くわけです。

(3) 正しい表現への修練

相手の気持によるといふ努力の次に、相手の表現の間違ひを正して行くわけです。そ

れも文法的な誤りは別として、そうでない限りは、こちらから主体的にやるといふよりも、その表現を少し変えることによって、相手の気持がより正確に表現できるように、と考えるのです。従って、この批評というのは、外から批評するというのではなく、あくまで相手の気持を主にしてゆくことだと思ふのです。一所懸命に相手の気持になるということですから、相手が簡単に詠みちらしてしまったものまでよく考えてあげるといふことになります。それは結局、私を無にして相手のためにするという大きな努力によつて、言葉と精神との関係についての修練をお互いに積み上げてゆくのです。「ここは私はどういうように思うけれども、君はどういう気持で作ったのか」「私はこういうつもりでこの言葉をえらんだのだ」「いくらそういうつもりでも、そういう言い方をしでは分らないじゃないか」というようになるのです。皆に聞いてみて、皆がやはり分らない、別に多数決ではありませんが、単に主観的に「おれはこういふつもりでやったのだ」といっても客観性がないでしょう。「それではここはこういふように変えよう」ということになるわけです。字の間違いや文法的な間違いは、字引を引けばはっきりしますから、一語一語努力して正しい表現を作り出して行くことになります。従って、歌の

創作は勿論、その批評もまた、国民同胞感の実現、われわれがお互いに共感共鳴の世界、お互いに心の通う平和な精神の世界を実現する一つの道であらうと思ひます。そういう気持ちでこの次に行われる相互批評もやっていただきたいと思ひます。

(4) 概括的表現を避けよ

実際の批評に入りますが、前著にも同じ題目で書きましたので、二例にとどめます。

○うたわんと思えば迷いに限りなしすつくと歌がよめぬものかな

五首あつて連作の形になつて居ります。その五首の一番最後をここにあげたのです。

私はこの歌を大分考えてみたのですが、「うたわんと思えば」というのだから、歌を歌おうという意味なのでしょう。それならやはり「歌を歌わん」という風に表現した方がよい。あるいは「歌を詠まん」という言葉があるのですから、その言葉を使った方が

よかったのではないでしょう。か。「歌う」という言葉は現代語として「歌を詠む」という言葉ではなしに、「声唱する」という言葉として使われているのですから、作者は或いは声を上げて歌を歌うように歌が詠みたいと思ったのかも知れません。しかし、それならちよつと無理な表現です。「歌わん」といえばやはり声を上げて歌う形になると思います。また「うたわんと思えば」の仮名遣いはどうでしょう。短歌のような韻文で文語の語法を基本にするものは、歴史的仮名遣いで書くのが正しい表記法です。従って「うたはんと思へば」と書くのが正しいのです。

常に「思えば」の「ば」を文語的語法によって詠まれているのだと考えて行きます。そうすると「うたわんと思えば」というのは「歌を詠もうと思うので」というのか、「歌を詠もうと思う」というのか、ここもちよつとはつきりしない。恐らく後者でしょう。それに「迷いに限りなし」と続くのです。これも不正確です。迷いが限りないという意味でしょうか。歌を詠もうと思うと迷いが限りなく出て来るというのでしょうか、その迷いというのも漠然としています。歌を詠もうと思うと迷いが限りないというのは、胸中の思いをどんな言葉に表現していいか分らないということだと思います。それなら、

そういうように詠んでもらわねばならないわけです。「歌を詠もうと思うけれども、いい言葉が見つからないので、なかなか歌ができない」というのであればわかります。難しい事でも何でもありません。ところが「迷いに限りなし」というと、その迷いは「煩悶」のようにも受け取られます。「歌を詠もうと思うといろいろな問題が出て来る」したがって「やめればそれが消えてしまう」という意味にもとれます。そういう事もあり得るでしょうが、その場合でも「迷い」では不十分でしょう。もし自分に迷いというものがあつたら、その迷いを真向から歌えばいいのです。「迷いに限りなし」というようなことで止つてしまうと解決や進歩はないでしょう。迷いが本当に限りないかどうかも分らないままで終つてしまうのです。そういう精神の低迷を破るのが歌の表現ではないかと思ひます。

この歌は一首二文になっているので意味が分りにくくなるのですから、むしろ二首に読めばいいのです。「うたわんと思えば迷いに限りなし」というのをもう少し細かく、「歌を詠もうと思うけれどもなかなかいい言葉が見つからないので、とても言葉にならない」という歌を作るのです。それから「どうして自分は心が乱れるのであろう。心が

はっきりしないのであろう。もっとはっきりした歌が詠みたいなあ」というように詠めば、人にもわかる歌になるし、作る人も必ずはっきりした歌が詠めるようになります。すっきりした歌が詠みたいという思いを持ち続ければ必ず何かの機会に心の転機を求めることが出来るはずです。その気持ちをそのまま次のように詠んだらどうでしょうか。

○うたよまむと思へど心すべかねてすっきりとした歌をよみえず

(5) 切実な経験を詠め

○りんりんと鳴く虫の音はもの悲しバスの娘はいかにしつらん

この歌は作者がここに来るまでの経験をうたった八首の連作の最後の歌です。バスの自分の席の前に座った娘さんと笑み交わしたりして心が通ったというような歌もあります。或る人が私に、「自分が恋愛の歌を見せたら人が笑ったから、これからは絶対に人に見せない」といったことを覚えています。歌は切実な経験を述べますから、その内容

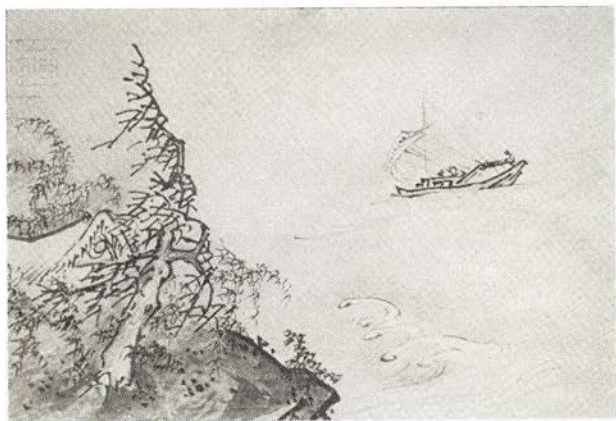
について笑ったりするのはよくないのですが、この歌は多少笑っても大丈夫だろうという感じを持っています。非常に切実に詠んでいるのではなく、全体として割合に軽く詠んでいるのです。八首全体がフワツとして軽いのですから、多少からかってもそれほど心を痛めることもないと思います。「バスの娘」に相当惹かれているようですが、歌の調子はきわめてのんびりしています。この歌はやはり一つに分れているでしょう。「りんりと鳴く虫の音はもの悲し」で切れてしまっています。心が強く張って全体を一言に言うだけの痛切な気持がないわけです。最初にちよつと言つて、それからもう一つくつつけるという恰好になります。前のものと後のものが俳句のように、虫の音とバスの娘を対照してみせるような恰好になってしまっています。「もの悲し」と言つたところで、それほど悲しそうには見えない。何故かという、りんりんという言葉がよくないので。「りんりと」虫がなく時には、もの悲しいというよりも、もっと緊張した感じがある筈です。もの悲しい虫の音というならば、何か別の言葉を使って表現すべきです。ちよつと直してみました。

○かのバスの娘の思はれて今宵鳴く虫の高音の心にしみる

(夜久 正雄)

第二部

短歌のしおり



雪村筆「風濤山水図」

第二部 短歌のしおり

- 一 大津皇子——万葉の悲劇的精神
おおつのみこ
- 二 柿本人麿と山上憶良——万葉の「ますらを」たち
かきのもとのひとまろ やまのうえのおくら
- 三 孝明天皇の御歌
みうた
- 四 明治天皇の御歌

一 大津皇子

——万葉の悲劇的精神——

(1) 大化改新前後

七世紀後半の古代国家成立の時期は、豪族社会から律令制国家への巨大な変革の時代でした。その変転する歴史の中で、二十四年という短い悲劇的生涯を閉じた天武朝の青年王子、大津皇子おおつのみこの像を描いてみたいと思います。

六四五年という年は、古代史における最も重要な時点の一つです。中大兄なかのおおえのみこ皇子の果敢な決断によって、この年の六月、大化改新が断行されました。皇室の上に加えられていた蘇我そが一族の圧力は、このクーデターによって一挙に潰滅しました。しかし、この公地公民の原理の上に立つ新しい国家組織への転換は、決してスムーズに行われたものではありません。それは重たい車輪の軋きりのようなものを伴っていました。

既に早く、入鹿いらくが大極殿に於て誅に伏して三月の後に、古人大兄皇子ふるひとのおおえのみこの謀反があり、中大兄皇子おほなかつのおおえのみこによって鎮圧されました。この二人はひとしく舒明天皇じよめいを父としながら、前者は蘇我馬子の女法提ほての郎女いらつめを母とし、後者は皇極天皇こうぎよくを母としてるところに、このよ
うな運命を招く一つの必然があつたと思われます。

続いて六四九年(孝徳天皇大化五年)、大化改新に中臣鎌子なかとみのかまこ（藤原鎌足ふじわらのかまたり）と共に枢機に参画した右大臣蘇我倉山田石川麻呂くらやまだのいしかまろが蘇我日向ひむかの讒言ざんげんによって皇子に討滅されました。「皇太子の海辺に遊びたまふを伺ひ將に害そこなはむとす。反そむきまつらむこと其れ久しからじ」という密告によって、この純忠至誠の重臣は自経して死んだのです。改新後の政局の中心にあり、しかもその娘の二人までが、中大兄皇子の嬪ひめとして迎えられていることを考えれば、事態は極めて複雑です。その愛妃の一人造媛みやつこひめは、父の死を傷心して死にました。皇太子の悲嘆を見て、川原史満かわらのふひとみつというものが、皇太子に代つて歌をよんだということが孝徳紀に見えます。その歌は次のようなものでした。

山川やまに鴛鴦うし二つ居てたぐひよくたぐへる妹を誰か率みにけむ

もと毎に花は咲けども何とかも愛し妹がまた咲き出来ぬ

恐らく書紀は民謡を借りて来たのでしょうが、哀切の情は胸に迫るものがあります。

斉明朝に至って、六五七年には孝徳天皇の皇子、有馬皇子の謀反がありました。孝徳天皇の時代には、政権の實質は既に皇太子中大兄と鎌足の掌中にあり、しかもその宮廷を支えていた阿部倉梯麻呂と蘇我石川麻呂の相つぐ死によって、天皇は次第に政治的に孤立しておられたのです。そして晩年は仏教に深くみ心を傾けながら、そういう孤独の中で崩御されたのです。いわば舒明——皇極という一連の政治勢力から完全に疎外されたのです。有馬皇子の謀反のかげに、父のそういう無念の思いを晴らそうとする意識があったことはほぼ確実な想像といえるでしょう。ともかく、有馬皇子は蘇我赤兄の挑発にのって反逆をこころみ、中大兄皇子によって紀伊の藤白坂で絞殺されたのです。万葉卷二はその挽歌の部に、次のような皇子の辞世をのせています。

有馬皇子、自ら傷みて松が枝を結べる歌一首

磐代いわしろの浜松が枝を引き結び真幸まゆきくあらば亦かへり見む
家けにあれば筥けに盛る飯いひを草枕旅にしあれば椎しひの葉もに盛る

御年わずかに十九歳であつたのです。この政治的策謀にたおれた皇子に対する時人の同情は、結び松に対する回想となつて、万葉にそのあとをとどめています。

そして、こういう一連の政治的肅清を貫いているのは、一見非情とも見える中大兄皇子の意志です。しかも、これらは常に複雑な肉親の關係をその間に介在させることによつて、一種凄惨な色彩で古代史を彩つて行くのです。

(2) 大伯皇女おおくのひめみこと大津皇子

有馬皇子の謀反があつた年から四年目、齊明天皇（皇極天皇重祚ちゆうそ）の治世の最後の年である六六一年、朝鮮半島では新羅しらぎが唐の支援のもとに百濟くだらに侵寇しました。その救援のため、正月、王師は内海を渡つて西征しました。その途中、齊明紀によれば「御船、

大^{おお}伯^く海^{のひめみこ}に到る。時に大^{おお}田^た皇^の女^{ひめみこ}を産む。仍りて是の女を名づけて大^{おお}伯^く皇^の女^{ひめみこ}と曰ふ」とい
う出来事が起りました。この西征に額^{ぬかた}田^た王^{のおおきみ}が従ったであらうことは、彼女の有名な

斐^ひ田^た津^つに船^{ふね}乗^りせむと月^{つき}待^てば潮^{うしほ}もかなひぬ今は漕^こぎ出^ででな

の一首によって想像出来ます。その他皇太子中大兄皇子は勿論、大^{おお}海^{あま}人^{まの}皇^{みこ}子^こ（中大兄皇子の弟で後の天武天皇）や多くの妃達も同行されたようです。古代の女性は、王朝期の女たちとは違って、軍陣の緊張にも耐え得るものであったようです。前掲の書紀の記事の大田皇女は、中大兄皇子の女で、大海人皇子の妃でした。十年の後には運命的な敵対関係に入らざるを得なかったこの二人の偉大な皇子の間も、この時にはまだ共通の目標によって固く結びつけられていたようです。大田皇女と、大海人皇子の正妃であった鸕^{うの}野^の皇^{ひめみこ}女^こ（後の持統女帝）は共に中大兄皇子を父とし、前述の蘇我石川麻呂の女遠智娘^{おちいらつめ}を母とする姉妹であって、前者は大海人皇子との間に大^{おお}伯^く皇^の女^{ひめみこ}と大津皇子を生み、後者は大海人皇子との間に草壁皇子^{ひなみしろのみこ}（日並皇子）を生んでいます。

この年七月、斉明女帝は筑前朝倉の行宮で崩御され、外征は中止されました。大化改新以来、孝徳、斉明二朝に、皇太子として敏腕を振った中大兄皇子は、直ちに踐祚せんそすることなく、臨朝称制（天子に代って政を執ること）という形をとられました。斉明朝の巨大な土木工事や、大規模な外征は、その行きづまりと共に、豪族層の動向に注目すべきものがあつたからでしょう。しかも大陸への派兵は続けられ、天智天皇治世の二年、六六三年にいたって八月、白村江の戦いで大敗し、大陸の前進基地は放棄せざるを得ない状態に追いこまれました。それにともなつて百済の文人、学者、技術者でこの国に亡命するものが多かつたと書紀は記しています。この年大田皇女は皇子を生みました。これが大津皇子です。大伯皇女と大津皇子は二人きりの姉弟でした。そして、母の大田皇女の没年は明かでありませんが、六六七年に斉明天皇と間人皇女まひとのひめみこ（孝徳天皇皇后で天智天皇の妹）を小市岡上陵おかのへのに葬った時、この皇女を陵前の墓に葬ったという記事が天智紀に見えるところからすれば、この年以前になくなつておられたことになります。とすれば、大津皇子は五歳に満たずして、姉の大伯皇女は七歳に満たずして、既に母を失つていたことになります。そして、この六六七年という年は、天智天皇が永年の懸案であつた近江遷都を、

幾多の反対を押し切って断行された年でもありません。遷都は三月に断行され、天智天皇からは孫に当る、母のないこれらの姉弟達は近江の宮廷で育てられたのでしょう。これらの姉弟を育てた人として、あの額田王を擬する仮定もあり得ぬことではありません。天智天皇は特に大津皇子を愛されたということが持統紀に見えています。ともあれ、この皇子は幼年既に薄命であったのです。

(3) 壬申じんしんの乱

六六八年正月、天智天皇は正式に践祚せんそされ、弟の大海人皇子は皇太子とられました。改新以来不断のたたかいと緊張の中に過して来られた天皇は、正式に帝位に上って無量の感慨を抱かれたことでしょう。この年は正に近江朝の栄光の年でありました。しかし、翌年には十月に藤原鎌足がなくなりました。天皇は永年苦難の道を共に開拓して来た最も有能な謀將を失われたわけです。ただそれだけではなく、天皇と皇太子、この二つの強烈な個性を調整する者がいなくなつたわけです。事実、この前後から近江朝はただな

らぬ雰囲気につつまれて来ます。特に六七一年になると、大海人皇子を圧するように、大友皇子の姿が宮廷の中心にクローズ・アツプされて来ます。この年大友皇子は太政大臣となり、又有馬皇子の叛乱の時、不可解な行動の多かった蘇我赤兄が左大臣に、中臣なかとよ金かねが右大臣となって、政局の中枢は著しく反・大海人皇子の色彩を濃くしました。九月、天皇は病にたおれ、弟の大海人皇子に後事を託されましたが固辞して受けず、十月、皇子は剃髪して吉野へ脱出されました。不安のうち十月に至って天智天皇は崩御されました。改新以来、巨大な変革の中心となった人格は、かくして地上から消えたのです。そして六七二年、古代史の帰趨を決する壬申じんしんの乱が、六月に勃発するのです。

壬申の時、大津皇子は十歳の少年でしたが、近江を脱出して父、大海人皇子の軍に投じました。吉野側の幕下の中心は高市たけちのみ皇子みこであって、大津皇子とは異母兄弟でした。その英雄的風姿は人麿の長歌の中に、感動をこめて活写されていることは周知の通りです。この場合、十歳の少年が、骨肉間の宿命的な死闘をどのような気持でながめ、感じたであろうかは勿論知るすべもありません。六月二十一日の大海人皇子の挙兵から、七月二十四日の大友皇子の死に至る月余の動乱は、大海人皇子の勝利に帰しました。六七三年

二月、大海人皇子は即位しました。これが天武天皇です。大津皇子は十一歳から二十四歳まで、即ち少年期から青年期への多感な日々を、父天武天皇の治下に送ることになるのです。

(4) 十市皇女といちのひめみこ

十市皇女は、大海人皇子と額田王の間に生れた王女です。そして大友皇子の妃でした。壬申の乱はわが父とわが夫との間に戦われ、そして結果として父によって夫は殺戮ころりくされたのです。この皇女の立場こそ、まことに歴史の悲劇という名に価するものでしょう。伝説によれば、近江朝の動きを積極的に吉野方へ通報したといわれ、鮎の割いた腹に手紙をかくして送ったというごとき説話さえ生み出しています。ともかく、人間的な恩愛と、酷烈な政治の世界との相剋の中に生きた、いたましい犠牲の人といふべきでしょう。乱の平定後は、父天武天皇のもとに余生を送っておられました。六七九年、天武天皇治世七年の四月に急死されました。この日、天皇は天神地祇を祠るため、斎宮を倉梯河

の河上に立て、鹵簿正に出発せんとした直前のことでした。壬申以来、神の加護を深く信じ、神の啓示を唯一の行動の指標として来た天皇にとって、この衝撃が如何に強烈であつたかは容易に想像することができません。皇女の急死が暗示する神祕の恐しさは、宮廷を異常な動揺に捲きこんだに違いありません。皇女の異母弟に当る高市皇子は、万葉卷二に次のような挽歌を残しています。

十市皇女薨じ給ひし時、高市皇子尊の御作歌三首

三諸の神の神杉夢にだに見むと思へどいねぬ夜ぞ多き

神山の山辺真蘇木綿短木綿かくのみ故に長くと思ひき

山吹の立ちよそひたる山清水汲みに行かめど道の知らなく

三首とも意味は必ずしもさだかではありません。まさしく「神呪」ともいうべき神祕につつまれています。二首目は、かくも薄命の君であつたのに、いのちながからむとばかり思っていたという悔恨の情の表現でしょう。三首目は、齋藤茂吉の解のごとく、

「山吹の花が美しくほとりに咲いている山の泉の水を、汲みに行こうとするが、どう通って行ったら好いか、その道が分らない、というのである。山吹の花にも似た姉の十市皇女が急に死んで、どうしてよいのか分らぬという心が含まれている」というのが最も自然だと思われます。壬申の英雄高市皇子に、このような哀切の調があるということは、われわれに改めて万葉の本質を深く考えさせるのです。この時大津皇子は十六歳、この異母姉の悲劇をどのように感じとったことでしょうか。

(5) 草壁皇子と大津皇子

六八〇年、天武天皇の治世八年夏四月、天皇は吉野に行幸されました。壬申以来、始めての行幸でした。八年前、鬱勃^{うっぼつ}たる心を抑えて、氷雨にぬれて潜入した吉野の風景は、勝利者としての王者の眼に、どのように映ったことでしょうか。しかも、天皇にとってこの勝利と満足の日に、天皇のもとで異母皇子達の盟約が行われたということは、歴史の流れを跡づけて来る時、強く心を引かれる事柄だと思われます。即ち、天武紀の記事に

よると、天皇は草壁皇子、大津皇子、高市皇子、河嶋皇子、忍壁皇子、芝基皇子に対して、「千歳の後に事無からむ」ためにはいかにすべきかを尋ねられたのです。これに対して、草壁皇子が進み出て、「吾兄弟長幼、併せて十余の王、各異腹より出づ。然れども同異を別たさずして、俱に天皇の勅の随に、相扶けて忤ふること無からむ」と答え、天皇は衿を披いて六皇子を抱かれたというのです。天皇ご自身の痛切な体験がここに反映しているというべきでしょう。諸王子の協力にこそ、一切が賭けられていたのです。

六八一年、草壁皇子の立太子が行われました。この皇子は、天武天皇の皇后、鸕野皇女（後の持統天皇）の御子で、持統記によれば天智天皇元年（六六二年）の生れですから、この年二十歳の筈です。草壁皇子は日並皇子とも言い、自他ともに許した天武天皇の後継者であったのです。（しかし、この皇子は夭折され万葉集の卷二には、この皇子殯宮（天子の棺を葬送の時まで安置して置く儀式）の時の人麿の挽歌がのせられています。その中で人麿はこの皇子について、「天の下、四方の人の、大船の、思ひ憑みて」と詠み、更に反歌においては次の如く歌っています。

ひさかたの天見るごとく仰ぎ見し皇子の御門の荒れまく惜しも
あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜しも

「あかねさす日」は勿論持統天皇のことであり、「ぬばたまの夜渡る月」は草壁皇子のことです。この挽歌の詠まれたのは六八九年であって、天武朝を去ること四年です。宮廷詩人人麿のレトリックの問題を念頭に置いて、なおこの皇子が当時の宮廷に占めていた位置と声望をうかがわせるのに充分です。又、それにつづいて、皇子に仕えていた舎人たちが慟傷して作った二十三首の歌群からは、若き皇太子を中心とした固い精神的紐帯を感じとることができます。まことに古代帝国の光榮ある未来はこの皇太子にかかっていたのです。

これに対して大津皇子は持統紀に、「容止墻岸、音辞俊朗」とあります。才学があり、文筆を好み、「詩賦の興、大津より生まれり」ともあります。又、本邦最初の漢詩集である懐風藻には「状貌魁梧、器宇峻遠。幼年にして学を好み、博覽にして能く文を属る。壯に及びて武を愛み、多力にして能く劍を撃つ。性頗る放蕩にして、法度に拘

らず、節を降して土を礼いびたまふ。是れに由りて人多く附託す」とあります。身体、容貌が大きくたくましく、度量が大きく、文武にすぐれ、高貴な身分をへりくだって、人士を礼遇したといふのです。古代帝国の皇子にふさわしい、豪放俊敏な英雄であり、独立不羈ふの人格ゆえに、若くして宮廷に大きな発言権を持っていたようです。年令は草壁皇子より一つ若年ということになります。一応安定した天武朝の宮廷に於て、このような明確な個性が兩立していたことは、その悲劇的前途を予感させるものがあります。ともあれ宮廷貴族の勢力は、この二人の異母兄弟の皇子をめぐって、大きく兩分されて来るような兆しを示していました。古代の最も英明な帝王の一人であった天武天皇は、恐らくこのような底流を看取しておられたのではないのでしょうか。先に述べた六八〇年吉野に於ける異母皇子達の盟約は偶然ならぬものを感じさせるのです。

この二人の皇子の名は、万葉集卷二の相聞そらもんの部に相接近して見えています。即ち次の如くです。

あしひきの山の雫しづくに妹待いもつと吾立ちわ沾ぬれぬ山の雫しづくに

石川郎女、和にたへ奉たれる歌一首

吾あを待まつと君きみが沾ぬれけむあしひきの山の雫しづくにならましものを

日並皇子尊、石川女郎に贈り賜る御歌一首、女郎字を大名児といふ

大名児おほなごを彼方野をちかたの辺べにあける草の束の間も吾忘れめや

大津皇子の歌の石川郎女と、日並皇子の石川女郎は同一人ではないでしょうか。とすれば、そこには天智、天武の両帝の間に額田王が介在したように、この才気喚発の、そして恐らく美貌であったに違いない一人の女性をめぐる人間的葛藤もあり得ぬことではありません。そして対立は徐々に決定的なものになって行ったのです。

(6) 謀反

六八三年、天武天皇十一年二月、書紀は突然「大津皇子始めて朝政を聴き給ふ」という記事をのせています。朝政を聴くとは、既に皇太子の地位を思わせるものがあります。六八五年正月には、新たに位階の制を定め、六十階としました。諸王以上は十二階（明位二階、大、広あり。淨位四階、大、広あり）でしたが、草壁皇子は淨広一の位、大津皇子が淨大二の位、高市皇子が淨広二の位を授けられました。大津皇子は壬申の乱の立役者高市皇子を抜いて、草壁皇子に迫っているのです。そして、六八六年七月には、「天下の事は大小を問はず悉く皇后及び皇太子に啓せ」という記事が見えます。続いて八月には「皇太子、大津皇子、高市皇子に、各封四百戸を加へ、川嶋皇子、忍壁皇子に各百戸を加ふ」という記事が見えます。天武天皇は最後まで、兄弟の不和の激発をさけるため、あらゆる努力を傾けられたように思われます。九月、み病が昂じて、親王諸臣の祈念もむなしく天皇は崩御されます。南庭の殯宮もがりのみやの時、「大津皇子皇太子を謀反かたむけむとす」と

いう簡単な記事が天武紀の終りに近いところに見えます。

天武天皇が崩御されると、皇后鸕野皇女が直ちに臨朝称制されました。即ち持統女帝です。冬十月、大津皇子の謀反のことが発覚し、とらえられて訳語田かきだの舎いへで死を賜われました。妃の山辺皇女（天智天皇の皇女）は、髪を乱し、素足のまま奔り行きて皇子に殉じました。「見る者皆歎なげ歎げく」と書紀は記しています。大津皇子の謀反については、懷風藻わいふうそうに、新羅の沙門行心せうもんぎょうしんという天文卜筮ぼくぜいをよくする者が「太子の骨法、これ人臣の相ならず、ここを以て、久しく下位にあらば、恐らく身を全うし給はず」と言い、これが直接の動機であったと記しています。又、発覚の直接の動機は、皇子の莫逆ぼくげきの友川島皇子（天智天皇皇子）の密告によることも、同じく懷風藻に述べるところです。しかし、根底には天武朝末期に於ける前述のような政治勢力の力関係があったことは確実です。大津皇子は天武天皇の皇子ですが、精神的な系譜としてはむしろ天智天皇につながるものが感じられます。天智系の政治的色彩をはっきり出している懷風藻に、皇子が一流の詩人として、衆を圧しているのも、ゆえあることでしょう。とすれば、謀反の底流に、天智、天武の対立がまだ尾をひいていることも考えられぬことではありません。懷風藻の皇子



大津皇子を葬った 二上山（後方の左右二峰）

の臨終の詩（五言一絶）は次のようなものです。

金鳥西舎に臨らひ、

鼓声短命を催す。

泉路賓主無し、

此の夕家を離りて向かふ。

金鳥とは太陽です。日は西の家に傾き、時を告げる鼓の音は自分の短い命を、更にせき立てるようだ。死出の路には主人も客もなく、所詮は自分孤りだ。この夕べ、自分は独り家を離れて、死出の路へ向うのだ、という意味です。万葉卷三の、自らをいたむ挽歌は次のようなものです。

大津皇子被死つみえ給ひし時、磐余いわれの池の陂つみにて梯たはを流して御作歌一首
百伝ももつたふ磐余いわれの池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠かくりなむ

詩も歌も、惻々として胸を打つものがあります。こうして、大津皇子は二十四歳の短いのちを閉じられたのです。

(7) 悲歌

大津皇子
皇子にとって、ただ一人の血を分けた姉、大伯皇女はどうしておられたのでしょうか。六七四年、天武天皇二年の十月、皇女は齋宮いづきのみやとして伊勢に下られました。齋宮とはいうまでもなく天皇の代りに伊勢の大神宮に仕える重要な任務であり、未婚の皇女をもつてこれに当てたのです。それ以後十二年、皇女は夢多き青春の日々を神をいつくことに捧げられたのです。皇女が伊勢から帰られたのは、六八六年十一月、即ち弟の大津皇子の謀反が発覚して直後のことでありました。いつの頃かさだかではありませんが、皇子

は一度伊勢の齋宮をたずねられたことがあったのです。万葉卷二の相聞の部には、皇女の次のような歌がのせられています。

大津皇子ひそかに伊勢神宮に下りて上り来ませる時大伯皇女の御作歌二首

わが背子を大和へ遣るとさ夜更けて暁露に吾が立ち霑れし

二人行けど行き過ぎがたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ

夫婦の間の相聞とまがうばかりですが、別れに臨んで弟の心を敏感に感受した姉の心がゆらぐような哀調となって結晶しています。「身にしむやうに聞ゆる」といった契心の心を尊いと思うのです。そして皇子の死後、伊勢から大和へ上ってこられた皇女の歌が、同じく万葉卷二の挽歌の部に四首のせられています。

大津皇子薨じ給ひし後、大来皇女伊勢の齋宮より京に上りし時、御作歌二首

神風の伊勢の国にもあらましを奈何にか来けむ君も在らなくに

見まく欲り吾がする君もあらなくに奈何にか来けむ馬疲るるに

大津皇子の屍を葛城の二上山に移葬りし時、大来皇女哀傷して御作歌二首

現身の人なる吾や明日よりは二上山を兄弟と吾が見む

磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君がありといはなくに

そして以後、この皇女に関しては一首の歌も、一片の記事もなく、わずかに続日本紀の大宝元年十二月の条に、その死を報ずる一行を見るばかりです。二十六歳から四十歳まで、この皇女の身边には歴史の空白が残っているばかりなのです。

万葉第一期といわれる時代が、この大伯皇女の相聞と、大津皇子の辞世と、そして再び大伯皇女の愛弟への挽歌で終わっていることは、万葉全般の基調にある緊張した生命のひびきと無関係ではありません。これらの歌はすべて、現実の歴史の動きと密着して、歴史を生きる折々の切迫した感動の直叙されたものです。この大伯皇女と大津皇子の表現に集約された思いは、やはり古代を生きぬいたすべての人間の悲劇的生の象徴なので

す。ある人は、記紀は皇室の權威を正統づけるために作為された仮構であると言います。しかし、ここに抜き出した書紀の記述は、皇室内部の暗闘さえ目をつぶらずに凝視しているではありませんか。孔子のいう「述べて作らず」という歴史の正道を、修史の業に従った人はきびしく守っているようです。しかも、われわれは万葉のうたによって、歴史事実を生きた、人の心を偲ぶことができます。実にありがたいことだと思えます。

そしてこういう動乱の悲劇の上に、白鳳天平の文化が絢爛けんらんと開花して行ったことを忘れてはなりません。柿本かきのもとのひとまろ人麿以後、万葉の主流を形成する詩人たちは、少くともこの事を肝に銘じていたに違いないのです。いわば万葉を貫く抒情の根源的、原型的なあり方は、こういう悲劇の中から生れて来たことを感じ得なければ、永久に万葉の精神を感受することはできないことを訴えたいと思うのです。

(山田輝彦)

二 柿本人麿と山上憶良

——万葉の「ますらを」たち——

(1) 柿本人麿かきのものひとまろ

人麿の短歌からその思想の核心に迫った批評に、川出麻須美かわでますみの「古代文献に現れたる『中』の思想に就て」(昭和十四年日本諸学振興会における講演)があります。かつて私はこの一節を読みまして、目がひらけたような感動をおぼえました。その一節といえますのは、次の一文です。

人麿は普通懐古の詩人だといはれて居りますが、然し私思ふのに、彼には前途に対する大展望があつたればこそその懐古だと考へられる。それで人麿の歌をよく見ると、どう

も旅に出た時には人は自然の気持になつて本性を現はすものでありますが、人麿の旅に出た時によく本性を現はして居る。

稲日野も行きすぎがてに思へれば心恋しき可古の島見ゆ

ともし火の明石大門に入らむ日や榜ぎ別れなむ家のあたり見ず

玉藻刈る敏馬をすぎて夏草の野島が崎に舟ちかづきぬ

天さかる夷の長路ゆ恋ひくれば明石の門より大和島見ゆ

何れも過ぎ去つた後を思ふと同時に前方を見て居る。両方を見透かしてゐる。この場合彼は空間的に前後を觀て居るとも云へるが、同時にそれは時間的とも云へます。それで彼の懐古的態度は将来に対する大展望があつての懐古だということを断定出来るのではないかと思ふのであります。

東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ

時代の前方に立てるかぎろひを見つつ原始日本を顧みした彼の思想をここに吾々は摺み得る。

もののふの八十氏河のあじろ木にいさよふ波のゆくへ知らずも

「もののふの八十氏河」と出て参ります時に、彼の頭には懐しい日本の原始社会組織が漂つて居る。即ち過去への憧憬であり、そして「いさよふ波のゆくへ知らずも」は無限の将来を考へて居るのであります。云はば空間的事物を借りて時間を象徴して居るのであります。これらの歌は彼の物事の観方の根本を示して居るので、空間的に述べてゐることは、時間的にもまた思想的にも同一であると観ても間違ひない。↘

ここに人麿の思想——未来と過去、理想と運命とを現実の一点に総合する人間眞実の生き方——があると思つたのです。この解説には人麿を外からながめるのでなく、人麿の短歌創作の秘密を内側から説き明かす不思議な魅力があります。その時から私にとつて人麿は、単なる歌人ではなくなつた、そして、元來、歌人というものがそういうものなのであろうが、人麿の歌が私という人間の思想感情そのものに方向を与えてくれるものとして感じられるのでした。しかも、歌だから直接の人生体験の具体性をもって示すので、川出麻須美は、それを、「実践的」と説明しています。観念的に、抽象的に説明したり説教したりするのではなくて、作者自身の体験として具体性をもって提示する、

それが最も強い説得となるのは、芸術のみのもつ威力であります。

川出麻須美引用の最初の四首は、万葉集卷三雑歌の中にある有名な「羈旅の歌」で、八首あります。

柿本朝臣人麿の羈旅の歌八首

三津の埼波をかしこみ隠江の舟よせかねつ野島の埼に

玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野島の埼に船近づきぬ

淡路の野島の埼の浜風に妹が結びし紐吹きかへす

あらたへの藤江の浦に鱸釣る海人とか見らむ旅行く吾を

稲日野も行き過ぎがてに思へれば心恋しき加古の島見ゆ

ともし火の明石大門に入らむ日や傍ぎ別れなむ家のあたり見ず

り見ず

天さかる夷の長道ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ

飼飯の海には好くあらし刈薦の乱れ出づ見ゆ海人の釣船



瀬戸内海の夕ぐれ

最後の「飼飯の海には好くあらし」の歌について、鹿持雅澄かもちまさずみは次のように批評しました。雅澄は、万葉集の研究書として、本居宣長の「古事記伝」と並ぶべき「万葉集古義」の著者です。

へただ目に見たるけしきを、そのままに云るのみなるに、今も打誦するに、そのさまおのづから、目の前にうかびつつ、見るやうにおぼえて、且つ家路を交ひしく思ひて、後の方を見やりたる意、言外にあふれたり。▽

というこの評言は、この八首すべてにあたるばかりでなく、短歌の本質を道破したものであるといふことができましよう。

さて、八首の歌の最初の方からの地名を現代に照らしあわせてみますと、第一首「三津の埼」は大坂港、第二首「敏馬」は神戸市、第三首「野島」は淡路島の西北端野島村、第四首「藤江浦」は明石市、第五首「稲日野」は印南国原、「可古の島」は加古川市、第六首「明石大門」は明石海峡、「飼飯の海」は、淡路島西岸だということなのです。

そこで、第一首から第五首までは一連のもので、難波の「三津」の港を船出して、瀬戸内海を海岸ぞいに神戸をすぎ、淡路島の「野島」に寄り、明石の沖をすぎ、海岸ぞいに加古川をすぎて西下したものとみることができません。瀬戸内海を西へ筑紫の国へでも下っていったのでしょう。

第六首は、右の五首までの順序につづけると逆転して明石海峡が出てきます。これは並べているので、明石海峡に向って出発する日にでも、明石海峡を通過してゆく日のことをおもってよんだものとすべきでしょう。「家のあたり見ず」は、大和の家と見るべきでしょうから、旅に出発する日にでもよんだものかも知れません。それを、右の五首の最後につけたのか、独立したものがまぎれこんだのか、はっきりわかりません。

次の二首は、西から東へ、明石海峡をわたる時に、大和島根をのぞみ、かつ「銅飯の海」のにぎわいをよろこんだ歌とみえます。

この二首とも遠い辺境の地に行政の任務を果して、なつかしい大和に帰国した忠誠な官僚人脈の感激があふれているようです。

したがって、「羈旅八首」は西下五首一連、西下一首、東帰二首一連とみるべきでしょう。

う。それを羈旅の歌として一括したもののようです。

人麿にはこういう旅の歌が多く、そこに「人麿の本性が現はされてゐる」ように思うとは、前に掲げた川出麻須美の言葉で、正にその通りですが、それにはその旅そのものの性質についても考えてみる必要があります。人麿でも山部赤人でも山上憶良でも高市たけちの黒人でも大伴旅人でも、家持でも、万葉歌人の多くがすばらしい旅の歌を残しましたが、その旅は、西行や宗祇や芭蕉などのような人々の旅とは本質的に違っていて、人麿たち万葉歌人の旅は、地方官としての、赴任の旅であり、帰国の旅であったのです。彼らは中央政府の命によって地方官として各地に下っていったが、時あたかも大化改新の後四、五十年、白村江の敗戦の後二、三十年という時代で、国際的緊張のうちに、新日本文明の全国普及と急速な地方開発とが行なわれていた時代であった。おそらく彼らは、地方行政に大きな使命を感じていたにちがいない、日本文化の拡大と集中とのリズムミカルな緊張の中に、彼らの歌が生れたのです。

瀬戸内海を往来する彼らにとって、明石海峡は、大和からの出口であり、大和への入口であった。どれほどの深い感慨をもって、ここを出て西海へ向ったであらう。また地

方生活の辛酸にいのち全うして、西海の危険な船旅を終えて、この明石海峡から、大和の国をのぞみ見た時、彼らのよろこびはいかばかりであったでしょう。そこに彼らの国を愛する自然の感情の基礎があったのでしょう。

戦後すぐアメリカ映画の「シー・ホーク」(海鷹) という海賊映画を見たことがありました。その中に、イギリスの海賊が、スペイン船に捕えられて奴隷にされ船倉につながれてオールをこがされている場面がありました。昼も夜もなく彼らはスペインの海賊の鞭の下で、敵の船をこぎつづける、ある日、船をこいでいる彼らは、オールにつたわる潮流の感触から、自分たちの船の通っているところが、イギリス海峡であることを知る。この時、彼らは、目を見合せて、「メリー・イングランド」と囁やくのである。この「メリー・イングランド」という一語が、画面を見ている私の心に痛いばかりに感じられた。当時のイギリス海賊は、かの無敵海軍の前身で、スペインと制覇をかけて戦っていた。彼らの多くは、見も知らぬ南海の果に、北海の氷海中に、名も立たず倒れて行ったのです。その苦闘と対照されるのが、この「メリー・イングランド」の一語であったらしい。この感じは、ちょうどその映画が上映された頃、戦地から敗れて帰還して来た将兵たちの、

祖国の土を踏んだよろこびに通うものがあつたでしょう。そしてまた、この人麿の歌にも通うものがあるとおもいます。人麿ばかりではない、憶良でも、旅人でも、彼らの旅の歌にあらわれている情意の緊張と弾力のある姿勢とは、この心情であつたようです。

瀬戸内海での人麿の歌は、他にもある。同じく万葉集卷三、「柿本朝臣人麿、筑紫の国に下る時、海路に作れる歌二首」と漢文の前書のある二首です。

名ぐはしきいなみ稲見いなみの海の奥つ浪千重ちへに隠りぬ大和島根は

大王おほきみの遠とほの御門みかどと在り通ふしまと島門しまとを見れば神代しおもほゆ

当時の旅はいまの外国留学よりももっと必死のものだつたでしょう。旅先や赴任地で病気になれば、ふたたび大和に帰ることさえむずかしい。事実、人麿もまた、その赴任地の石見いわみの国で故郷の妻をおもいながら死んだ、と万葉集は伝えるのです。印南いなみの海の沖に立ちさわぐ波のかなたに沈んでいった大和島根にふたたび会うことができるだろう

か——ここに限りない愛慕の情をもって大和の国を見つづけた人の心があります。しかし、それは、神代からの日本人の——いや、人間の、使命なのです。「大王の遠の御門」つまり、北九州太宰府と大和とをむすぶ瀬戸内海を行きながら、彼はイザナギの命みことの国生み神話をなつかしくおもいかえして、神代と未来をむすぶ現実の自己を確かめたものようです。ですからまた、人麿の歌には、旅先にたおれた人を見て悲しんだ歌が多い。それは拡大充実する日本の内部生命の必然の悲劇であつたのです。

人麿ばかりではなく、大和から地方へ、海外へ行く人の歌、帰る人の歌、数々の名歌が白鳳、天平の時代の呼吸をそのまま伝えていきます。それらは正に「ますらを」の歌であつた。この「ますらを」という言葉は、薬師寺の仏足石歌には一首、釈迦をさして用いられています。当時の官僚の自覚をうかがうに足るかとおもいます。

いざこども早く大和へ大伴の三津の浜松待ちこひぬらむ（山上憶良、在大唐時憶本郷歌）

青丹よし奈良の都は咲く花のにはふがごとくいまさかりなり（太宰小式小野老朝臣歌）

大和道の吉備の児島を過ぎて行かば筑紫の児島おもほえむかも（大納言大伴卿）

ますらをと思へるわれや水茎の水城の上に涙のごはむ（同前）

島隠り吾が漕ぎ来れば羨しかも大和へ上る真熊野の船（山部宿弥赤人、過辛荷島時）

大伴家持が防人の歌を集録したのも、彼ら無名の防人たちに「ますらを」の純粹なすがたを見たからでしょう。したがって、人麿の最期の歌を次の歌として伝えた万葉集は、彼に「ますらを」の典型、当代の英雄を見たのではないでしょうか。

人麿ゆかりの石見国高津（高角）山

柿本朝臣人麿、石見の国に在りて死に臨みし時、

自ら傷みて作れる歌一首

鴨山の岩根し纏ける吾をかも知らにと妹が待ちつ

つあらむ



奈良時代後期の歌人で万葉集の編者に擬せられている大伴家持は、和歌を学んだこ

とを「山柿之門」に入つたと言っています。「山柿」の「柿」はいうまでもなく柿本人麿ですが、「山」は誰をさしたのか。山部赤人か山上憶良と考えられています。大伴家持の思想及び政治意識からすれば当然「山上憶良」だったと考えられますが、平安時代には「山部赤人」と考えられたようです。いずれにしても、柿本人麿が万葉最大の歌人と仰がれたことは事実ですが、しかし、古今集時代の歌聖「人麿」は、紀氏貫之の抽象化の手を経たために、白鳳時代の忠誠な「ますらを」であつた人麿の生の具体性はうかがわれなくなつてしまいます。紀貫之の短歌における抽象的手法そのものが、政治意識のあらわれであるともみられないことなのですが、この辺で、人麿は理想的人間像から、つまり思想的行動人から、「歌聖」にまつりあげられてしまつたようである。国学者の心の中にはじめて人間人麿が復活してくるのは、国学者の古代憧憬の思想と現実的行動意志とによるものであつて、賀茂真淵が万葉集を「ますらをぶり」と呼び、古今集を「たわやめぶり」と言ったのは、つまり万葉人の生の総合性に着目したからであつたとおもいます。万葉短歌の現実的手法は作者の行動的人生観のあらわれであり、古今集の理論的抽象的手法は政治的具體性からの逃避のあらわれであり、新古今の夢想的象徴性

は貴族社会の没落から説明されるとすれば、表現手法としての歌風の根底をなすものが作者の思想であることがわかります。こうした点で、人麿の出現は単に日本文学史上の問題に止まらず、日本思想史の最初に検討すべき問題であるということができます。

柿本人麿の生涯について、天武八姓の第二位である「朝臣」姓の「柿本」氏の「人麿」という、その名の示す出自・氏姓の關係以外には、万葉集に残された作品だけしか語るものはない。作品といっても多くのことを語るわけではない。生年も没年もわかりません。ただ持統、文武兩朝に奉仕して、飛鳥藤原宮周辺に住んで、行幸、行啓に従って歌を詠んでいるほかに、伊勢、出雲、石見、近江、讃岐、瀬戸内海等に「旅」して歌を詠んでいること、辞世の歌と伝えられるのは石見の国における「鴨山の岩根しまけるわれをかも知らにと妹が待ちつつあるらむ」であること等、生涯の内容をなす彼の長歌、短歌をあわせると、彼の一生が浮び上がってくるが、それを概括すれば、歌人官僚とでもいうほかはないのです。

こうした人間像は、もちろん中国文明にその原型があるものだとおもいますが、いまはそれにはふれません。ただ、短歌という、漢詩にくらべて簡単な表現形式が、こうい

う人間像の一般化を助けることになったのだらうということを一言するにとどめます。そこにも、中国文明の影響を受けながら独自の発展をとげた日本文明の特質がうかがわれるようにおもいます。

恋愛の歌、自然の歌、——人麿について述べたいことは多いのですが、要は、彼が、国際的危機と国内の統一との緊張した時代に、持統、文武天皇時代の忠誠な官僚として、力一杯その時代を生きぬいたのであって、その魂のひびきが、その歌にあらわれていることを注意したいとおもいます。単なる歌人というようなものなかつた時代ですから、彼はいわゆる歌人でなかつたのはいうまでもありませんが、積極的な意味でも、彼がその時代と真正面から取り組んだことを忘れてはならないと思うのです。彼の石見の国での死には、『乙女の床の辺にわがおきしつるぎの太刀その太刀はや』とうたひをへて神あがりましき』（古事記）という、ヤマトタケルノミコトの死をおもわせるものがあります。

また人麿の長歌・短歌の痛切な歴史意識は、古事記の歴史意識と同じものであつて、

古事記が叙事詩としてうたいあげる天皇中心統一国家の創造を、人麿は一官僚一個人として分担して、その悲劇的緊張を抒情詩としてうたいあげたのです。人麿は日本国民思想史の上に永遠の人間像の足跡を残したということができません。

(2) 山上憶良^{やまのうえのおくり}

白鳳時代の代表的歌人である人麿に対して内容の点でも韻律の上でも新生面を開いたのは奈良天平の山上憶良です。人麿には「柿本人麿歌集」という歌集のあったことが万葉集によって知られますが、同様に憶良には「類聚歌林^{るいじゅうかりん}」という歌集がありました。そこでわたしは、大伴家持が「山柿之門^{さんしのもん}」と言ったのは、憶良と人麿であると解したいのです。人麿と憶良とは正に、万葉集の双璧です。

山上憶良は、人麿よりも伝記が明らかで、「広辞苑」には、「大宝元年、遣唐少録として入唐。東宮侍講。従五位下・伯耆守となり後に筑前守。……天平五年頃没。(六六〇—七三三頃)」とあります。人麿は持統・文武兩朝の宮廷歌人であったから、その死は七百

年代のはじめでしょう。そうすると人麿の活躍していた頃憶良は四十に近かったことになりそうです。しかし、憶良が歌人として名をあらわしたのは、人麿の死後の二、三十年間と思われれます。憶良の念頭に人麿があつたことは想像に難くありません。地方官として暮した人麿とは境遇もまた似ていました。しかし、時代環境はすでに白鳳の緊張を失つて文化の爛熟の相を見せていたでしょう。そこに憶良の、人麿とは異なる、時代に対する批判的立場があるようです。だからこそ憶良の歌が思想的観念的となり、感情の質もまた孤高の苦渋と自嘲の悲哀との影をもつに至つたのでしょう。そういう時代に対する精神の姿勢は、根本的には人麿と同根で、同時代の大伴旅人、山部赤人、高橋虫麿といふそれぞれ個性をもつた歌人群の中でも一頭地を抜いていると、私は思います。

憶良が遣唐使となつた大宝元年は文武天皇の時代で七〇一年です。「遣唐少録」は、遣唐使随行のさかん(四等官)です。続日本紀に記事があります。四十歳で少録では、地位が高いとはいえません。帰朝して、はじめて出世の糸口をつかんだもののようです。国司を歴任したので、前述の通り、人麿と同じく、当代日本の課題と真正面から取り組むこととなつたのです。そうして憶良は、この時代に対する彼の心身の姿勢を、そのま

ま直接的にうたうこととなりました。その点、人磨よりも思想的と見られます。人磨の思想は、内にこもって、外を律する原理として、そのままの形ではあらわされなかつた。自然鑑賞とか人生に対する個々の出来事の詠嘆の中に、自然にあらわれる態のものでありました。憶良はそれを思想、人生観として取り出して歌ったのです。ここに、唐詩の影響があるにちがいない。憶良は、一言で云えば、思想詩人でした。

内容の点で、人磨が恋愛を中心としているのに対して、憶良は家庭感情を中心にし、殊に、父親の子に対する愛情を、思想の根底としたのです。これは、明らかに、人磨から一步前進したということができましよう。年令的にも、人磨の作歌の時期より遅いのであろう。つまり、人磨の歌が青春から壮年へかけての歌とすれば、憶良の歌は、壮年から老年へかけての歌ということができます。恋愛から親子の愛情へ、感情の横溢から思想の自覚へ、——同一の歌人の生活の中で、青春の時期から壮年、老年期にかけて行なわれる精神の開展が、人磨と憶良との間にあるように思われるのです。

このことは憶良の歌を全体としてみて言えることですが、次の一首の技法に最もよくあらわれています。

憶良らはいまはまからむ子泣くらむその彼の母も吾を待つらむぞ

一首三文から成り立つ。真中に「子泣くらむ」の第三句を独立させるといふ、ほとんど他に例を見ない調子によって、一首の中心をこの句においています。そこで、「その彼の母」と自分の妻を呼ぶのです。今上天皇の御歌に、「初めての皇孫」という題で、

山百合の花咲く庭にいとし子を車にのせてその母は行く

という歌があります。「初めての皇孫」に中心をおくので、「美智子妃殿下」は、「その母」となったのです。憶良の歌も同じです。普通だったら、妻が待っている、というべきところ、「その彼の母も」、——（「それその母も」という詠みもあるらしいが、どちらでもいま論じている点については同じです——）、「吾を待つらむぞ」というので、父親の愛が中心になっていることがよくあらわれています。

第一、二句の「憶良らはいまはまからむ」も象徴的で、天平時代の孤独の「ますら

を」憶良の思想的立場を示して遺憾ない。題材の点からも、技法の点からも、人麿に対して新生面を開いている、ということができます。

しろがねもこがねも玉も何せむにまされる宝子たからにしかめやも

もまた、親の子に対する愛情の表現として有名ですが、これが思想的短歌の例で、人麿にはこういう詠み口の歌は少ない。人麿は、具体的に詠んで、そこに人生の原理を象徴する。憶良は、その原理そのものの価値を詠むのです。そこで、一首の短歌にはこめることのできないような複雑な思想が、長歌によまれている。しかも、その長歌が、対話をふくむ劇的な表現をとっていることなど、憶良の思想性をよくあらわしているのです。高橋虫麿が伝説をよんだ長歌の中にも、対話がとりこまれています。これは叙事的ですが、憶良の対話は、思想的な思索を暗示するのです。これを最もよくあらわすのが、「貧窮問答歌」であり、「令反惑情歌」であります。

貧窮問答の歌一首並に短歌

風雜り 雨降る夜の 雨雜り 雪降る夜は 術もなく 寒くしあれば 堅塩を 取り
 つづしろひ 糟湯酒 うち啜ろひて 咳ぶかひ 鼻ひしびしに しかとあらぬ 鬚か
 き撫でて 吾を除きて 人は在らじと 誇ろへど 寒くしあれば 麻衾 引き被り
 布肩衣 有りのことごと 服襲へども 寒き夜すらを 我よりも 貧しき人の 父母
 は飢多寒からむ 妻子どもは 乞ひて泣くらむ 此の時は 如何にしつつか 汝が世
 は渡る

天地は 広しといへど 吾が為は 狭くやなりぬる 日月は 明しといへど 吾が為
 は 照りや給はぬ 人皆か 吾のみや然る 邂逅に 人とはあるを 人並に 吾も作
 るを 綿も無き 布肩衣の 海松の如 わわけさがれる 檻褸のみ 肩に打ち懸け
 伏盧の 曲盧の内に 直土に 藁解き敷きて 父母は 枕の方に 妻子どもは 足の
 方に 囲み居て 憂ひ吟ひ 竈には 火氣ふき立てず 甌には 蜘蛛の巣搔きて 飯
 炊ぐ 事も忘れて 奴延鳥の 呻吟ひ居るに いとのかきて 短き物を 端截ると 云
 へるが如く 楚取る 里長が声は 寢屋処まで 来立ち呼ばひぬ 斯くばかり 術無

きものか 世間の道

世間を憂しと恥しと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば

令反感情歌一首

父母を 見れば尊し 妻子見れば めぐし愛し 世の中は かくぞことわり もち鳥
の かからはしもよ 行く方知らねば 穿沓を 脱ぎ棄る如く 踏み脱ぎて 行くち
ふ人は 石木より 成りてし人か 汝が名告らさね 天へ行かば 汝がまにまに 地
ならば 大君います この照らす 日月の下は 天雲の 向伏す極み 谷ぐくの さ
わたる極み 聞き食す 国のまほらぞ かにかくに ほしきまにまに しかにはあら
じか

反歌

ひさかたの天路は遠しなほなほに家にかへりて業をしまさに

有名な「思子等歌一首併序」に憶良はこう書いています。「釈迦如来金口の正説に、

等しく衆生を思ふこと羅睺羅らごらの如しと。又説く、愛は子に過ぎたるなしと。至極の大聖
すらかなほ子を愛するの心あり。況んや世間の蒼生、誰か子を愛せざらむや。」この序の
論理が独特です。釈迦の説くところに、衆生を一視同仁に愛する、その愛がわが子の羅
睺羅を愛するがごとくであるといふのです。衆生を愛するその愛の質をいう。また「愛
は子に過ぎたるなし」といふのは、愛情の中の最も深いものは親の子に対する愛である
といふのでしよう。憶良はこれを取って、「至極の大聖すらかなほ子を愛する心あり」と
いふのですから、ちょっと見ると受け取り方が逆で、釈迦の説くところは、各人の子を
愛する心を外におよぼせ、と説くもののごとくですが、そこに憶良は、釈迦その人の心
の奥を観るのです。そうして、「世間の蒼生誰か子を愛せざらん」といふ、愛の普遍性
というものを自己にたしかめる精神は、薬師寺仏足石歌に釈迦のことを「ますらを」と
表現する精神と同じで、仏教に対する人間的な現実的な受け取り方を示すものです。そ
れだけ憶良という「ますらを」は地についた思索をしたことがわかります。たしかに憶
良は、日本の思想の自覚をうたった最初の歌人といえるかと思う。「皇神すめかみの厳いつかしき国、
言霊ことたまのさきはふ国」といふ「敷島の道」の自覚を示す伝承も、憶良の長歌に歌ひ継がれ

ているのです。

なお、前記引用「貧窮問答歌」は、高木市之助博士の説くところによると、(昭和三十七年五月上代文学会講演) 憶良が筑前の国守をやめて都にかえった七十二、三歳の、その生涯の最後の時期によまれたものだそうです。職をはなれたということが、一面その思想を自由にしたものでしょう。自らの境遇を窮尽して、そこに他に対する同情を喚起するという、正しい思想の過程がその劇的表現にあらわされています。高木博士によれば、彼の長歌は特に枕言葉が少いという特徴をもつものといいますが、構成、修辭法ともに、人麿以外の世界を開拓したものとすることができましよう。その最後に「山上憶良頓首謹上」と記した憶良の辞世とも見るべきは、次の一首です。「ますらを」の慨世の評論文学と見ることができるようです。

山上臣憶良 やまのへにしろる
沈痾之時歌一首

男子をのこやも空むなしかるべきよろづよに語りつぐべき名は立てずして

(右一首、山上憶良臣、痾やまひに沈める時、藤原朝臣八束、河辺臣東人を使として、疾やめ

る状を問はしむ。是に於て憶良の臣、報語已に畢り、しばらくありて涕を拭ひ悲嘆し、此の歌を口吟す)

憶良のその時代に対する志は遂に成就しなかつたでしょう。しかしこの歌の悲嘆が、彼の志がただ自己一身にかかわるものでなかったことを語っています。当時の理想であった現世の権勢をこえる万代の名を求めたところに、憶良の精神がよくあらわされています。「此の歌を口吟し」とある言葉は、憶良の生涯を語って、万代に伝承されるのです。人麿の辞世の歌と対照して感慨無量なものがあります。

(夜久 正雄)



憶良ゆかりの太宰府政庁跡（後方は大野山）

三 孝明天皇の御歌



孝明天皇御肖像画

最近、「日本思想の系譜」の編集にたずさわって、孝明天皇の御製ぎよせい（天皇のお作りになった詩歌をいう）と御宸翰ごんかん（御手紙）とを読みかえして、私は戦慄しました。昭和四十三年の元旦の新聞に、今上天皇の「孝明天皇御陵ごりやう」と題する二首が発表されました。

百年ももとせの昔しのびて 陵みささぎををろがみをれば春雨のふる
春ふけて雨のそぼふる池水にかじかなくなりここ泉涌寺せんにゅうじ

広瀬誠氏はこの二首の御歌を味読して、△明治百年といはれ、いろいろ行事も執り行はれてゐるが、その明治維新直前の激動期に、身も心も砕かれ、御年おん三十六歳という若

さで崩御ほうぎょされた孝明天皇を追憶する者の少ないのは残念である。▽と論じました。

孝明天皇のおなくなりになったのは、慶応二年（一八六六）十二月二十五日です。翌慶応三年（一八六七）一月九日睦仁親王（明治天皇）御年十六歳にて踐祚せんそ（先帝の崩御直後に、皇嗣が皇位をうけ継ぐこと）、翌慶応四年八月二十七日即位、九月八日、年号が明治に改元されたのです。そこで、慶応四年が明治元年となつて、明治百年というのは、慶応四年（一八六八）すなわち明治元年を一年として百年に当る年です。孝明天皇崩御の年月以後を数えると百一年になるといふわけです。

私などうっかりして気がつかなかつたのですが、孝明天皇百年祭の神事がとり行なわれたのでしよう。今上天皇の御製は、春季のお歌ですから、神事に先立って春季に御陵に御参拝になられたのではないでしようか。「百年の昔しのびて」といふ御言葉は、文字通り百年前という事実そのままですが、維新直前の孝明天皇の御晩年の御苦闘をおしのびする今上天皇の深いお心がこもっていると思われまふ。遠い歴史の悲劇をしめやかにおしのびになる深い哀惜の情感が言外にあふるばかりであります、昭和の

激動期を導かれる今上天皇の御感懐がおのずから孝明天皇の御心情に通うからでしょう。明治百年の記念行事は、明治天皇をおしのび申上げることが根本であることは言うまでもありませんが、明治の基礎をおきすぎになった孝明天皇の御精神を憶念することを忘れてはならないと思われます。

いまさらながら、孝明天皇百年祭のことに心及ばなかった自分の迂濶さが恥ずかしく思えました。孝明天皇をおしのびになる今上天皇のお心のこもった御歌を拝誦してそう思ったのです。

それにたまたま、「日本思想の系譜」の、幕末の文献資料の選集の中で、孝明天皇の御製と御宸翰との項を私が分担することになったのです。前に、といっても二十年以上にもなりますが、戦時中三条実美の歌集の研究を刊行した時、孝明天皇の御製集を読み、御宸翰を読む機会があつて、独特の強烈な、悲壮な語調に魂をゆすぶられたのでした。

今度また衝撃にも似た強い感動を受けましたので、その感想を述べてみたいと思います。

広瀬氏が前記論文の中に引用したのは、次の五首です。

さまざまに泣きみ笑ひみ語りあふも国を思ひつ民おもふため（元治元年「述懐」）

天が下人といふ人ころあはせよろづのことに思ふどちなれ（同前）

人しらず我が身ひとつに思ひつくす心の雲の晴るるをぞ待つ（慶応元年「独述懐」）

日々日々の書につけても国民の安き文字こそ見まくほしけれ（文久三年「書」）

むらがりて何をかたるぞ我がおもひひとしくおもへ池の水鳥（「水鳥」）

孝明天皇の御歌には独特の痛切なみしらべがある。また、「泣きみ笑ひみ語りあふ」「よろづのことに思ふどちなれ」「我が身ひとつに思ひつくす」「わがおもひひとしくおもへ池の水鳥」といふ独特の御言葉に、痛切な御情意がしのばれるのです。

第一首目の御歌の「泣きみ笑ひみ」は「泣きつ笑ひつ」と意味は変らないと思えますが内にこもった感じがします。「国歌大観」を調べてみましたが用例はありませんでした。国事に一喜一憂する人の心がさまざまと迫ってくる独特の御言葉づかひです。「国を思ひつ民おもふため」の「つ」も前の「み」と同じく並列の意味でしょう。「さまざまに」泣きみ「笑ひみ」「国を思ひつ民おもふため」という、一種の重複が、起伏屈折し

ながらたたみかけるように作者の痛切な情意を伝えるのです。激しい強い情意が言語の制約を破るかと思われる、そのぎりぎりの線で抑えられているといった調子で、そこに作者の心のはりさけるばかりの緊張が表現されるのです。

第二首目の御思想は、挙国一致、国民協同の精神を鼓吹せられたのですが、「よろづのことに思ふどちなれ」という稚拙なような和語がかえって痛切な表現となっています。天皇が討幕に反対されたことは有名ですが、それは幕府の為政者幕臣もまた国民であるというお考えにもとづいて全国民の和衷協同を願われたからにほかならぬのです。明治維新を単なる政権の交代とせず、全国民の協力による改革運動とした精神的原動力はここにあります。

第三首目「わが身ひとつに思ひつくす」第三句字余りが痛切です。国難ともいふべき幕末の内憂外患に対して、文字通り天皇は「わが身ひとつに思ひつくす責任」を負われたのであります。天皇の御地位を祖宗と国民に対して深く御自覚なされた天皇は、一切の責任を御一身に負おうと御決心なされたようです。そこからあの起死回生の御勇気が生れたのでありましょう。それは孤独感というよりも強い責任感とみるべきでしょう。

自己の責任を感じるのには、自己自身以外にはないという意味で孤独であります。しかしそこには目に見えない連帯感があります。

「日々日々の書につけても」「国民の安き」ことを願われ、むらがりさわぐ水鳥を見ても、内憂外患のうれいをともにせよ、と呼びかけられる、深い激しい憂国の御情意がしのばれる。読みなれた御歌ですが読むごとに心うたれます。

前述の拙著「梨のかたえとその研究」に掲げた御製は、誰か先輩の教導を得て選択したものであると思われませんが次のごとくです。

秋雨

詠めなつつ思ふも淋し秋の雨の降るがまにまに木の葉ぬれけり

「秋の雨の降るがまにまに木の葉ぬれけり」といふ精妙の自然鑑賞と、一首に行きわたる寂寥の感情は作者の精神の真実を示すものであります。

冬夜

烏羽玉ねぼたまの夜すがら冬のさむきにもつれておもふは国民のこと

「夜すがら冬のさむき」といふ実感につづいて「さむきにもつれておもふ」という同情心の御表現は切実そのものと拝されます。

寄神祝言

言の葉のたむけうけてよ国民のゆたけきことを神もおもはば

倒置法で、「言の葉のたむけうけてよ」を最初に置いて強調する、強く率直な語調であります。他をかえりみる余裕のない、没頭した御姿勢が、痛切な情意のまっすぐな表現となるでしょう。「言の葉のたむけ」というのは、神仏にささげる和歌のことです。天皇の御製を今度しらべてみて気づいたことですが「御法楽ほうらく」の和歌が全体の三分の一くらいありました。「法楽」といふのは、神社仏閣において神仏にささげる和歌をよ

む歌会のことです。「孝明天皇紀」の記事を見ると、今日の宮中歌会始に行なわれるような歌会が神社仏閣に対して行なわれたようです。そこで御製はじめ歌会の和歌が、神社の方角に向って朗詠されたことが記されています。「言の葉のたむけ」は、文字通り、神仏に対して朗詠される歌です。この御歌は、歌そのものが神にささげられたものです。同時に「言の葉のたむけ」はこの御歌をもさすものです。「うけてよ」という痛切、切実な、率直な御訴えの言葉は、神をおおぐお心の深さをも示したまうものと思えます。

柳

うちなびく柳の糸のすなほなるすがたにならへ人のこころは

寄氷述懐

天地にみつるさむさのあつ氷あつくもおもひつくすねがひよ

竹雪深

国のことふかくおもへといましめの雪のつもるか園のくれ竹

夏萩

身につもるうきをば、今日に夏、秋いざや涼しきよをわたらなむ

傍点を付したところが、それぞれ前後の脈絡をもつ個所ですが、自然現象に寄せて思想感情を述べる脈絡が、自然でしかも非凡で、作者の情意の痛切なことをあらわしています。そしてその情意の中心は、国をおもひ民をおもう天皇のお心です。国と民を思う天皇のお心が、これほど直接に、痛切に、また率直に表現されたことは、孝明天皇以前の文献史上にそう多く見られないのでありますまいか。このものに寄せての述懐の言葉の脈絡の力強さは、記紀や万葉前期の歌謡の序詞の表現に通うものがあります。

「寄水述懐」の「天地にみつるさむさ」といひ「あつ水あつくもおもひつくす」といふ御言葉には、言葉にならないほど深く切実な御心が、一首の全体に行きわたりすみずみに充ちみちて、行動に移ろうとするぎりぎりの情意を表現していると思われる。こうした情意の自覚としての作歌こそ真の歌というものでありましよう。

「あつくもおもひつくすねがひ」とは国と民との安からんことである。だからこそ「竹雪深」の御歌に、降りつもる雪を見て、それを、「国のことふかくおもへといまし

めの雪」と受取られたのです。ここにはただ国と民とのために文字通り身心をささげて奮闘されるお姿があるのみです。「夏祓」の御歌のくもりない節奏は、無私のお心にめぐまれるやすらぎでありましょう。聖徳太子の「神情開朗にして小乗の疑滞なし」との御言葉をさながらあおぐおもひがします。

天晴有鶴声

あさ庇^{ひさし}日影うらゝに空見ればさもうれしげにたづ鳴きわたる

「さもうれしげに」という一句が作者が自然と全く一如になったことを表現しています。この対象との共感ということが人生の根本体験である。無心の鶴のいのちにも徹するものは、作者の無私の同情心であって、これなくして遂に人生は地獄だ。

樵夫入山

一ふしをうたふ樵夫^{きこり}の声とほくなるや深山^{みやま}にわけているらむ

遠ざかりゆく樵夫の声を聞きながら、樵夫の行く方に思いをはせられる、その微妙なお

心持が、心理の自然の開展のままに語調にのせられています。「ひとふしをうたふ樵夫の声」というところまでは、むしろ概括的表現ですが、「とほくなるや」のこの「や」で遠ざかる樵夫の声に集中する作者の心情があらわされ、一転して樵夫の行方に作者の心が馳せられるのです。ある時間の経過をたどって一点に集中する作者の心情が、その心理的経過のまま表現されている、源実朝の「箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ」という表現法に似たところがあります。

浦夏月

三熊野の浦のゆふなぎほのめきて涼しくいづる夏の夜のつき

「ほのめきて涼しくいづる」の句に清爽な御心が生き生きとあらわれる。

社頭花

おのづからたむけともなれ神のます杜つらのこずゑに咲ける桜は

倒置法による強調が、作者の敬神の情意を表現して、自然で率直です。どのお歌もみな絶唱です。

孝明天皇の御製は、題を定めてお詠みになったお歌が多いと思われるにもかかわらず、不思議にも、概念的類型的なお歌が少ない。ほとんどのお歌にも、強い痛切な情意がよまれています。

それは天皇が、はげしい御性格であったというよりも、その御生涯を緊張充実した御姿勢でお送りになられたことを意味するものだと思います。

幕末の激動期をいつからとするかは人によって違うのかも知れませんが、嘉永六年ペリー来航以後がふくまれることはまちがいない。孝明天皇が践祚なされたのは弘化三年（一八四六）で、この年既に外国船が琉球、長崎に來ている。嘉永六年は、孝明天皇御治世第七年に当たります。幕末の激動期すなわち孝明天皇の御治世なのです。この御治世の約二十一年の間に、日本はいわゆる幕藩体制から王政復古の体制に移り、それはやがて明治の「帝国憲法」の天皇中心の近代的国民国家に移行したのです。その原動力は、外国の侵略意志に対する日本の自立の意志でした。幕末の攘夷は、無智のアナクロニズム

ではありません。身をすてゝ国を守ろうとする精神の叫びであったのです。この精神を
実践し鼓吹されたのは、外ならぬ孝明天皇そのお方でありました。御製は次の通りであ
ります。

(安政元年の御製)

あさゆふに民やすかれとおもふ身のこゝろにかゝる異国の船

寄風述懐

異人ことびととともにほらへ神風やたゞしからずと我が忌むものを

同

こと国もなづめる人ものこりなくはらひつくさむ神風もがな

砧また

うたでやむものならなくに唐衣からころもいくよをあだに猶おくりつゝ

述懐

神ごころいかにあらむと位山おろかなる身の居るもくるしき

末尾の御製は、安政五年井伊直弼なおすけの日米調印独裁に対し天皇が公卿に示されたという宸筆の勅書の御精神と同じものです。勅書には、時勢を憂慮されその責を御自身に求められる御心情が精しく述べられ、「実以身体こゝニ極きはリ手足置ク所ヲ知ラザルノ至」という痛切な御心が憚るところなく吐露されています。かくのごとき御心に対して、幕末の志士は感奮興起したのでありましょう。幕末志士の勤皇思想は、国学儒学の流れを汲むものであったことに違いはありませんが、その勤皇感情は、直接には、私は、孝明天皇の御精神に対しまつるものであったと思います。

御製

戈とりてまもれ宮びとここのへのみはしの桜かぜそよぐなり

に対しまつる宮部鼎蔵元治元年上京の折の歌、

いざこども馬くらに鞍くらおけ九重みの御階はしの桜散らぬそのまに

は、この間の消息を劇的に伝うる一例です。次にかかげる幕末の人々の歌も、みな単なる勤皇の観念の表現ではありませんまい。直接には孝明天皇に対しまつる忠義感情の表現であったと、御製御宸翰を読んで私は思うのです。

すべらぎの星となへますころかともおもへば里に鳥のねぞする（三条実萬）

大君につかへささぐる我がこころ都のそらに行かぬ日ぞなき（徳川斉昭）

君が代を思ふ心の一筋に吾が身ありとは思はざりけり（梅田雲浜）

大君のためには何か惜しからむ薩摩の瀬戸に身は沈むとも（僧月照）

大君の憂き御心をやすめずばふたたび国にたちはかへらじ（有村雄助）

惜しまじな君と民とのためならば身は武蔵野の露と消ゆとも（和宮内親王）

露のままも忘れがたなき大君の御代の栄えを祈りつ我は（有馬新七）

大君の御旗のもとに死してこそ人と生れし甲斐はありけり（田中河内之介）

われはもや勅^{みこと}たばりぬ天津日の御子のみことの勅^{みこと}たばりぬ（伴林光平）

君がためいのち死にきと世の人に語りつぎてよ峯の松風（松本奎堂）

おやおやの親よりうけしすべらぎの厚き恵みはあに忘れめや（乾十郎）

つくしてもなほつくしても君がため賤のいのちのあらむかぎりは（安積五郎）

かくばかりなやめる君の御心をやすめ奉れや四方の国民（平野国臣）

いくそたびくりかへしつ我が君のみことし読めば涙こぼるる（久坂玄瑞）

ももしきの軒のしのぶにすがりても露の心を君に見せばや（真木保臣）

大君のおほみ心をやすめむと思ふこゝろは神ぞ知るらむ（中岡慎太郎）

御宸翰勅語も御製の切実さ率直さがそのまま御文章に示されていて感涙を禁じえませ
ん。時勢に真正面からぶつかって逃避も自惚もなく現実そのものと対決された雄々しい
御精神を仰ぐのです。御製を拝誦し御宸翰勅書を読むと、天皇政治の実内容は、つまり
王政復古の精神は実現されていることがわかります。これが、明治に継承され成文化さ
れたのであります。明治百年を思う人に是非この孝明天皇の御製御宸翰勅書を読んでい
ただきたいと思えます。そこに明治のなまの原型があるのです。

（夜久 正雄）

四 明治天皇の御歌

(1) 散佚した明治天皇御製（孝明天皇追悼）四十余首

御父帝孝明天皇がおなくなりになられた時、明治天皇は御年十五歳でいらっしやいました。孝明天皇の御病氣は痘瘡で、いまの天然痘です。慶応三年十二月十七日御発病、二十五日におなくなりになりました。御年三十六歳であらせられました。

御病状は「明治天皇紀」によると、同月十一日、天皇は感冒にかかっておられたのを無理をして内侍所御神楽にお出ましになりました。（内侍所御神楽は今の賢所御神楽と同じ儀式で、天照大神の御靈代として神鏡をおまつりする宮中内侍所で、毎年十二月に行なわれる神楽奉納のお祭りです。）「明治天皇紀」に、（御拝の後、和琴の所作あらせられ、神楽まだ畢らざるに病のため入御あらせらるゝとあります。神前で和琴をおひきになられた後、御病氣のため御退出になられたのです。敬神の念のお強い天皇が、神楽の終らないうちに御退場なさつ

たのですから、よほどお悪かったのでしょう。△爾来病勢衰ふるに至らず十三日病牀に就かせられ、熱氣頓に昂騰し、十五日発疹を拝するに至る。▽そして十七日、△侍医、痘瘡と拝診す▽とあります。親王(のちの明治天皇)は、日々御病床に侍して御看病に当られた。御病気が痘瘡と決ったので、天皇は、御病気が親王に感染することを恐れられて、御病氣快癒まで参上を禁じられたのです。しかし、親王は前年、外祖父中山忠能ただやすのはからいで種痘をしておられたのでこのことを天皇に申上げられた。天皇△始めて宸慮を安んじたまふ▽とあります。ところが、十八日から親王が軽いお風邪に罹られ、漸次平癒に向はれた、とあるが、恐らく十八日からは孝明天皇のおそばにいらっしやることのできなかつたことと拝察されます。

二十五日 天皇崩御。御病氣以来既に二週間、近日病勢がやや落ちついたのにこの日急変なされたのであります。ちようど親王は、床についておられました、正午頃急遽天皇の御前に参候せられました。暫くして御病状が小康を得られたので退出なさったが、午後十一時前、御危篤になられ、親王は倉皇そうこうとして参候されたが、十一時過ぎおかくれになられたのです。御歳三十六。△親王、大に哀悼したまひ、爾来深く憂愁に沈ませら

る」と書かれています。

「孝明天皇紀」はさらに詳細に記述してありまして、孝明天皇のおそばにおつきしておられた明治天皇の御生母中山一位局(中山慶子—中山忠能の女)の書簡を引いています。

中山一位局が父忠能卿に宛てられたものです。

へごく内々ながら、昨夜成いぬの刻すぎごろ御事切おんごときれ、何とも恐れ入り候。尤もはなはだ親王様御愁傷様、御悲歎いづ何れも只落涙の外無く候。さてさてまことにもつて御痛々しき御事、見上げ候ふも恐れ入り候ふ玉体様にあらせられ候由よし、実々御不運様なる御所様、国事等に付ても世上にては種々と申上げ候ふ由ながら、御二十歳頃より天下擾さわぎかけ、一日一夜安心様の御間もあらせられず、実に実に御苦慮のみにあらせられ、終には御難痘に御悩あそばされ、実に実に何たる御災難にあらせられ候ふ御事やと悲泣の外なく、前後を忘れ候。此の御事いまだ大秘事のよしゆへ必ず必ず御他言御無用御無用に願上げ候。親王様御悲歎は申すまでも無く候へども、先づ先づ格別の御当り様もあらせられず候。実に実に是よりはひとしほ親王様御心得御大事、何とぞ天下万民悦服致し四海泰平、御徳を仰ぎ奉り候ふ賢明の英主に成らせられ候様、信心の外これ



明治天皇御踐祚（聖徳記念絵画館）

無く候。（下略）

これが二十六日早天、忠能受信のお手紙で、翌二十七日のお手紙には、

（上略）親王様誠に御驚様御愁歎、御しほしほと遊ばし一同いよいよ悲歎致し奉り候。

御風邪は追ひ追ひ御宜しく伺ひ候。夜分御寝成りかね、御膳も御常通り召上りかね、今日より御みなか御引張り、御さすり藤木（侍医）

へ伺され候。尤も日々御ヒ又久野（侍医）も伺ひ候。御上の御事、日日帰らぬ御上のみ存じ出し悲歎に袖をしばり居り候。容易ならざる

御国体、親王様御事も種々御案じ申上げ候。何とぞ賢明の聖主に成らせられ天下安全に御治遊ばされ候ふ様とのみ祈願致し奉り候（下略）

孝明天皇は弘化三年、御歳十六で踐祚翌四年皇位にお即きになってから約二十年間内

外多事多難の時世に身を以て当られ、今や文字通り国の中心として未曾有の難局に當つておられたのですから、天皇の御急死は、正に大事件でした。宮中では十二月二十九日に崩御を発表して、睦仁親王——のちの明治天皇——が御年十六歳で踐祚せられ、正月二十七日奉葬のことが定められました。孝明天皇の、国と民とのために御身をかへりみぬ御精神によって幕末の士民は奮起したのですが、今や時代の光明とも申上げるべき天皇を失ったのです。国家の危急存亡とはこのことで、当時の人心の悲嘆は想像を超えます。わけても明治天皇のおなげきは、御生母の記されたところによってまざまざとうかがわれるのです。

と、
 翌慶応三年一月の宮中の様子は、筑波常治氏の「明治天皇」に引用するところによる

△新帝には毎夜毎夜御枕へ何か来たり御責め申し候ふにつき、御悩と申すことにて、云々▽（千草有文——正月十七日書簡）ともあり、△御悩中いろいろ怪事これあり、日々猿出頭し苦しめ奉り、御側女中にも毛つき候事たびたびこれ有り云々▽（中山忠能日記）ともある。天皇御自身も悲嘆の末、ノイローゼのような状態になっておられたのではないか

と思われます。一位局の父忠能に宛てたお手紙にも「何分にも世は末に及び、御所中悪魔えいまん盈満えいまんにて恐れ入り恐れ入り候。当今とうぎん様御事さま、じつに御案じ申上げ、悲嘆のほかこれ無く候。とかく格別明君にあらせられず候ては、内外とてもとても治り申さず、云々」であるのを見ても天皇の御悲嘆、宮中動転のさまがうかがわれます。

孝明天皇の御大葬（二月二十七日）が終つて、翌月の二月十三日、謹慎を解かれた外祖父中山忠能は参内して葬儀に関する御進講を申上げました。「明治天皇紀」によると、「既にして講畢る、天皇、忠能に示すに先帝の崩御を哀傷するの御製を以て示したまふ」とあつて、忠能の日記正心誠意の文章を引用しています。読み易く書き改めると次のごとくです。

「先帝崩御後の宸詠（御製）見せ下さる、四十余首、御悲歎御追悼の叡情、玉吟（御製）の中、仰せ尽され、まことに以て感佩、思はず落涙しをはんぬ。玉詠（御製）中三首、帝王の重き御儀詠ぜらる。予奏して云く、此の御製、永く能く能く宸襟（御心）を凝らしめ給ふべし、そもそも皇国は天照皇大神宮の御国にして天子に之を預りまさしむ、至尊と雖も吾が物と思召しては自然御随意の御所置に押移るべし、云々」

右につゞけて、「明治天皇紀」には、△然れども其の御製散佚して伝はらずとある。

明治天皇は、嘉永五年九月二十二日、中山忠能邸に降誕せられ、以後五歳まで主として中山邸にて生長せられました。その後、宮中に御還りになってからも、折にふれては中山邸にお出でになられることが多かつたようです。中山忠能もまた熱誠をもって皇子の御養育に当たったのです。父天皇側近の忠臣でもあったこの外祖父に対して、明治天皇は父帝哀悼の御製を示されたのであります。

さて、明治天皇の和歌の御勉強は、——これも「明治天皇紀」によると、次のごとくです。(現代語訳)

△元治元年正月十一日、権中納言れいぜい冷泉為理は、議奏柳原光愛によって、親王(明治天皇)の和歌学習のことを天皇に願ひした。ところが、親王は、既に安政四年十一月、御年六歳の時、御詠があつた。

月見れば雁がとんである水のなかにもうつるなりけり

七、八歳の頃、天皇(孝明天皇)は、いつでも和歌五題の習作を課せられ、親王が詠

進するのを待って始めてお菓子をお与へなさるのを例とせられたのである。ある日、親王は、

あけぼのにかりかへりてぞ春の日のこゑを(きょてぞ)きくこそのどかなりけり

と詠んで天皇にお差出しになられた。天皇はすぐ御自筆で

春の日の空あけぼのにかりかへるこゑぞきこゆるのどかにぞなく

と、添削なさった。このやうに和歌は幼時から天皇の教導をお受けになられ又時には典侍広橋静子等の女官を和歌学修に侍せしめられたのである。為理はこのことを知らないで、今御年十三、和歌の修学なかるべからずと思つたのである。云々

まだ御幼少の親王を孝明天皇が祭祀の席に伴われたことが「明治天皇紀」に見えるので、和歌と祭祀については父帝御自身でお教えなさつたのであります。勿論、習字、四書五経の素読等は、それぞれ教師を定めて学習させなさつているのですから、和歌についての御教導を孝明天皇御自身がなさつたことは、御自身の御考えによることにちがいない。二年後の慶応二年五月六日、前記冷泉為理に命じて、当座詠題を奉らしめ、又、為理をして和歌を詠進せしめられた、という記事がありますから、孝明天皇はさきの為

理の進言をお心にとどめられ、あるいは明治天皇の和歌の学問について為理に奉仕せしめようとなさったのかも知れない。しかし同年十二月孝明天皇は崩御せられたのです。親王すなわち明治天皇の歌の師の定まったのは、慶応三年五月のこと、有栖川宮^{たかひと}幟仁親王でありました。右の記事を考えあわせると、明治天皇は文帝孝明天皇に歌の手ほどきを受けられ、天皇がおなくなりになるまでお教えいただいたというのが至当でしょう。

このように道の師であった文帝を悼ませられて四十首の和歌をお詠みになってそれを外祖父忠能にお見せになった。——私は、この記事のもつ意味は深く大きいと思います。明治天皇の和歌の道の根本がここに定まったということができるように思うからです。後、十万首ものお歌をおよみになり、歌をよむことを道の根本にすえられた天皇御一代のもとには、文帝追悼四十首の歌作の中にもっているのではないでしょうか。その歌が散佚して伝わらなくとも、それはそれでよいことです。その追悼の歌の中に、帝王の道に関する歌があったというのですから、それは文帝哀悼の悲しみの底ひから立ち上らされた若き天子の御決意であったにちがいない。悲しみをうたいはらすとあらたの

いのちのめぐまるるこの四十首の作歌体験から、天皇御一代のしきしまのみちが開展したと推察されるのであります。

明治天皇の、孝明天皇の御もとでござされた時を回顧してのお歌は、単なる幼時の回顧という以上に、痛切なしらべをたたえています。このことはすでに指摘されていることですが、それは明治天皇の「敷島の道」が、当然のことながら、孝明天皇の道をうけつがせられたからであると同時に、その継承が人生の悲劇的体験を通じてなされたからであると思えます。散佚した四十首はその御製の中に生きつづけていると思われま

明治天皇御製

京都をいでたゝむとする頃聴雪にて（明治二十三年）

わたどのゝ下ゆく水の音きくもこよひ一夜となりにけるかな

〔「聴雪」は孝明天皇御創建の茶亭、京都御所内にあり〕

故郷井（明治三十六年）

わがために汲みつときゝし^{さち}祐の井の水はいまなほなつかしきかな

〔「祐の井」は中山忠能が天皇御幼時の御用水とした井戸。御幼名祐の宮に因んで孝明天皇御命名。〕

をりにふれて

月の輪のみさゝぎまうでする袖に松の古葉もちりかゝりつゝ

〔「月の輪のみさゝぎ」は孝明天皇の「後の月の輪の東の山の陵」をもふくめて後水尾天皇から孝明天皇に至る十四代の諸陵をいふ。〕

故宮橋（明治三十七年）

たらちねのみおやの御代をしのぶかな花橋の陰をふみつゝ

〔「花橋」は紫宸殿南階下の右近の橋をいふ。〕

思故郷

たらちねのみおやのましゝ故郷の都はことにこひしかりけり

思往事

たらちねのみおやの御代の昔をもことある毎に語りいでつゝ

あらたまる世をいかにぞと思ひしはをさなかりつる昔なりけり
いにしへの人のいひてしかねごとをおもひぞいづるをりにふれては
たらちねのみおやの御代につかへにし人も大かたなくなりけり

折にふれて

あらたまる事の始にあひましゝみおやのみよを思ひやるかな

月似古（明治三十八年）

たらちねのみおやの宮にをさなくて見しよこひしき月のかげかな

親（明治四十年）

たらちねのみおやの教あらたまの年ふるまゝに身にぞしみける

孝

たらちねの親につかへてまめなるが人のまことの始なりけり

夢（明治四十三年）

たらちねの親のみまへにありとみし夢のをしくも覚めにけるかな

をりにふれたる（明治四十五年）

若きよに思ひさだめしまごころは年をふれどもまよはざりけり

(2) 御製集の刊行について

明治神宮編「新抄・明治天皇御集昭憲皇太后御集」が過般、角川文庫で出版されました。昭憲皇太后は明治天皇の皇后であられたが、大正三年におかれにられたので、皇太后と申上げるのです。明治天皇御集は、さきに明治書院の「新輯・明治天皇御集」(昭和三十九年)が刊行され、御製数約九千首を掲載した。今度の角川文庫の「新抄」は、「新輯」をもとにして、御製一四〇二首、皇太后の御歌五九四首という。編者は「新輯」の編者と同じですから、「新抄」は、いわば「新輯」の抜粋であるともみられます。戦前の宮内省編の「明治天皇御集」は御製一六八七首で、「昭憲皇太后御集」は一〇九七首ということです。戦後この宮内省蔵版本の「御集」は刊行されないので、若い人に明治天皇御集を読んでもらうためには、古本屋をさがしてもらうほか方法がなかった。しかも最近では古本屋にもあまり見かけなくなってしまうので、今度の角川文庫の出

版はありがたい。前の「御集」より数はやゝ少いが、御集にふれる機会が容易になったわけであります。

明治天皇が名実ともに明治時代の精神的指導者であられたことは、夏目漱石の「ころ」の最後の部分に、主人公の言葉として書かれた有名な言葉によつてもうかがわれましよう。

「すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終つたやうな気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは畢竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。

……………

「……………私は妻に向つてもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積りだと答へました。……………」

明治日本の指導原理の表現といへば、「帝国憲法」と「軍人勅諭」と「教育勅語」とをあげなければなりません。これらはみな明治天皇のお名前を以て公布されたものです。御名前ばかりではない、その作成、成立の過程においても、天皇御自身が指導的御

立場で加わっておられたものであります。これによって政治、軍事、教育の大本を定められ、またその時々々の御詔勅の公布によって、明治日本の興隆を指導せられた明治天皇は、実に明治時代の最も偉大な御人格であった、そのことは内外識者の一致した見解でもありました。

それは明治天皇がおなくなりになられた時に、特に痛感されたところで、漱石ばかりではない、天皇追悼と憶念の至情は全国民のものであったといふことができましょう。宮内省版「明治天皇御集」編纂刊行の主たる動機は、この国民的痛感にあったと思われる。明治の精神の体現者であられた天皇をおしたいする気持が、その日々の御心持の直接の御表現としての御製和歌の編纂刊行を企画させたにちがいない。御歴代天皇の御集の編纂は、今日になってみると当然のことのように見えますが、必ずしも定められた記念の行事というわけではありません。明治以前では、天皇がおなくなりになられたからといって、必ずしも御集の編纂があったわけではない。むしろそういう事例はごく稀であったと思います。勿論、明治天皇には、十万首に近い御製が残されたという驚くべき事実も大きな理由であったとも思いますが、何よりも、明治天皇をおしたいする心持

が、御集編纂刊行の動機であつたのでしよう。かくして、「大正五年十月二十三日奉旨、大正八年十二月二十日編成奏上」の「明治天皇御集」となり、大正十一年文部省から刊行されて、一般に普及することになったのです。

これ以前にも御製が民間に洩れることはあり、特に日露戦争当時、時の御歌所長高崎正風が国民の志気を振り立たしめるために、切腹を覚悟で御製を公表したことがありません。高崎正風の逸話としても有名な話で、大正十五年発行岩永淳太郎謹輯「明治天皇御製集」所載の千葉胤明謹識「御製の御発表に就きて」に詳しく書かれています。しかしその数は限られていて御製の一端を示すにすぎなかつたのです。

大正十一年文部省刊行宮内省蔵版明治天皇御集はこうして生れ、大正、昭和の国民道徳、精神の指標として示されることになりました。やがて明治天皇御製は、尋常小学校の国語読本に掲載され、旧制の中学校の国語教科書にも掲載されて、その幾首かは人口に膾炙するところとなりました。大正から昭和初年にかけて生れた人々は、明治天皇崩御の折の国民的体験は持たないのですが、次のような御製を覚えている人が多いでしょう。

あさみどり澄みわたりたる大空の広きをおのがこゝろともがな（御題「天」、明治三十七年）

さしのぼる朝日のごとくさわやかにもたまほしきはこゝろなりけり（御題「日」、明治四十二年）

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ（御題「正述心緒」、明治三十七年）

国民の大多数がこうしたすぐれた御製を心におぼえていることは、天皇に対する国民の親愛、畏敬の潜在的感情の源をなしていると思えます。しかし文壇では御製は必ずしも高い評価を得なかつたし、学問の世界においては、ほとんど研究の対象とされなかつたと言つてよい。日本の大学は、短歌を国文学の研究対象とはしたが、御製は敬遠されて来たのです。国体、天皇制等が政治学から、忠孝道德が倫理学から、敬遠排除されたのと同じでしょう。例えば朝日新聞の書評欄にもこんなことが書いてありました。△明治天皇ほどたくさんの伝記、逸話集もしくは頌徳の類で飾られている日本人はすくない。だが天皇は自叙伝・回想録・日記・手紙など、日常のことを知るべき直接の史料を残さ

れなかった。』と。それでは十万首の御製は何なのかと言いたくなります。最も直接的な史料ではないですか。一方また御製の価値が問題にされても教訓歌としてとりあげられたりして、かえって若い人の反撥を買う結果が多いのです。三井甲之「明治天皇御集研究」や井上孚麿「御製を拝して」、房内幸成「天朝の御学風」、保田与重郎「後鳥羽院」、小田村寅二郎編「日本思想の系譜」等の著書は、むしろ例外的な、すぐれた御製の研究書なのです。

しかし、明治百年の意識は、いや応なしに明治天皇仰慕の思いを生み出し、戦後の卑屈な敗北感情がうすらぐとともに明治の光栄がかえりみられ、その指導者代表者であられた明治天皇に対する敬慕と研究とが勃興して来たのです。明治書院の「新輯御集」、角川文庫の「新抄御集」の出版はこうした機運を促進する役割をも果たしたものでしょう。「新抄」御集の解説は入江相政氏の「明治天皇」、木俣修氏の「御製・御歌について」、略年表・脚註等、親切的配慮がこめられています。

(3) 御晩年の御歌と「しきしまのみち」

「新輯御集」の次の御製をはじめ読んで、その精妙な表現に驚嘆しました。

春雨

には石のぬれたるみればこのねぬる朝けのかすみ小雨なるらし

「このねぬる」は「この寝ぬる」で入寝ておきた今朝のVという意味です。

早朝起きてみると一面に霞がたちこめている、ふと目をやった庭石が濡れている、では、霞と見えるのは小雨なのであろう、そんなにもやわらかな春の雨が降っているのである。——こういった情景ですが、早朝の作者の無心の心裡にうつるしずかな状態が、そのまま生きている感じで、作者の静かな、落ちついた、自然そのもののような生活感情が見事に表現されている。自然と作者とは全く一つになっているのです。題材は自然



明治天皇のお写真（御晩年）

春
暁
月

あけがたの霞のうちにとなく消えゆく月のかげのしづけさ

の状景に対する作者の心情であって、特殊な決意でも、深刻な感動でもない、日常生活のある一瞬の自然感情ですが、その自然感情が、いささかの弛緩もなく、かと云って気負いもなくありのままに表現されたところに、不思議な作者の落ち着き——充足が感じられるのです。それを自然そのもののような、と言うのです。この歌は明治四十三年の御製である。明治四十五年の御製に、

という御製があります。充足した老年の落ちつきで、偉大なるものの静かな死を詠歎するかのとき感があります。前の歌と似た落ち着いた無比のしらべであると思います。この御製は、宮内省版の御製です。

「新抄」でみると、右の御製について次の三首があります。

春雨

春さめの音ききながら文机の上にねぶりのもよほされつつ

しづかなる春の雨夜を歌ひとつよまでふかすがをしくもあるかな

春さめのしづかなる夜になりにけりすずりとりよせ歌やよままし

歌をよまなかったことに対する御反省の御製です。比較するのは恐れ多いことですが、学生諸君に歌を作らせようとすると、よく歌がよめない苦心を歌によむことがあって、どうかと思いましたが、十万首の作者であられる明治天皇にも、歌をよまないで、春の雨夜を惜しまれる御歌を拝するのです。歌をよむこと、そこに生の意識があるので、歌をよまぬことは生の意識を欠くこととなるというのではないでしょう。歌をよまないことをかなしまぬようでは、真の歌はよめないのでしょうか。「新抄」には、歌についてよまれた御製が数多くのせられています。

歌

ひとりゐてひと日こころのなぐさむはしづかに歌をよむ日なりけり(三九)

をりにふれたる

言の葉のまことのみちをわけみれば昔の人にあふこちせり(三八)

歌

かぎりなきものと聞くなる言の葉の道の高ねをいつか越ゆべき(三八)

ささげたる歌によりてぞしられる^{あがた}県の末の民のころも(三七)

歌

言の葉のみちにこころのすすむ日はひとりありてもたのしかりけり(三七)

詞

世の人のおなじおもひもしきしまの歌にてきけばあはれまされり(三七)

をりにふれたる

ことしげき世にもありけりことのはのまことのみちをわくるいとまは(三七)

右の引用の御製のほかに、宮内省版の御製と重複するものが相当数あります。それぞれ天皇の歌作の御心境の仰がれる尊い御製です。しかし、「新抄」には「しきしまのみち」といふ御言葉を含む御製があまり見当たらないと思えますがいかがでしょうか。明治天皇は和歌をただ文芸としてたしなまれたのではなく、ひろく人生の道としてお考えになられたことが、宮内省版の御集の「しきしまのみち」をおよみになった御製によって知られる。例えば、次の御製は、「宮内省版御集」にはありますが「新抄」には見当たらないようです。

寄道述懐

白雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞしきしまの道（三七）

道

ひろくなり狭くなりつつ神代よりたえせぬものは敷島の道（三九）

寄道述懐

千早ぶる神のひらきし敷島の道はさかえむ萬代までに（三六）

寄道祝

かみつよのあとにならひて敷島の道をぞ祝ふ年のはじめに(四二)

道

いとまあらばふみわけて見よ千早ぶる神代ながらの敷島の道(四〇)

寄道述懐

ふむことのなかたからむ早くより神のひらきし敷島の道(四二)

明治天皇は、短歌のことを、「うた」とも「ことのはのみち」とも「ことのはのまことのみち」とも「しきしまのみち」とも言っておられるので、短歌の人生の道としてのひろがりを始終お心に持っておられたにちがいない。「しきしまのみち」という言葉は、そのひろがりを知らせてくださるのです。この点は、旧版御集をも参照すべきであると思います。もっとも明治書院版「新輯明治天皇御集」は「宮内省版御集」の御製をもすべて採録していますので、これに拠ればよいわけです。明治天皇の歌についての御製が、全体として、明治三十七、八年以降に多く見られるのは、日露戦争の御体験とその当時

の作歌の御体験によって、歌すなわちしきしまのみちの意義、価値を深思なさる機縁を得られたのではあるまいかと思えます。そこに、「しきしまのみち」の御自覚が一層深められ、引用の御製となったのだと思います。明治天皇の「しきしまのみち」の御自覚と正岡子規の連作短歌とは、和歌史上明治を記念する大事業であったと、私は信じています。和歌史上の大事業は日本思想史上の大事業に他なりません。殊に、「しきしまのみち」の御自覚は！

明治四十五年は、七月三十日崩御の年ですから、宮内省版、新抄版ともに、掲載御製の数は少い。宮内省版は、その最後の「をりにふれて」十二首、はじめが、

をりにふれて

敷島のやまと心をみがけ人いま世のなかに事はなくとも
にはじまり、

国民の業にいそむ世の中を見るにまされるたのしみはなし
開くべき道はひらきてかみつ代の国のすがたを忘れざらなむ
を含み、

なすことのなくて終らば世に長きよはひをたもつかひやなからむ
で終ります。恐れ多いことですが、天皇の国と民とにおのこしになられた御遺戒のよう
におぼえて畏きことであります。「新抄」の最後は、「をりにふれたる」六首で宮内省版
のような感じはない。しかし、今度「新抄」の四十五年春夏の御製を読んで、天皇の人
生に対する深い哀惜の御感情を強く感ぜしめられました。生の終りが近いことを予感し
ておられたような御歌があつて、壮嚴な感じがしたのです。

花

にはの面の木のもとごと^こにたちよりてひとりしづかに花をみるかな
あかず見し山べのさくら春の日のくれてのちもおもかげに見ゆ

落花

風たたぬ今年の春もさくらばな散るべきときと散りてゆくらむ

惜春

あかずしてくれゆく春はあひおもふ友にわかるるこちこそすれ

夢

ものはみなゆめなりけりと思ふかなあとはかなくもすぎし世の中

こうした御製を拝誦すると、天皇が人であられること、生と死と、悲喜哀歓、喜怒の感情のたえない人そのものであられることを疑う余地はありません。しかしそれは人として最も深く、われわれの理想とするような形で、深く人生を味われたことを否定するものでもありません。われわれが歌にもよめぬような醉生夢死の刻々を送るときに、その刻々を生きられて十万首のお歌をおつくりになったことをおもえば、明治天皇は人として最高の精神生活をお送りになられたと言つてよいと思います。

明治天皇のようなお方は、日本でなければ出現なさらなかったであろうという意味では天皇もわれわれと同じ日本人です。しかし同時に日本人として最高の精神生活をお送りになったからこそ世界の諸国民の尊敬をかちえられたのです。十万首の御製とは、いうならば十万遍の御自覚であり、十万遍の精神統一の御努力にほかならない。政務軍

務最も御多忙であつたと拝される明治三十七年の年間御製数が最も多く、七千五百二十六首であるという（入江相政氏「明治天皇」に拠る）のには、忙しくて歌もできないなどというのと逆で、ただ驚くばかりであります。ただ天皇という地位に即かれたというだけで偉大なのではなく、ただ天皇の御製だから価値があるというのではない、天皇の御努力が偉大なのであり、不断精進の御表現だから価値があるのであります。御製はこのことを骨髓に涵みこませてくださる。われわれはこの御製を読むことによって、天皇の御心の中にいとなまれた表現過程を追体験する、つまり天皇の御心を学ぶことができるのです。天皇と国民との間をつなぐしきしまの道の存在こそ日本の国家生活の統一を支える事実なのであります。（小田村寅二郎氏著「日本思想の源流」参照）

（夜久 正雄）

第三部

短歌のながれ



葛飾北斎版画「富嶽三十六景」より

第三部 短歌のながれ

一 古代歌風の開展

——記紀・万葉から古今、新古今への開展——

二 近代の連作短歌

——正岡子規と「アカネ」系歌人——

一 古代歌風の開展

——記紀・万葉から古今、新古今への開展——

- (1) 短歌のはじまり——「古事記」「日本書紀」の短歌
- (2) 万葉集の具象的直觀的表現
- (3) 古今集の抽象的理智的表現
- (4) 新古今集の象徴的夢想的表現

(1) 短歌のはじまり——古事記、日本書紀の短歌

短歌のはじまり——つまり一番古い短歌はどの歌なのでしょう。誰が何時^{いつ}そのはじめの歌を作ったのでしょうか。

これがわかれば、その歌が短歌のはじまりで、短歌の歴史というテーマはその後の短歌の発展をのべればいいのですが、その最初の歌というのがはっきりわからないのです。

短歌が書物の上に書き残されたのは「古事記」が最初ですが、「古事記」は西暦七一二年、奈良時代の元明天皇げんめいの時代の編纂で、そこに短歌形式の歌がすでに約五十首も残されています。そしてその作者は神々から顕宗天皇けんそうの時代にまで及ぶのです。神々の作った歌というのは、神々が作ったと伝えられている歌ですから、その歌が本当に神武天皇以前の歌なのかどうかははっきりとはわかりません。また神武天皇の歌として語り伝えられた歌が、やはり本当に神武天皇の歌なのかどうか、実証する方法がありません。

「古事記」の書かれたのが西暦七二二年として、当時の人は、神武天皇を七二二年から千三百七十年ほど前の天皇と考えていたのですから。しかも、日本語を漢字で書く方法がまだ発達しなかった当時のことですから。そう考えてくると、「古事記」に残されている顕宗天皇時代以前の五十首の短歌の中の、どれが古い短歌でどれが新しい短歌であるかということも、古事記記載の順序通りに信じてよいかどうかわからなくなります。

当然のことなので、当時の人の歴史意識と今日の我々の歴史意識とは、違ったところ

があるのです。

我々は、歴史上の出来事を、年代順に並べてそのつながりを整理する場合に、出来事の年月日を客観的にあとづける努力をします。ですから、例えば短歌のはじまりという問題にしても、前述のように、何かの記録によって、——その当時の記録によって、はじめの短歌というものを決めること、それが歴史的の整理のはじめの仕事と考えているわけです。しかし、古事記編纂者の立場は、歴史上の厳密性をそこまでは求めていないのです。また記録の不十分な時代にそこまで厳密に歴史をたどることもできません。また出来事を年代の上に整理することだけが歴史だとも考えていません。そこで、古くから語り伝えられた物語を現実の生活に照らして納得のゆくものを書きとどめたのです。ですから短歌もその最初を神代の出来事として語り伝えたのです。それはちょうど日本の国家の起源とか日本語の起源とかを考えるのと同じで、日本民族が天皇を上戴着いて団結した時が日本国家の建設と考えたのですが、その時を何年何月何日と決めるわけにはいかないので、初代天皇の即位をもって建国の日としたわけです。それは何時の頃かわからない。伝承を信ずるより他にしかたがない。また初代天皇といえども人間ですか

ら、その人間には祖先があるわけで、その祖先を神々としたのです。これが日本の神話伝説の体系ですが、短歌もこれと同じで、その起源を国家の発祥と同じに考えているのです。

そこで短歌の起源を初代天皇神武天皇の作としたのですが、さらにそれを遡源して神の歌としました。要するに短歌とか言語とか国家とかは一個人の独創ではないので、その起源を何年何月何日という年代記の上に求めることがむずかしいのです。そこでは祖先の神という年代を超越した民族全体の生命の所産としたのでしょう。

「古事記」も「日本書紀」も、短歌のはじまりを、スサノオノミコトの歌と伝えています。古事記にはこうなっています。

「故^{かれ}ここをもちてその速^{はや}須^す佐^さ之^の男^{おのみこと}命^{こと}、宮^{みや}造^{つく}作^{つく}る^るべき地^{とこ}を出^い雲^のの国^{くに}に求^まぎたまひき。ここに須^す賀^がの地^{とこ}に到^{いた}りまして詔^のりたまひしく、『吾^{われ}此地^{ここ}に來^きて、我^{わが}が御^み心^{こころ}すかすがし。』とのりたまひて、其^{その}地^ちに宮^{みや}を作りて坐^ましき。故^{かれ}、其^{その}地^ちをば今^{いま}に須^す賀^がと云^いふ。この大神^{おほかみ}、初めて須^す賀^がの宮^{みや}を作りたまひし時^{とき}、其^{その}地^ちより雲^の立ち騰^{のぼ}りき。ここに御^み歌^{うた}を作^よみたまひ

き。その歌は、

八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を」(倉野憲司校注「古事記」
岩波文庫本四一ページ)

この歌は、前著「短歌のすすめ」の「歌の作り方」(三八頁)の章にふれましたとおり、

八雲立つ 出雲八重垣。

妻籠みに 八重垣作る。

その八重垣を。

となつて、五七。五七。七。という韻律の短歌です。

第五句は第二句「出雲八重垣」のくりかえしで、こういう形の短歌はこの他にも何首か古い短歌に例があります。

倭方に 往くは誰が夫
隠水の 下よ延へつつ

往くは誰が夫つま（古事記・仁徳天皇記、黒日売）

愛うらしと 真寝まねし真寝まねてば

刈薦かりこもの 乱みだれば乱みだれ

真寝まねし真寝まねてば（古事記・允恭天皇記、輕大郎女）

いかるがの 富とみの井いの水みづ

生いかなくに たぎてましも

富とみの井いの水みづ（法王帝説、聖徳太子）

古代歌謡を通観しますと定型以前の歌謡から次第に五七の韻律を基調とするようになって来ていますから、短歌も、形の方では、非定型のものから次第に五七律の最短の五七・五七・七。七。という形にととのって来たものではないでしょうか。と同時に、五七五七七一首一文形式のものをも同時に作り出して来ているようにも見えます。「八雲立つ」の歌は、内容的には新婚の新築祝いの民謡のように見えることも、五七の韻律で整理されていることと照応しています。恐らく古い、出雲のスサノオノミコトの伝説にまつわ

る民謡であつたのでしようが、そして恐らく古事記編纂時に、出雲地方で唱われた歌かと思われませんが、これをスサノオノミコトの恋愛のよろこびの表現としたところに、古事記編纂時代の個人的抒情詩の意識があるのだと思います。

私には不思議に思われるのですが、ヤマトタケルノミコトの辞世の歌

乙女をとめの 床とこの辺へに 吾わが置おきし 劍つるぎの太刀たち その太刀たちはや

を読むと、悲劇的英雄の最期の息づかいが感じられるように思われます。この歌の韻律は四五五六。六。となっていて、短歌形式五七五七七とは違いますが、一首一文、一息でうたわれた歌という点で、個人の心情の律動を言葉の調子にあわせて歌ったとみられる点で、今日の短歌の原型と感ずるのであります。古事記の伝承者たちは、もしその気があつたらこの歌を、五七五七七の韻律に整理することもできたはずですが、それを敢てしなかつたのは何故でしょうか。この歌のととのわかない、字足らずの音調が、作者の最期の肉体的感情的リズムと合致していると感ずたからではないでしょうか。そう考えると、ヤ

マトタケルノミコトのこの辞世の歌は、形式はととのつていないけれども、短歌であると言わざるを得ません。

そういえば、「八重立つ」の歌の、古事記の前書きがまた不思議で、「吾此地あれここに来て、我が御心みこころすがすがし」とあるのです。すがすがしさという清浄な解脱の感情を、最初の歌の背景に置いたということも、個人的抒情歌としての短歌表現のもつ解脱の感情を指摘したものではないでしょうか。

結局、私には、短歌のはじまりが何時のことか、はっきりわからないのです。しかし、五七。五七。七。という民謡的短歌の韻律上の整頓と、絶叫的表白の一首一文の抒情詩とが一つのものとなって、奈良時代より百年前の聖徳太子の時代よりさらに何百年のむかしから、次第に形作られてきて、聖徳太子の時代からはっきりと五七五七七の詩形の個人的抒情詩として、つまり今日の短歌のような詩として、意識されてきたのではないのでしょうか。

そうして残されたのが古事記・日本書紀の歌謡ですが、さきの例にも示されているように、ことばづかいすなわち表現技術は精妙でいて技巧に流れず、しかしスケールが大

きくて古代精神の力強さを充分に發揮しています。ほとんどの歌が傑作と言えましようが、五十首の短歌の中から十首ほど例をあげておきましよう。

赤玉は緒さへ光れど白玉の君が装し貴くありけり（豊玉毘売）

奥つ鳥鴨著く島に我が率寝し妹は忘れじ世の尽に（火遠理の命）

芦原のしけしき小屋に菅畳いや清敷きて我が二人寝し（神武天皇）

狭井河よ雲立ち互り畝火山木の葉さやぎぬ風吹かむとす（伊須氣余理比売、以下二首）

畝火山屋は雲とる夕されば風吹かむとぞ木の葉さやげる

さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも（弟橘比売）

命の全けむ人は晝薦平群の山の熊白禱が葉を髻華にさせその子（倭建命）

沖方には小舟連らくもろさやのまさつこ吾妹国へ下らす（仁徳天皇）

倭方に西風吹き上げて雲離れそき居りとも吾忘れめや（黒日売）

(2) 万葉集の具象的直観的表現

「古事記」「日本書紀」の歌謡につづくのは「万葉集」です。

「万葉集」は二十巻ですが、各巻の編纂の動機や目的や方法なども違って、「古今集」のように全体としてまとまりのあるものではありません。しかし、その第一巻第二巻は、長短歌が天皇の治世順に配列され整頓されていて、当代の代表的の詩歌を集めた観があります。開巻第一首は、雄略天皇の御製をもつてはじまります。まだ仮名が出来ない時代ですから、漢字を使って書いてありますが、漢字かなまじりに書き改めますと、次のようになります。

籠^こもよ み籠^こ持ち 掘^く串^しもよ み掘^く串^し持ち この国に 菜^な採^つます児 家聞^かかな 名告^な
らさね そらみつ 大和^{やまと}の国^{くに}は おしなべて 吾^{われ}こそ居^をれ しきなべて 吾^{われ}こそ居^をれ
吾^{われ}こそは 告^つらめ 家^いをも名^なをも

川出麻須美訳によると次のようになります。

籠をまあみごとな籠を持ち、ホセ（掘串）をまあ、みごとな掘串を持ち、この丘に若菜を
摘んでなさる娘さん 家はどこ 名は何というの 言ってくれない。

幸い日本全土はがちりちりと握っているのだ このわしが、このわしが統御してゐるのだ。

さあこのわしが先ず明かに身分を告げよう（どうだ 名は何という 家はどこ）

川出先生は、この御製について、「前半の始め媚びるやうな柔かな語気から、切迫した『家聞かな 名告らさね』と切れて、ポーズがあつてばくはつしてくる後半の重圧力、古人らはこの歌を御製として伝へ而も歌に脈うつさかんな情熱と強力な意志とを賛嘆して措かなかつたのであらう」と書いておられる。

そこにこの御製を開卷劈頭へまとうに据えた理由があるのでしよう。題材の上から言つても、菜を摘む二人の娘に対する天皇の大胆な愛情の表現で、国民はこういう天皇を親しくあおぎみたのでしよう。万葉時代の国家意識がこの一首にうかがわれます。

音数を数えてみますと、この歌謡は34、56、55、55。47、56、56。537。という音数律で、長歌形式確立以前の形式ですから、記紀の歌謡と同じものということができます。

万葉集の歌風としては記紀歌謡とは違った特色を示すものを考えてみるとよいと思います。それには次の歌を見るのが便利です。

万葉集の短歌の中で一番古いものとされているのは仁徳天皇のお妃きさきの磐姫いわのひめの皇后みの御歌ですが、それは第二巻の巻頭に出て来ます。

君みが行ゆきけ長くなりぬ山尋ね迎へか行かむ待ちにか待たむ

(あなたさまの旅行りょきが時久しくなった。あなたの行った山を尋ねて迎えにゆこうか。ただひたすら待ちに待とうか。)

という歌です。

この歌は、すでに万葉集の編者が問題にしているように、「古事記」に、かる輕の太郎女おいらつめすなわち衣通姫そとひめの歌として残されている歌です。それはこうなっています。

君ゆが往ゆき け長くなりぬ 山たづの 迎へを行かむ 待つには待たじ

(あなたが往ってから時久しくなった。山たづの木の葉が向い合いに出ているように、さあ迎えに行こう、ただ待つことはすまい。)

前の万葉の歌は、恋の心の微妙なためらいです。後の歌は、強い意志をうたっています。ここに、私は、記紀の歌謡から万葉集の歌への開展があると思います。はげしく強い意志的な行為の世界の讃歌から、ゆれ動く感情の微妙な世界の表白へと、大きな流れは動いていったと思うのです。ここに万葉の無限の抒情の世界がひらかれたのです。

万葉集初期の女性歌人で柿かき本人ものひと磨まろよりも一時期早い額ぬかた田た女王おおきみの次の歌など、万葉集の特色をよく示した歌で、恋の心のさゆらぎを微妙にうたった歌と 생각합니다。

君待つとわが恋ひをればわが宿のすだれ動かし秋の風吹く

敏感な恋愛感情と秋風のさやぎとがひとつになっ
ています。作者は自然と全くひとつになっ
ています。

また、次の聖武天皇のお歌はどうでしょう。

道にあひて笑まししからにふる雪の消なば消ぬがに恋ひもふ吾妹

うそいつわりのない一瞬のまごころのゆらぎを作者は永遠のものとして味ったのです。

前述のように「古事記」は奈良時代に入ってから書かれたのですが、推古天皇のころで終わっていて、顕宗天皇時代の歌までしか記載してありませんが、それから八年後の編纂にかかる「日本書紀」は、持統天皇までの記事を載せています。ですから、「日本書紀」によって推古天皇から持統天皇までの歌謡を見ることができません。その中には聖徳太子、斉明天皇、天智天皇の御歌があつて、これは「万葉集」と重なっています。こ

の時代は「万葉集」の編纂された時代から約百年くらい前で、しかも文字記録も発達していた時代ですから、作者と歌謡との関係は記載の通りと信じていることができます。つまり、「万葉集」の早い時代の歌は「日本書紀」の記事の最終部分と重なっているわけで、推古天皇の頃から天智、天武天皇の頃までに、主として皇室関係の方々の表現形式としてのこされた短歌は、次の時代の、万葉集のみに数多くの歌をのこした額田女王、柿本人麿その他の出現によって、国民全体の短歌となります。

記紀の歌謡はもちろん、万葉集の古い時代の歌も、当時の歌を網羅したものではありませんが、用明天皇、斉明天皇、天智天皇、天武天皇、持統天皇という飛鳥白鳳期の天皇の御歌の数に比して、額田女王と柿本人麿の長歌短歌の数は断然多く、この二人は当時、長歌短歌の作者と目されていたと思われまゝです。

非定型であった長短の歌謡は、この時代に韻律が整頓され、五七五七……七七の長歌と五七五七七の短歌とが、和歌の中心となりました。そのために、多くの人々が短歌を作るようになり、朝廷の臣僚はもちろん名も無い民衆の中にも歌を詠むものが出来たのです。そして、奈良時代の末期に編纂されたと思われる万葉集は、天皇皇族の歌から東

歌うたや防人さきもりの歌を含む国民各層の歌を集める一大国民歌集となったのです。概数、短歌四二四七、全部で四千五百余首の歌が編纂されたのです。

中でも人麿は最大の歌人と目されましたが、彼は持統、文武兩朝に仕えた忠誠の官吏で、地方官として各地に転勤し、遂に

鴨山かもやまの岩根いはねしまける吾をかも知らにと妹いもが待ちつつあらむ

(都を遠くはなれた岩見の国、鴨山の巖の根もとを枕として倒れ伏している自分の最期をも知らずに、妻は自分のかえりを待ちつつづけているであろう。)

という辞世を残して地方官としての生活を終えた「ますらを」でありました。このことは、理想的歌人を専門の職業歌人としなない伝統となったのでしょう。「万葉集」の有名歌人はほとんどみな官吏とその妻たちで、職業生活つまり実生活と短歌創作とを両立させることとなったのです。時代がまだ文筆生活を職業とさせなかったといえはその通りですが、歌人を専門職としなかったことは短歌の国民的性格の基礎となったと思われる

す。

そのために、万葉集の長歌短歌の特徴は、その詩歌が、実生活の体験から生れて、具體的な表現方法をとることになりました。内容は、個性的に分化しましたが、歌の作り方そのものは、直観的な直接表現——率直を尊んだのです。感動の直接的表現を志向しました。

具體的作例については、人麿研究の個所にゆずりませんが、中でも人麿は雄大で総合的で、永遠の歌聖と仰がれることになりました。作者としてはその前に女流歌人額田女王やまのうえのおくらがあり、分化して人生歌人山上憶良やまのうえのおくら、叙景歌人山部赤人やまべのあかひと、旅情を歌ってたくいまれな高市黒人たけあきのくろひと、詩人政治家大伴旅人おほともろのたびと、歌日記を残して「万葉集」の編纂者に擬される大伴家持おほともろ、さらに辺境防衛の決意を歌って民衆の真情を永久化した東国の防人たちさきもり、——万葉集の歌は、ともかく、実生活の直接の体験から声を出しているということができます。その点で、短歌の本道を据えたのです。

また、万葉集には連作短歌の例のあることも、注意しなければなりません。これは、次の時代には消えてしまいましたが、連作短歌が独立短歌と並ぶ短歌の二大形式の二

あることを「万葉集」が示しています。

紙数の関係でここには連作の例をあげることではできませんが、万葉集の秀歌を二十首ほど抜き出してみます。

家にあらば妹が手纏かむ草枕旅に臥せるこの旅人あはれ（聖徳太子）

夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かずいねにけらしも（舒明天皇）

磐代の浜松が枝を結び真幸くあらば復かへり見む（有間の皇子）

熱田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は榜ぎ出でな（額田女王）

楽浪の志賀の大曲淀むとも昔の人にまたも逢はめやも（柿本人麿）

東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ（同）

ものこのふの八十氏河の網代木にいさよふ波のゆくへ知らずも（同）

淡路の野島の埼の浜風に妹が結びし紐吹きかへす（同）

天さかる夷の長道ゆ恋ひ来れば明石の門より倭島見ゆ（同）

去年見てし秋の月夜は照らせれど相見し妹はいや年さかる（同）

あしひきの山河の瀬の響るなべに弓月が嶺に雲立ち渡る（柿本人麿歌集）

石走る垂水の上のさ蔽の萌え出づる春になりけるかも（志貴皇子）

旅にして物恋ほしきに山下の朱のそほ船沖に漕ぐ見ゆ（高市黒人）

しるしなき物を思はずは一杯の濁れる酒を飲むべくあるらし（大伴旅人）

銀も黄金も玉も何せむにまされる宝子にしかめやも（山上憶良）

田児の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ不尽の高嶺に雪はふりける（山部赤人）

み吉野の象山の際の木末にはここだも騒ぐ鳥の声かも（同）

父母が頭かき撫で幸くあれていひし言葉せ忘れかねつる（防人・春日部麻呂）

今日よりは願なくて大君の醜の御循と出で立つ我は（同、火長今奉部与曾布）

わが宿のいささむら竹吹く風の音のかそけきこの夕かも（大伴家持）

新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事（同）

(3) 古今集の抽象的理知的表現

「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集しゆうに有之候ありさふらふ」という爆弾的宣言にはじまる正岡子規の「再び歌よみに与ふる書」は、明治三十一年二月十四日の新聞「日本」の誌上に発表されたのです。前著の「子規の歌と歌論」にも述べましたが、再録しますと次のとおりです。

△貫之は下手な歌よみにて、古今集はくだらぬ集これありさふらふに有之候ありさふらふ。其貫之や古今集を崇拜するは誠に気の知れぬことなど申すものの、実は斯く申す生も、数年前迄は古今集崇拜の一人にて候ひしかば、今日世人が古今集を崇拜する気味合きみあひは能く存申候。崇拜して居る間は誠に歌といふものは優美にて、古今集はその粹を抜きたる者とのみ存候ひしも、三年の恋一朝にさめて見れば、あんな意気地いくぢの無い女に今迄までばかされて居つた事かと、くやしきも腹立たしく相成候。先づ古今集を取りて第一枚を開くと直ちに「去年とやいはん今年とやいはん」といふ歌が出て来る、実に呆れ返つた無趣味の歌に有之候。日本人と外国人との合あひの子を、日本人とや申さん外国人とや申さんとしやれたると同じ事にて、しやれにもならぬつまらぬ歌に候。此外の歌とても大同小異に

て、駄洒落か理屈つぼい者のみに有之候。㊄

文中の「去年とやいはん今年とやいはん」という歌は前著「歌の作り方」の章にも述べましたが、「古今集」の巻頭の次の歌です。

ふるとしに春たちける日よめる（在原元方）

年のうちに春は来にけりひととせをこそとやいはむことしとやいはむ

「古今集」の注釈書として有名な本居宣長の「古今集遠鏡」という書物がありますが、それによると、本居宣長はこう解釈しています。

「年内ニ春ガキタワイ コレデハ同ジ一年ノ内ヲ去年ト云タモノデアラウカ ヤツハリコトシト云タモノデアラウカ」

「年内ニ春ガキタ」というのは、たまたまある年の十二月、年内に立春の日が来たというわけです。太陰暦では、立春の日が一月一日になるようにしてあるのですが、しかし

必ずしもそうはゆかないので、たまたま立春の日が年内に来てしまった。すると、立春の日を基準にするとそれ以後は新年で、以前は去年ということになるが、それは暦の上では同じ年のことになる、だからその同じ年を去年と云ったらよいか、今年と云ったらよいか、というのです。つまりなぞ、なぞです。暦の上と実際とのちがいを指摘したので、その矛盾は全く智的のことです。知識上の問題を提起しただけです。ですから、子規は、憤慨して

「日本人と外国人との合の子を、日本人とや申さん外国人とや申さんとしやれたると同じ事にて、しやれにもならぬつまらぬ歌に候。」

と言ひ

「此外の歌とても大同小異にて、駄洒落か理屈つばい者のみに有之候。」
と喝破したのです。

古今集は、西暦九〇五年、醍醐天皇の延喜五年、紀貫之等きのつらゆきが勅を奉じて撰した二十巻の和歌集で、以後の歌集の模範となり、千年に近い間短歌の流れを支配して来たもので

す。子規の批判は、和歌史の上では、正に決死的のものでした。開卷第二首目の歌は貫之の歌です。

春たちける日よめる

袖ひぢてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらむ

「袖ヲスラシテスクウタ水ノコホツテアルノヲ 春ノキタ今日ノ風ガ
フイテトカスデア
ラウカ」(古今集遠鏡)

「袖ひぢてむすびし水」というのは、夏の水のこと、それが秋になり冬になりして、こおっている、それを今日の春風がとかすだろう、というのですから、「水の四季」とでもいうテーマです。

比較があまり適切ではありませんが、たとえば「万葉集」防人さきもりの歌にこういう歌があります。

わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘れず

(わが妻はいたく恋ひこがれてゐるらしい、その魂が通つて来て、いま私の飲む水としてゐる清水に面影さえ映っている。その妻のことが少しも忘れることができない。)

飲む水に故郷の妻の面影を見て、その一瞬に心を集中して、妻への思いを詠んでゐるのです。自然・人生の現在の一瞬に全精神を集中することによって、そこに永遠のいのちを味わおうとするのです。

貫之のは、水の春夏秋冬の連続の姿を法則としてとらえてゐるのです。これを、正岡子規は、「理屈っぽい」と批判したのです。前の歌は、歌の主題が智的興味ですが、この歌の主題も智的抽象による法則の発見です。清水そのものの姿の美しさをうたつてゐるではありません。清水の一年の変化を頭の中で考えてゐるのです。ですから、この歌を読んでも、何ら感情に打ってくるものを感じません。ただ、何を云つてゐるのだらう、とかんがえるのです。そして結局なるほどと合点するわけです。それも説明を聞いて考えるのですから、作者の考えが正しいか間違つてゐるか、おもしろいかつまらない

か、ということになります。このことを「万葉集」の歌風の具象的直観的に對して古今集の歌風は抽象的理智的と私は言うのです。万葉集の作者が人生感動の一瞬に集中して詠むのに對して、古今集はものの連続變化のすがたを抽象的にとらえるのです。智的ですからまた間接的になります。万葉集の作家が、まあ言ってみて、「あなたが好きだ」と率直にいうところを、古今集の作家はそう露骨に言わないで「恋いとはかくかくのものである」とでも言うような間接的表現をするのです。

古今集中の名歌といわれる

君や来し我や行きけむ思ほえず夢か現うつしか寝てか醒さめてか

など、全体が「質問」のような歌ですが、これが間接的な形での恋の歌とされるのです。各句もほとんど一句ずつ切れているような感じで、一首全体の言葉の調子というものがありません。この歌は前書があつて、「在原業平ありわらのなりひらが伊勢の国へ行った時、斎宮さいぐうであつたとかいう人と絶対に人に知られぬように交つて、その翌朝、人を使い遣る方法もなく

恋いこがれていたところに、女のところからよこしたうたである」という意味の詞書ことばがきがついている。したがって、これは暗号による濃密な愛情の伝達なのです。「古今集遠鏡」にはこう解釈してあります。

「ユウベノ事ハオマヘガワシガ方ヘ御出デナサツタノデアツタノヤラ、ワシガオマヘノ方ヘ参ツタデアツタヤラ、又夢デアツタカ ホンマノ事デアツタカ、眠ツタ内デアツタカ、目ノサメテキルウチノコトデアツタカ、ドウデアツタヤラ ワシヤネエカラ覚エマセヌ、オマヘハドウジヤイナ。」

まずこんなところでしよう。「……夢か現か」という言葉は、うつつともなき心持—現実を信ずることのできないほどの衝撃を受けた心の動揺—の表現に用いられるのに、この歌では「夢か現か寝てか醒めてか」という智的質問に用いられているのです。

この点はすでに江戸時代の賀茂真淵かものまぶちなどの万葉集崇拜者によって感じられていたらしいのですが、幕末「万葉集」の注釈を集大成した鹿持雅澄かもちまさずみはその遺著「万葉集古義」の中に次のように述べています。

△柿本朝臣の、石見国より妻に別れて上らるる時の長歌の終に、

丈夫跡念有吾毛敷妙乃衣袖者通而沾奴

とあるは、心あさきに似てふかきところあり、いかにと云に、相も別るるも、かしこ
 き皇命によりてすることなれば、女によりて心動かすことはせじと、いかばかり思ひ
 たげびても、誰もしたには、めめしくはかなき心おこりて、別をかなしむ旅情には、
 たへられぬならひなるに、しひてさるころをつつみかくして、さるめめしきことは
 思はずと、うはべに丈夫つくりて、人にををしく思はせむとかまふるは、うつはりに
 て、まことの心にあらず、さればそのまことの心のあるがままをつくるはず、丈夫と
 思へる吾なれど、なほしのびあへず、袖とほるばかりに泣きぬらしつといへるをば、
 たれかはあはれと思はざらむ、古今集に、

あかずして別るゝ袖の白玉は君が形見とつつみてぞゆく

とあるは、心ふかきに似てあさきところあり、いかにと云に、夫婦にまれ親子にまれ、
 離別るときに臨て、涙の玉と見ゆばかりに落むは、なほさることもあるならひなりと
 いふべけれど、其をまことの玉のごとくに裏みて持行むといふは、幾倍かまさりてい
 みじき涙なれば、あはれもいよいよふかかるべきに、実にさもあらむとは誰も思ふこ

こならねば、かの袖のとほりて沾るよし、ただあるがままを云るにはたがひて、かへりて心あさし、かくざまにいふことになれるより、われおとらじと、或は涙によりて山水のまさる趣にいひ、或ひは身さへながるよしに巧み設けて、競ひいへること多けれど、みなただ口さきのふかさくらべのみにて、心には深しや浅しやしられねば、今よみ挙味ふるに、すべて身にしみ通りてかなしまることなし、古今集すら、彼朝臣などの歌にくらぶればかくの如し、ましてそれよりこの方はいふまでもなきことなり、すべてかの朝臣等の歌に、花紅葉を雲錦に見なし、涙を玉にまがへたるやうのこととは、一もなきことなるを、はやくさることにも心つかずてあるは、志の高からず、学の力のともしきが故ならずや、ただ柿本山部の大夫たちを歌のひじりなりといふことも、うはのそらなるむかしがたりのやうに、人のいひつたふるをうけつぎたるのみにて、実にそのきはことにすぐれたるをば、えさとらぬは、いふかひなきこととやいふべからむ、

平安時代の初期は漢詩文の隆盛の時代と言われています。唐の文明に追隨した奈良時

代からつづいて、当時の日本の指導層は漢字と漢詩文とを教養の中心としていたのです。「古今集」はこの意味では「和歌」復興の烽火のちしだったのですが、さらにその先駆者ともいべき人物が在原業平です。この業平を主人公にした「伊勢物語」は、いわば業平の歌についての物語なのですが、その中の有名な「東下りあづまくだ」の一節は、「古今集」にも採られています。

あづまの方へ、友とする人ひとりふたりいざなひていきけり。みかはのくにやつはし(三河国八橋)といふ所にいたれりけるに、その河のほとりに、かきつばたいとおもしろく(美しく)さけりけるをみて、木のかげにおりゐて、かきつばたといふいづもじ(五文字)を、く(句)のかしら(頭)にすへ(握)て、たび(旅)の心をよまむとてよめる

在原業平朝臣

唐衣からんぎもきつとなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ

「伊勢物語」の方には、このあとに「みな人かれないひのうへに涙おとしてほとびにけ

り」と書いてありますから、同行の人たちはみなこの歌を聞いて弁当の乾飯かれいの上に熱い涙を流して乾飯がほとびてしまった、というのです。これは誇張ですが、この歌に皆感激したということをお願いしたいのでしよう。

まず、この歌をよく見てみると、詞書ことばがきにあるように、「唐衣」の「か」、「きつつ」の「き」、「つましあれば」の「つつ」、という風にして、各句のはじめに、「かきつばた」の五音を置いています。第一句の「唐衣」は、舶来の中国服のことで、「着る」につづく意味から、「き」という音にかかる枕言葉になっています。そこで第三句までの意味ですが、「来つつ馴なれにし妻つましあれば」とも「着つつ萎なれにし褌つましあれば」とも解釈できるのです。そして、両方の意味があるというのです。はじめの「来つつ」が意味として無理なら、「着つつ」でもいいのですが、その場合だったら、「来」は「着」の縁語というのです。「なれ」「つま」は「馴なれ」「萎なれ」(熟)「妻つま」「褌つま」、「はるばる」は「遙々」の意味でかくれた意味などなさそうですが、学者の説によると、これも「着物」を「張る」ということと関係のある言葉——つまり縁語ということになります。「きぬる」は、「来ぬる」で、まさか「着ぬる」の意味にはなりません、これは「来こし」などではいけな

いので、やはり「着」の縁語なのです。では、たび——「旅」は「足袋」のことではないか？　と思いましたが、「足袋」は当時まだ無かつたらしいので撤回しました。

要するにこの一首の意味は、都には馴れ親しんだ妻がいるので、旅衣の褌はかまの古びたのにつけても、遠く来たなあとしみじみ思う、といった意味です。それに、八橋で見た美しい「かきつばた」を各句の頭によみ込み、第二句第三句は、掛言葉で、同じ音で二つの意味を持ち、また全体として、旅衣の古びるのにつれて旅の遠くなることを「着」「来」の縁語によって示したということです。

この技巧が巧こうち緻であることに、つまりそれだけ言いまわしに努力したところがわかって当時の人は「涙おとし」たのでしょうか。一種のなぞ、なぞなのです。だからこの歌に感心した人は、言いまわしのうまさかわかった頭のよい人なのです。心のやさしい人であったかどうかはわかりません。つまり、「古今集」の歌の目ざすところは、感動の直接的の交感ではないので、しゃれのやりとりに頭の程度をたしかめあう、といったところです。知識をきそいあっているのです。知識の競争ですから、知識の低いものは入りこむことの出来ない世界です。国民的共感などの阻害された世界で、貴族の独裁政治と平

行する教養の独占競争です。清少納言の「枕草子」はそういう世界を生き生きと描き出しています。

万葉集で全国民のものであった短歌は、こうして、平安時代には、貴族や知識人の智識の証拠と考えられるようになってしまったのです。露骨に言えば貴族に独占されそうになったのです。

紀貫之は、こうした間接的の比喩的な言いまわしが、短歌の本質だと考えていたようです。それは貫之の書いたという「土佐日記」を見るとよくわかります。この日記の構想そのものが小説的で間接的なので、これは、土佐守紀貫之とさのかみの帰国、上京日記なのですが、「男もすなる日記といふものを女もしてみんとてするなり」という有名な一句によつてはじまるように、貫之の妻か側室かそういう人物を筆者に仕立てて書いているのです。いわばきわめて近代的な文学意識で作られているのですが、それも自分を間接的に客観的に語るという意図からなのです。自分の歌をひとの歌として書いてそれを批評してみたりしています。歌が作者自身の感情の直接表現であるということは、根本とされていないのです。歌の中心はうまい言いまわしに置かれています。

その例はいろいろあるのですが、ひとつだけあげておきます。「土佐日記」二月五日の記事で、

△五日。けふから辛くして、和泉灘いづみなだより小津のとまりをおふ。松原目もはるばるなり。これかれ苦しければ、詠める歌、

行けどなほ行きやられぬは妹いもがうむ小津の浦なる岸の松原

かくいひつづくる程に「舟とく漕げ、日のよきに」と催せば、楫取かじとり、舟子どもにいはく『御舟みふねより仰おほせ給たぶなり。朝北風あさきたの出で来ぬさきに綱手つなではや引け』といふ。この詞の歌のようなは、楫取のおのづからの詞ことばなり。楫取は、うつたへに、われ歌のやうなることいふともあらず。聞く人の、『あやしく歌めきてもいひつるかな』とて書きいだせれば、実に三十文字みそもじあまりなりけり。▽

貫之はこの「おのづからの詞」を「歌」とは考えていないのです。懸詞とか比喻とかなぞ、なぞとか智的な技巧を使って間接的に作ったものでなくては歌とみなかたのです。

歌は現実体験の直接的表現として生きる意味を作者に味識させるものから、智的興味のかけ合いとなり交際的手段となったのです。悲喜明暗の動乱の人生の伴侶ではなくなくて、観念の遊戯の世界のものとなってしまったのです。紀貫之ひとりのことから言えば、藤原専制時代の政治に対抗して文芸短歌の世界を守ったのかも知れませんが、保身のための敗残の姿でしかありません。万葉集にあった連作短歌が古今集には絶無であることも、この現実的具象的歌風から抽象的観念的歌風への変遷を物語っています。具象的表現から概括的思想的表現にむかったのですが、思想そのものが薄弱で観念的でしたから、成功はしませんでした。彼の最大の貢献は、むしろ、「古今集」の序文の歌論にあると思います。

今やまとうたは、人のこころをたねとして、よろづのことはとぞなれりける。世中よのなかにある人ことわざしげきものなれば、心におもふことを、みるものきくものにつけて、いひいだせるなり。花になくうぐひす、水にすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれかうたをよまざりける。ちからをもいれずして、あめつちをうごか

し、めにみえぬおに神をもあはれとおもはせ、おとこをむなのなかをもやはらげ、たけきもののふの心をもなぐさむるはうたなり。㊦

という「古今集」序文の冒頭の一文は、短歌の本質を道破した千古の歌論です。貫之は歌人というより歌の理論家——つまり歌について思索した人であったのです。

(4) 新古今集の象徴的夢想的表現

現代までの短歌をその表現の手法の上から分類すると、大別して次の三つに分けられるとおもいます。

第一は、「万葉集」の短歌などが代表的のものですが、具体的な感情や感覚をそのまま表現する態度です。見たまま、聞えるまま、感ずるままをありのままに、感情の律動を通して表現するのです。これを現実的手法といっておきます。第二は、「古今集」で代表されるもので、感情の流露を抑制して、知的概括によって暗示するのです。第三は、

「新古今集」などにあらわれているもので、想像的世界に心情を象徴するという手法のものです。古今集については、前述のとおり一応検討したので、つぎに新古今集の象徴的手法をみてみましょう。それには恰好の材料があります。

新古今集の中には、万葉集の歌の改作と見られる歌があります。このことは、既に賀茂真淵や田安宗武によって指摘されているので、いまさらこと新らしく述べる必要もないかとおもいますが、「万葉集」と「新古今集」との比較にはいい例なので検討してみます。

(一)

万葉集 春すぎて夏来るらし白妙の衣ほしたり天の香具山

新古今集 春すぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山

(二)

万葉集 田子の浦ゆ打出でて見れば真白にぞ不盡の高嶺に雪は降りける

新古今集 田子の浦に打出でて見れば白妙の不盡の高嶺に雪は降りつつ

(三)

万葉集 苦しくも降りくる雨か三輪みわが崎佐野さののわたりに家もあらなくに
 新古今集 駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮

「万葉集」のこの三首の改作は、写し誤りとか読みちがいではないようです。そのことは、例えば、第二の、万葉集の「田子の浦ゆ」が新古今集の「田子の浦に」となっていることについての澤瀉おもだか久孝博士の詳細な考証によっても知られるのです。すなわち、澤瀉博士は、実地調査の結果、奈良時代の「田子の浦」と鎌倉時代の「田子の浦」とに地名の移動があったことをたしかめられた。「田子の浦ゆ」へ田子の浦を通してVという経由の「ゆ」は地勢からいって万葉時代にあてはまるが、新古今時代にはあてはまらなくなって、「に」というその場所を示す助詞が用いられるに至ったというのです。したがって、「ゆ」「に」ともに、現実的で正しく、その相違は、手法の相違を意味するものではない、というわけです。これは、万葉集の「田子の浦ゆ」は新古今集では「田子の浦に」となるのが正しいということ、単なる改作でなく万葉の歌を新古今

の時代に合せて改正をしたことを意味するのです。こういう態度が、他の個所にもあらわれているので、「新古今集」の改作は、今日のような万葉絶対の価値感から見れば大それたことのように見えますが、万葉に対しての一種の訂正、つまり、自分たちが作つたらこうなるという意味での改作を行ったわけで、一種の添削を意味したものでありましよう。したがって改作そのものに、「新古今集」の主張があつたとみることができません。

第一例の二首を比べてみます。万葉の「夏きた来るらし」を新古今集は「来きたにけらし」と変え、「ほしたり」を「ほすてふ」と変えた。ともに「天の香具山かぐやま」という体言で終っていることには変りがありません。いわゆる新古今集の「体言止め」という特徴を示しているから、改作者は、万葉の歌のこの「体言止め」に注意をひかれて新古今集に採択する気になったのでしょう。俳句には名詞で切れる句が多いように、体言で止めて対象を提示することは、象徴的表現に便利な技法であるからです。しかし、この万葉の歌の場合、「天の香具山」は具体的山の提示であつて、象徴的の意味はありません。

八天の香具山に、Vというような感じですが、いずれにせよ、体言止めの点には変化はないのですが、他の変化は形の上では小さいものですが、重要なちがいで、一首全体の感じを大きく変化させてしまいました。

まず第一に、一首全体の音調ですが、万葉集のは、「五七。五七。七。」という、短歌の原始的の音調をもっていて、五七の韻律を中心とする万葉の特徴をよく示しています。いわゆる万葉前期の民謡から抒情詩への過渡的の韻律をもっています。

それに対して、「衣ほすてふ」という「てふ」は、「といふ」のつまった形です。そして、この場合は連体形とみることができます。連体形とすれば、新古今の方の音調は、「五七。五七七。」となる。万葉の歌の、正確な五七調の、休止の明瞭な調子が、香具山のみどりと白妙の衣との対照を現わして、初夏の鮮明な色彩の対照と照応するのに対して、「新古今集」は音楽的に流麗な調子で、内容を臙化ゆうかするのです。しかしこのことはともに内容との対応があつて、それぞれの特徴をもっているのですから、直ちに価値の高低をいうことはできません。また、新古今集も「衣ほすてふ」で切れる（終止形）と考へれば、短歌の韻律上の相違はないことになる。

そうすると問題は、語の変化だけです。「来るらし」を「来にけらし」に、衣ほしたり」を「衣ほすてふ」に変えた、その相違だけが問題になります。

「夏来るらし」と「夏来にけらし」とはどちらがうのか。「来る」は動詞で△到来Vの意味です。「らし」は推量の助動詞、したがって「来るらし」は、△ここに来るらしいV△夏になるらしいVの意味。「来にけらし」は「来」は動詞、「に」は助動詞ですから、△来てしまったらしいVということです。夏が来たかどうかということは、作者の判断ですから、どちらかにきまるのが自然です。△来てしまったらしいVというのは、来たということを曖昧あいまいに云ったので、ここにも明瞭な表現をさけた臆化の原則がはたらいています。△ぼくは君が好きだVというのに対して、△ぼくは君が好きになってしまったらしいVという言い方の相違です。前者は後者を女性的と云って非難するでしょう。後者は前者を露骨で味がないというでしょう。どちらにも一理はあるが、ともかく、根本は生活態度・思想の相違であることにはちがいません。

「衣ほしたり」と「ほすてふ」も同じです。前述のとおり、「てふ」は「といふ」のつまった形ですから、△というVとなります。△着物がほしてあるVというのと、△着

物をほすということだVとの相違です。前者は直接の見聞の叙述、後者は伝聞の叙述。したがって、これも前者の率直[、]に対して、後者の暗示[、]という相違となります。

そこで「新古今集」の改作は、万葉の率直・明快な写实的表現を、間接的な曖昧な表現に変化させたものといふことができます。これによって人は、現実具体の生活をはなれて想像の世界にあそぶことができます。ここに写実と象徴との手法上の相違があらわれているとみることができます。現代語に解釈すれば、次のとおりですか。

「万葉集」へ春がすぎていよいよ夏が来るらしい。白妙の衣が乾してある。天の香具山に。V

「新古今集」へ春がすぎて夏になってしまったらしい。白妙の衣をほすという天の香具山は。V

「万葉集」の中の「天の香具山」は具体的山の名ですから、この歌の作者が、この山にいただいていた観念のようなものを考慮に入れてみる必要があります。作者は持統天

皇で、天武天皇の皇后です。天皇の都は藤原の宮でした。「藤原宮の御井の歌」に、「やすみしし わご大王 高照らす 日の皇子 あらたへの 藤井が原に 大御門 始め給ひて 埴安の 堤の上に 在り立たし 見し給へば 大和の 青香具山は 日の経の大御門に 春山と 繁みさび立てり」(巻一・五二)とあります。また舒明天皇の御歌「天皇、香具山に登りて望国しませる時」は「大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は 煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ うまし国ぞ あきつ島 大和の国は」とあります。

「古事記」によると、天の岩戸の段に、

「……天の兎屋根の命、布刀玉の命を召びて、天の香具山の真男鹿の肩を内抜きに抜きて、天の香具山の天の波波迦を取りて、ト合まかなはしめて、天の香具山の五百津の真賢木を根掘じにこじて、上枝に八尺の句瓏の五百津の御総の玉を取り著け、中つ枝に八咫の鏡を取り繫け、下枝に白和幣青和幣を取り垂でて、この種々の物は、布刀玉の命太御幣と取り持ちて云々」

とあります。天の香具山の鹿の骨をとり、それを焼く波々迦をとり、真賢木をとるというので、単なる小山でなく神聖な山として考えられたことが想像されます。そうすると前の舒明天皇の国見の歌も、一種の儀式的な国土讃歌ともみられるので、この山の神聖性と照合しています。とすれば、「白妙の衣ほしたり」の衣も、何かそうした宗教儀礼と関係をもつのではなからうか。藤原の宮から「日の経」つまり東に見られたので、夏の来る方角と考えられていたのでしょう。色彩の対照にのみ心をうばわれた、単なる叙景の歌ではないようです。しかし、手法はあくまで、具体的な明晰な写実で想像の余地をのこさぬ、当時の作者の具体的の生活にむすびついているのです。新古今集にはもう、作者のこういう具体性はなく、「天の香具山」はひとつの抽象観念にすぎない。つまりその歌の世界は観念と想像との世界となったのです。

第二例の二首の比較。万葉の歌は「真白にぞ」とあるのを新古今は「白妙の」に改作したのです。「白妙の」は前の歌にもあって、それは白い妙布たへの意味ですが、この場合は、雪とか衣とかにかかると枕言葉として使用したものらしく、へ白妙のように白いVと

いう意味でしょう。万葉の歌は、△真白に雪が降りつもっていた▽という、その鮮明な雪の白さに対するおどろきの率直な表現ですが、新古今集のは、「白妙の富士」といつて、むしろ重点は、最後の「雪は降りつつ」におくものようです。それも△真白き富士▽と云わずに「白妙の富士」というから、概念的比喩的の表現となつて、富士の姿を感覚的に浮び上らせない。この相違は、当然、その結びの句の相違となつてあらわれ、万葉は「ぞ」という係り結びの結びの連体形「ける」でとまっている。「ける」は詠嘆の意味です。田子の浦の海辺を旅来て、山かげから展望のひらけた場所に出た瞬間、ぱつと目に入って来た霊峰富士の真白に雪をかぶつた姿、おそらく紺碧の空にそびえ立っていたであろうその美しさに驚嘆したのです。これが、「田子の浦ゆ打出でて見れば」であり「真白にぞ……雪はふりける」の語るところです。新古今のはそうではない。白妙のように白い富士に雪がふりつづけている▽という。△田子の浦から富士に降っている雪が見えるか▽というのが酷評であるというなら、あたり一面雪が降り乱れている、その中に遠く白妙の富士が見える、ということがありうるでしょう。か、考えてみる必要があります。明確な表現をさけたために、意味が曖昧になつて、この場合は、現実と照

応しないものになってしまったのです。単なる空想で、霏々として降りつづける雪と真白な富士という絵そらごと、単なる気分だけの表現にすぎないものとなってしまいました。万葉の歌は山部赤人の歌です。

第三例の比較はさらに明瞭です。万葉の歌の旅のくるしみの率直な披瀝を、新古今は想像による一幅の絵に変えてしまった。その雪の夕暮の中に駒とめて、雪のつもった袖をはらおうとするさびしげな旅人の姿、その中に作者は自己の姿を鑄込んだのでしょう。雨を雪に変えたことも美化であれば、「駒とめて袖うちはらふかげもなし」も、空想です。そこで、この改作をめぐる、次のような批判があらわれたのも当然と言わねばなりません。田安宗武「歌体約言」の一節です。

「賀茂真淵がいひけらく、古歌に、くるしくもふり来る雨か三輪が崎佐野のわたりに家もあらなくに、とよみたるは、誠に旅ゆく人のあはれさ、うちききたるだに身にしむばかりおぼゆるに、後の世の人々の歌をもて、駒とめて袖うちはらふかげもなし佐

野のわたりの雪の夕暮、とよみて待るは、よき歌といふにつけては、そらぞらしきやうにおぼゆ、と。実にさることにて、くるし気には聞えて、かへりて佐野のわたりの雪の夕暮見まほしきまでぞおぼゆる。されど、などさる人けとほき渡の雪のくれおもしろきことや待るべき。かくくるしき事もおもしろきやうによみ待ること、おほきなる人の過あやまちともなり侍りぬべき。さてこそ罪なうして配所の月を見んなど、ひがひがしきころも出で来し人、おほくさへなれるなるべし。」

短歌は短詩形であるから、現実的具体的表現を追えば、どうしても連作短歌にむかわなければならず、さらにその窮極は散文詩へむかって解体する傾向があります。そこで連作への傾向を抑制して、一首独立の短歌に作者の全人格を表現しようとするれば、どうしても思想的となり、それはそのまま象徴的にならざるを得ないのです。この象徴が意識的に行なわれるか無意識的に行なわれるかで重大な価値の高低を生ずると思いますが、ともかく、この思想的抒情詩としての短歌の新領域を用意したのが、「古今集」「新古今集」であるとみることができません。そしてこの思想詩としての短歌を作歌の中心として

成功したのは、西行を継いだ形の源実朝であると思います。時代そのものもまた中世日本の新しい統一の核としての思想詩を要求していたと思われ、そこに実朝の「万葉集」以来の歌人としての未曾有の価値があります。前著を御覧ください。

さて、「新古今集」を代表する名歌といわれるのは、

なごのうみの霞の間よりながむれば入日を洗ふ沖つ白波（後徳大寺左大臣）
はるの夜のゆめのうき橋とだえして峯に別るゝ横雲のそら（藤原定家）

などですが、この夢想的象徴的手法は、明治になって、与謝野晶子よさのあきこの作風に通うものがあると思います。

夜の帳にささめき尽きし星の今を下界の人の鬢のはつれよ
清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき

（夜久 正雄）

二 近代の連作短歌

——正岡子規と「アカネ」系歌人——

今日一般に、短歌というものは作者自身の感動を（それが人生上のできごとについてのものであれ、自然にふれてのものであれ）ありのまま率直に、五七五七七三十一音一首一文を原則としてよみこむものである、と考えられています。枕言葉だとか、掛け言葉だとか縁語だとか、歌語だとかいう、言葉の上だけの修辭は第二義的なもので、そういった智的遊戯は短歌の邪道だと考えられています。したがって、万葉集の短歌が本当の短歌で、古今集の歌はどこがよいかわからない、とほとんど誰でも思っています。

また、——このことはまだ充分に理解されてはいませんが——現代短歌の中心は連作短歌であるということを、暗黙の中に認めていて、数首並べた短歌を別に奇異にも感じません、それはひとまとまりで完成したものである、とうけとっているのです。

現代短歌の中心をなすこの基礎概念は、ほかならぬ正岡子規の定着させた考えです。

子規が短歌革新の叫びをあげて、古今集に対する迷信を打破して万葉中心の歌風を確立するまで、また連作短歌を展開するまで、多くの人々は、短歌といえば、例の紀貫之の作のような、あるいは在原業平の作のような、しゃれや掛言葉など言葉の遊戯がその中心だと考えてきたのです。大ざっぱに言えば、子規が出て、短歌は近代人の表現様式として生きつづけることができることになったのです。また、万葉集の短歌のすばらしさも味わうことができるようになったのです。

さて、子規の書いた古今集と万葉集との比較については、「古代歌風の開展」の章で説明しましたので、ここでは子規によってひらかれた「連作短歌」について前著よりもくわしく説明したいと思います。

「連作」が子規の独創である、と言ったのは、実は、子規の弟子の伊藤左千夫いとうさぢなので、伊藤左千夫は子規より年長ですが子規の歌論に開眼して子規の歌の弟子となり、子規の後継者と目されるに至った歌人です。

牛飼うしかひが歌よむ時に世のなかの新しき歌大いにおこる

が彼の、子規の根岸短歌会入門の頃の作で、彼の境涯と作風とをよく示しています。こ

の伊藤左千夫が、明治三十五年「心の花」(佐佐木信綱主宰短歌雑誌)に「連作の趣味」を論じて、

△百世を抜ける見識を以て、然かも、研究倦むことを知らざる正岡氏は、又歌の上に於ても新趣味の開発を遂げたり。連作の趣味なるもの即ち是なり▽

と書いています。左千夫は、子規の「雨中庭前の松を見て作る」十首を連作の紀元とし、つづいて「病床即時」十首に、「連作の歌として」「著しく進歩せる」を認め、「しひて筆を取りて」十首を以て、「完璧なる連作の歌」とし、「連作は即ち吾輩が歌壇に於ける生命なりと断言するに躊躇せざるなり」と宣言したのです。「しひて筆を取りて」は前著の「正岡子規の歌と歌論」の章にも引用してありますから省略するとして、そこに至る前記の例を左にあげておきます。

雨中庭前の松を見て作る

松の葉の細き葉毎ごとに置く露もの千露もゆらに玉もこぼれず

松の葉の葉毎に結ぶ白つゆの置きてはこぼれこぼれては置く

みどり立つ小松が枝にふる雨の雫しづくこぼれて下ぐさに落つ

松の葉の葉先を細み置くつゆのたまりもあへず白玉ちるも

青松の横はふ枝えだにふる雨に露の白玉ぬかぬ葉もなし

もろ繁る松葉の針のとがり葉のとがりしところ白玉むすぶ

玉松の松の葉毎におくつゆのまねくこぼれて雨ふりしきる

庭中の松の葉に置く白露の今か落ちんと見れども落ちず

稚松わかの立枝たちえはひ枝の枝毎えだの葉ごとに置ける露の繫つけく

松の葉の葉なみにぬける白露はあこが腕輪の玉にかも似る

病床即事

ほととぎす鳴くに首あげガラス戸せともの外面を見ればよき月夜なり

ガラス戸の外に据ゑたる鳥籠かごのブリキの屋根に月うつる見ゆ

ガラス戸の外は月あかし森の上に白雲長くたなびけるみゆ

ガラス戸の外の月夜をながむれどランプの影のうつりて見えぬ

紙を以てランプおほへばガラス戸の外の月夜のあきらけくみゆ

浅き夜の月影清み森をなす杉の木末の高き低きみゆ

夜の牀に寝ながら見ゆるガラス戸の外あきらかに月更け渡る

小庇にかくれて月の見えざるを一目を見んとゐざれど見えず

照る月の位置かはりけん鳥籠の屋根にうつりし影なくなりぬ

月照す上野の森を見つつあれば家ゆるがして汽車行きかへる

「雨中庭前の松を見て作る」十首は、いわゆる「写生」論を短歌で実習したというよ
うな作品で、歌をよむために松を見ていたといったような、習作的の感じがします。次
の「病床即時」は、全体としての感動があつて、それを大體時間的順序によつて十首の
短歌に詠んでいます。中に、一首としてはよいのですが、前後の順序の不明な「ガラス
戸の外の月夜をながむれど」「紙を以てランプおほへば」の二首があつて、全体として
の進行に少し難があるようですが、これをもって、左千夫は過渡的のものと考えたので
しょう。私も同感です。

左千夫の連作論は、「連作」を以て子規の独創とした点、子規以外の連作短歌の例は万葉集の大伴旅人おほともたけびとの三首のみとした点、——この二点について論争を呼ぶことになりました。そして、子規は、その絶筆の歌論ともいふべき「心の花」所載の「病床歌話」に、次のように記しています。明治三十五年七月発行の「心の花」ですから、六月頃書いた——恐らく口述筆記のものでしょう。

△連作の歌といふことを左千夫が論じて居つた。その主意は大概推量してわかつて居るが、その文章を見ると多少不穩当の処もあつたやうに思ふ。左千夫君に代つて少し説明して見やうならば、次の如くである。予の松の露の歌と曙あけみの歌と比較してどう違ふて居るかといふと、これを植込たどに譬へて見ると、十本の樹が植えてある植込ならば、予の歌は、その植込全体を右から見、左から見、立つて見、座つて見、いろいろ見て十首となつたのである。曙の歌はさうでなく、その十本の樹を、一本づつ一首の歌として作つたのである。それであるから、もし予の松の露の歌の景色を鉾山の歌と同じ格に作ると、先づ第一首は庭に松の木のあることを詠み、第二首は松の木に雨の降ることを詠み、(云々)といふような風に詠んでゆかなくてはならぬのである。

どちらが善いか悪いかは、勿論形式の上で論ずべきではない。どちらでも面白い歌は面白いのである。▽

「心の花」一月号に現われた左千夫の「連作の趣味」なる文章は、ここで、左千夫・子規系列の一応の結論に達したようにも見えますが、残念なことに、この九月十九日死去した不世出の歌論家子規からこれ以上のことを聞くことはできません。それにしてもこの一文の残ったことは幸でした。簡単な文章ですが含蓄の深い子規独特の文章です。ここで子規の語ったのは、頭初からの考えのようですが、左千夫の連作論が形式に偏っていることを矯正して、価値とのバランスをとり、文学形式というものの本来の意味を明らかにしたもののようです。

子規の文章を見てもわかるように、左千夫の議論はあまり子規中心であったようです。そうまでしなくても、子規が連作の創始者であることには、変りがないといえるのです。芭蕉が「季題象徴の俳句」の創始者であるように、子規は「連作短歌」の創始者といえるのです。文学様式の創造ということは、それ以前に皆無であった新形式を生み出すことではありません。当代の感情思想を新形式に表現することに成功することであると思

います。

子規の文章の中の「曙覧あけみの歌」というのは、次の歌です。

人あまたありて此のわざ物しをるところ見めぐりありきて(志濃夫 廼舎歌集)

日の光いたらぬ山の洞ほらのうちに火ともし入いりてかね掘出いだす

赤裸せのこの男子おとこむれるて鋤あらがねのまろがり砕く鋤つちうち揮ひて

さひづるや碓からうすたててきらきらとひかる塊かたまりつきて粉にする

笥かげひかけとる谷水にうち浸しゆれば白露手にこぼれくる

黒けふり群むらりたたせ手もすまに吹鑢とろかせばなだれ落おつるかね

鏝しろうがねくれば灰とわかれてきはやかにかたまり残る白銀の玉

銀の玉をあまたに篋ほこに収いれ荷緒にのせかためて馬馳はしらす

しろかねの荷負へる馬を牽ひきたてて御貢みつぎつかふる御世みよのみさかえ

これについて左千夫は

△曙覧の銀山の歌のやうに、「山の洞のうちに火をともし」と云ふ光景があるかと思へば、「馬を牽きたてて御貢つかふる」と云ふ所もあつては、位置の統一は勿論時間も決して同時とは思はれぬ。作者の居所も一定して居らぬ。「洞のうちに火をともし」「御貢つかふる」などと云ふも皆想像であつて決して現实的でない。何等の連関も中心もないのである。之を並べて作つた歌と云へば一番早分りである。かういふ風に解釈してくらべたら、雨中の松の歌と、銀山の歌とがどれだけ違つてゐるかと思ふのが分るだらう▽

というのですが、子規はこの左千夫の説を問題とせず、この「曙覧の歌」を連作としてゐるのです。元来、曙覧のこの歌は、子規の発見によるもので、子規が曙覧の歌集「志濃夫廻舎歌集」中の最高の作としたものです。左千夫の連作の規定はあまり窮屈で、観念的です。子規の「雨中庭前の松を見て作る」十首が「連作」なら、曙覧の「銀山の歌」が「連作」であることは、当然と言えましょう。

同じように、左千夫が万葉集中唯一の連作の例とした大伴旅人の次の三首が「連作」ならば、万葉集には他にも相当数の連作例があるとしなければなりません。

太宰帥大伴卿之歌

吾妹子わがもこが見しと柄との浦うらの天木あまぎ香樹のきは常世とこよにあれど見し人ぞなき
柄とのうらの磯いそのむろの木きみむごととに相見あひし妹いもは忘れえぬやも
磯いその上に根ねはふむろの木き見し人ひとをいかなりと問とはば語りつげむか

万葉集の連作短歌をはじめて注意したのは賀茂真淵ではないでしょうか。真淵は、万葉集卷一柿本人麿の有名な歌「軽かろの皇子みこの安騎野あきのに宿りたまひし時とき」の短歌四首について、この四首がひとつづきの作品であって、時間的順序にしたがって創られ配列されていることを指摘したのです。

阿騎あきの野のに宿やどる旅人たむびとうち靡なびき寝いも宿ねらめやも古念いにしへふに
真草まぐさ刈かる荒野あらのにはあれど黄葉もみぢばの過ぎよにし君きみが形見かたみとぞ来こし
東ひむがしの野のにかぎろひの立たつ見みえてかへりみすれば月西渡かたぶきぬ
日ひ並なみしの皇子みこの命みことの馬ま並なめて御狩みかり立たしし時は来向きむかふ

前に長歌がありますので、そこから説明しますと、かるみこ軽の皇子（後の文武天皇）が、父君草壁かべの皇子（天武・持統両天皇の第一皇子、皇太子の時代におなくなりになった）を記念して、阿騎の野で、狩を催された、その時のお歌です。長歌によりますと、飛鳥あすかの藤原の宮から、泊瀬はせの「真木立まぎつ荒山道あらかやまみち」を「朝越あさこえまして」夕方になったので、「阿騎の大野あきのおほのに、旗薄はたすまし小竹のをおし靡なべ」、草壁の皇子御在世のいにしえをしのんで、野宿なさった、とあります。短歌第一首は、その夜のすがたでしょう。第二首に自分たちの目的をかえりみ、第三首に暁の光景をのべ、第四首に、いよいよ昔ながらの狩の時刻となった、とうたっているのです。歌は、夜から明方へとおよぶ時間の順序に配列されていて、父皇太子追悼記念の軽皇子の狩に従った人麿の感想がよく表現されています。

これについて、賀茂真淵は、第四首の「時」が時刻の意味であって季節の意味でないことを、四首を連作とみることで説明したのです。また、真淵の「にひまなび」（新学）にも、

へさて古は、思ふ事多き時は、長歌を詠めり。また短歌も数多く云ひて、心を果せしも有り。後の人多くの事を、短歌一つにいひ入るめれば、小き餌袋に物多く籠めたら

ん如くして、心卑しく、調べ歌の如くもあらずなり行きぬ」と書いています。

これを見ると、真淵はすでに、万葉集の連作短歌に注意していたことがわかりますし、自分でも自然に連作を作ったりしていますが、はっきりと意識して、連作短歌中心の歌風を立てたとは言えません。

そのほか先の曙覧の歌や、吉田松陰の留魂録の辞世の五首、そのほか幕末維新の志士たちの歌に連作短歌の例は数多くあり、それはみな、「やむにやまれぬ心」が自然に、一首にこもり切らずに、連作となったものでしょう。

さらにさかのぼれば、実朝や西行にもその例があります。ですから、連作短歌を強いて正岡子規の独創としなくてもいいのですが、ただ、子規は意識して連作にむかい、古今集風の智的興味中心の抽象的作風を否定し、自由大胆に感動をよみあげる道を開いたのです。用語の制約をも打破したことが、短歌を、いわゆる風流韻事という、上流智識階級のなくさみごとから解放して、実生活の表現の道として、老若男女全国民の真の伴侶としての道を開いたのでした。

子規を中心とした短歌の集りは子規が根岸に住んでいましたから「根岸短歌会」の名をもってよばれ、子規のひらいた万葉集風の連作短歌の拠点となりましたが、子規の死後は、左千夫を中心とする「アシビ」という短歌雑誌が中心となり、つづいて三井甲之の「アカネ」が継続しました。この「アカネ」が伊藤左千夫、長塚節、蕨真、斎藤茂吉たちによる「アララギ」と、三井甲之、大須賀乙字、松本彦次郎、広瀬哲士、川出麻須美たちと安江不空、花田比露思たちの拠る「アカネ」とに分れました。そして「アカネ」は「人生と表現」となりました。しかし、連作短歌という形式は、いずれにも子規の影響として残され、大正時代の歌壇の中心となった「アララギ」は連作短歌中心で、やがて歌壇全体に及び、遂に俳句でも連作を作るようなことになりました。俳句の連作は勿論成功するわけありませんでしたが、今日では短歌は連作短歌中心ということは、短歌そのものの具象的現実的な作風からいって当然のこととされています。

「アカネ」を主宰した三井甲之は、明治四十四年五月、タブロイド版「アカネ」復刊号に、次のように記しています。

△小生等は東京文科大学の同窓数人を中心として去る明治三十七年より研究に創作に

相勵み居りしものに有之、斯道の先進はもとより正岡子規を中心とせる人々との交通、宗教的信念の感化等により漸く実生活に面接する個人としてここに最後の到達地を生きたる現実に求めむとするものに候。先進の感化と同志の奨励と、信念の同一鹹味かんみの同胞的生活に吾が生の意義を求むるを実験しつつあるものに有之候。

小生等は充実せる生命を欲し候。外形の変化、新奇の色彩形状等を生命とし候はば畢竟一利一害一長一短到底円融無礙むげの大歡喜に達すること無之と存候。自己にとりては自己以外に更に確かなるもの無之、自己にたより候へば時に沈黙に落ち可申、質素なる外形の下に充実せる生を樂み可申やう相成、一見迂愚うぐに類すべく候へども却つて一時の繁榮によつて永久の生命を失ふものを憐まむとするものに候。小生等が虚名及利養を主とする一般文壇の外に立たむとするのは此故に候。……

同じ号の甲之の歌論「深刻の歌」は、鹿茸渡、岡田質の歌を例歌としてあげ、△最近『日本及日本人』誌上に掲載しつつある歌の如き、人生の血を以て書かれ、生命を費して歌はれたものがある。吾々は明治歌壇に於て斯かくの如き歌に接するを得たのを無価の宝珠として再録せむとするのである▽と次の歌をあげています。

石橋（鹿音 渡川出麻須美）（連作短歌）

利きものら住める狭き国谷ゆけば衣をかへす風のすずしさ
山ふかくどよもす風に胸ふるひをどるが如し此の岩むらは
谷川を埋みてつめる木のひまを高鳴りすぐる水のさやけさ
仰ぎ見ればごごし石橋あざやかに空よこぎれり草木かざして
雨風にされし石橋しみいでて石うつしづく骨にひびくも

胸せきてむれ立つ岩木山の上にもだへてあるか己をにぎりて
洞あなのしろきいしかべ 冷にこころ眠れり石のほとけは
谷川に黒木なげうつどよめきの洞にとどろきていかづちの如し
山峽をとびかふひよどりが声にいのちふるひつしき鳴けひよどり

「鶴沼にて」より（岡田 質）（連作からの抜粋）

松の根の浜路たどりつうば島のなみけぶりにもあが胸いたし
夕されば淵のへの松いたも鳴りて海のもくらし涙あふれつ

萩の根に水泡みなほおしくるあげしほの岸に立ちつつ去年をかへり見つ

松原のなかのひろみち吾は行かず砂山ほそちあへぎたどりし

部屋々々のどよもしよそに震みぞれふる音をさみしみともし火まつも

「アカネ」創刊以来甲之の主張した宗教的求道の芸術化としての短歌は、ここに一層その性格を明らかにして「実世間に直接の」いわば「生命の短歌」とでもいう力ある歌を本領とするに至ったのであります。この甲之の主張に共鳴した歌人は、「日本及日本人」甲之選の歌欄に集まることとなりました。この人々は歌人として世に立ったのではない。歌をつくらんがために歌を詠んだのではなく、実生活からその実生活の意味を味うために歌をよむという、短歌の本道を歩いたのです。しかしその表現力が専門の歌人に劣るものでないことは前の二例によって明らかでしょう。形式は子規によって創開された連作短歌様式により、一首全体の調子を万葉短歌の力強い調子にとり、作風は現実的であることを本領としました。

「アカネ」復刊号に、いわば誌友、同人の消息として甲之の書いている人々は、根岸

短歌会系統の人々として、赤木格堂、岡麓、香取秀真、安江不空の諸氏であることも、根岸短歌会が左千夫の「アララギ」と甲之の「アカネ」と安江不空中心のものにとに分派したことを示しています。また「アカネ」は根岸短歌会同人の中の「アララギ」系以外の人々と密接な関係をもったことをも示しているのです。当時の代表的な作品をあげて子規の連作短歌の展開をたどりたいと思います。一々説明を加えませんが、ここにこもる明治の青春の永遠のいのちをよみ味わうとともに、連作短歌の呼吸を会得してください。

三井甲之「民の憂」

吾が郷里山梨県にて甲府市に水道施設の計画あり、有名なる御嶽新道に沿うて流るる荒川に其水源をとらむとす。由来荒川は水量乏しくさなきだに年々旱害に苦しめる沿岸村民は今後の惨状を思ひ寝食に安んぜず。元来甲府市は荒川の水利と関係なく最近に発達せしもの荒川沿岸十個村の部落は上古より同河川を俟って発達し今日に至りしものなり。村民は祖先の地の荒廃を思ひ当局者に之が救済の方法を講ずべきを要求し目下交渉中なり。予等遊学の徒亦故郷の事を思ふ切なるものあり、乃ち作れる歌

なまよみの甲斐の国原開けしゆ此の川のべに住みけむ民草

荒川と名に負ふ河瀬落ち激ぎつ水は澄めども乏しくありけり

乏しらの水にしあれば民草の命こもれり細行く水にも

春くれば麦生緑りに靡かめど秋の八束穂熟らずばいかに

祖先の国にしあれば今更に去なむと思へや飢ゑて死ぬとも

ふみよまぬ民といへども心をしもつとふものぞおろかにな思ひそ

晴信の古へゆ今なさけにし慣れたる民ぞいたはり思へ

現し世の権の力をふるまひて死ぬと滅びぬ罪をな作りそ

商人の市の賑ひそれもあれど瑞穂の国ぞ民草を思へ

市をもとに榮えし西の国ふりと瑞穂の国と同じと思へや

西の国のよきをまねばむしかれども事のありさまつばらかにみて後

去年の秋出水のすさび押し流し住むに家なき民もあるものを

現し身のまのあたり見るわざはひを除きての後其他をはかれ

去年にして出水になやみ今にして早に泣かばこの民をいかに

言はまくもかしこかれども大御世に事のたがひのありと思へや

岡田 質「あま雲」

あま雲の低くおほへか室ぬちに胸いやとづるわが世思へば

雨ぐもを突くや高嶺風たかねにふかれゆらげる木きずゑ心いたまし

そのかみはいゆと信じいまさらになにのうたがひみ手のもとにして

そのかみの柳はあふげどあな悲し病ゆ立ちし力まだ湧かぬ

あまぐもの閉ぢし胸ぬちわが恋のいのちし思へば湧きくる力

あたらしき念ひ湧くむね庭木らに雨はそそぐか風も吹き添そはむ

にひじほの血しほ吐きたる其時そのにさながら似かよひさわぐ胸内

つまづきかあらず此思このひ天つ日の明らかに知れり君恋ふなげきと

大ぞらにはぢぬ此の恋しかれども病み身しもへば堪へ得ぬ悲しみ

西といへば何ぞ恋しき落つる日のいろどる雲を見れど飽くしらに

よろほひて出でつつ垣との外君を恋ひうらなげき居れば富士も見えざりき

なつぎくの匂へる窓ぬち歌まきをともに見し君と相見むはいつ

相見てはただもだしあらむあふれくる悲しきおもひに君もなくが故

ああ君が心いかにせむわが病なげくそのこころ裂くるか此のむね
いゆる日かあらず死ぬ期かうらなげく君のおもかげ去らまくはいつぞ
あひ念ふつよかるまことそのちから病いやすとふ君よ泣きそね
ひとり思ひなげきてあれば室内は暮いろはや濃しともし火未だ
新しく生くべきいのちあが胸とあが信ともへばなになげかむや

岡田 質「夕べの浜」

世のさだめもひて立つなぎさ日の落ちしひととき潮うしほは雪のごとくに
日落つればにはかにさびし波の穂のしぶくわが顔ひえとほらむか
胸とざしこしかたもへこそ黒みゆく海にひそめるいのちの悲しさ
あめつちのいのちのしるしかああかなしたちどふえくる夜潮よしほのひびき
眼をとちてうづくまるなぎさしまらくは大地のゆるぎやまぬ思に
ああ吾はかなしき君ゆゑうつし世のいのち追へこそなげきはやまぬ
眼あくれば風もつめたし海のもはいよいよくろめどなほさがてに

あま雲をもる日かそけく碇いかりまく音かなしもよ別れゆく身は
港みなとべに妹いもは来こねどもいづべゆか見みつつあるらむ出でゆく船を
かなとでに妹がわたせしふみよめばやさしことのは見るに堪へずも
火を噴ふきし昔ゆめむか開聞かきもんのみ岳たけもだせりゆふべの空に
佐多さたの門とに船ちかづけばおほなだの俄たちにかたぶき疾吹とくあま風
海角かいかくにかがやくともしあな悲しゆらぎだにせず荒海にむかひて
かたぶける筒つつゆふき出いすくろけむのふとくよこたふけはしきうなづら
笛ふえふきて馳はせすぐ船はこの夜らを入りて泊はつらむかの港みなとべに
秋冬のながきいたづき護もりし子にかく別れゆくなにのさがぞも
目にちかき日ひる向むかつら山とのぐもりかなしきかもよ駛はせゆく我船
ほのぐらき室むろにいぬれば船のへにくだくる浪の音のかしこさ
ひとごとに心こころいたためかにかくに訴なへし妹が姿しぬばゆ
ひと恋ふる心さげすむ支那人の教に死せるくにびとあはれ

油津あぶらつに船つきぬらし夜よごもりに汽笛しば鳴りあたりさわがし
うまし夜のさざりわかれて朝北あさきたのひたふく海原日かげさし出いでぬ
海のいろ白帆とぶかげながめつつゆらく心のうつつともなし
速吸はやすひの迫戸せとをめぐれば妹がゐる筑紫つくしの山はうすれゆくはや
酔ひし人むらがり出でてほめそやす池うらひなす内海うちうみ見るもうるさし
さ夜ふけて風ふく海にみだれるこのあま船神護まもりたまへ
妻子らにとほく別れてよもすがら揺られゆきけむいにしへびとはも
こき水をゆたに湛へてとこしへにゆらめく海よわれは泣かゆも
このふた夜海よにあかして我港ちかづきくれど楽しくもあらず
明石門あかしとに我船入ればすすけぶり空になびきてももふねつどへり
呼びかはす汽笛かなしく船の上のあわただしきも夢かと思ほゆ
ふるさとに父母ふぼ待ちまさむ別れ来しかの子はひとり泣きてあるらむ
行李こよりもちなづみてゆけばやちまたに雨そそぎ来ぬほこりあげつつ
あめつちも我を苦しむるかよしさらば小雨なにせむどよもせいかつち

川出麻須美「貨車」

構内に貨車おすひとびともろ声に押せども押せど車うごかず
ひく波のよせくるちから呼吸あはせ押すよをのこはおのれを信じて
夕やけの空にまくろきすゝ貨車のやゝにゆるぎづいや押せ人々
ぬかに立つ汗もな拭きそこのはづみはづさばまたもとまらむ車
音たててゆるぎづ車はしりつつ押しゆく人らかちどきたかし
ほのぐらき倉庫に車おししづめ人わかれゆきぬさむきちまたを
夜に入れば汽車もかよはぬ田舎まち音なき空にしげき星影

茂木一郎「蒙古より北京へ」

ことなれる一つの世界蒙古へとらくだの通ふすなはらのみち
見るきはみ黄色にかすむ野のはてに奇しき習ひの人ら住みけり
沈みたる土色の村の暮れがたを鈴のねにぶく駱駝群れつきぬ
足のろき駱駝のせなに眠りつつ曆も知らで京へ来し人

のどけき日北京のはづれ入りきたる駱駝の鈴はいにしへ思はしむ
足のろく目ばたきにぶくゆるゆると駱駝のむれの町に入り来つ
都大路おほぢ今めく馬車の走れるに駱駝のむれの落ちつきあゆむ
鈴の音に駱駝の群の調をそろへ蒙古のままに京をあゆめり

「明治天皇崩御」(余生——人名か雅号か不詳——作)

号外の鈴の音日に幾度いくたたびとはげしくなれり世に何事の起りしか
新入監者は声をひそめて天皇御不例ごふれいのことつぶさにかたりぬ
監内のものは耳そばだて御不例の話をしききて胸おどろかす
東の方に向ひて手を合せ御悩ごのうやすかれと祈りまつれり
被告らは己おのがことをもうち忘れ御悩平癒をひたに祈れり
七月三十一日に不時の出房せしめられ陛下崩御のこと敵せきかにつたへらる
ききしもの皆咽むせび泣けりわが父をわが母を亡ひし時の如くに
世の人に恐れ憎まれし人々も頭かしらえ上げず涙にむせびぬ

田代順一「雲か、萍か」

いく山河こえさりゆけば道のべに木挽こびきうたひて生木なまきを裂けり

生木さく歌は谷より山にひびき天にひびきてまたわれに来ぬ

木挽うたきけばおもほゆ房吉がねものがたりの深山みやまの話を

となりまではいづれも二里をさる村にわれは何時しか入り来りしかな

大空に朝日みちたりしかはあれどこの谷の村を照さむは後

うづまきのちぐさもいろいろにはてしなくうごくを見れば飽くことを知らず

五六隻の荷船をひきてさかのぼる蒸汽のひびきよあめつちに満つ

曳船はいづくに行きしか水わくるひびきはなほもひびきてあるに

あはれあはれ山なす荷船はかるやかにゆらぎいでたりこげこげ舟人

なんといふ妙なる歌ぞ舟人の大きかひなにひぶく櫓の音

もだし立つ山のいのちのいぶきかも峯よりのぼる大きわた雲

あまざがるひなはたのしも野に山に聞くことごとくはたらきの歌

雨に日にいくかささらさば彼がごとこげ茶の膚はだはなりいづらむか

あふぎ見る坂は二つに裂けしかとばかりわだちのあとつきてあり

この丘を越しけむ時は人も馬もいかに苦しくたたかひつらむ

丘の道に大きわだちの残したるそのあらぼりの何ぞ力強き

ゆく国はわかたただよひひろくして住む人もしくつとめはまてり

千載の一ときなるぞわれらいま生れあひしをみおやによるこべ

はらからよまなこをあげて日の本の世界に於ける立場たてを思へ

はらからと大きい日の本のいのちに立ちたたかふもへばよろこびみちふるふ

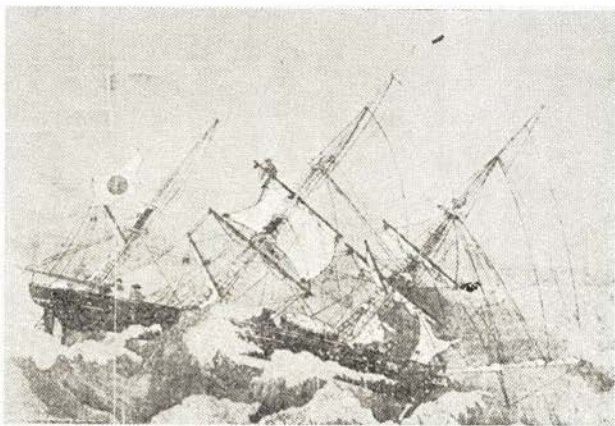
日のいづる国の人々よこぞり立ちたたかへつたへしいのちに立ちて

いにしへをふかくかへりみ万国をおもへくにたみふるはでやあるべき

(夜久 正雄)

附録

亡き師・亡き友の歌
(抄)



鈴藤勇次郎画「威臨丸烈風航行の図」より

附録 亡なき師・亡なき友の歌（抄）

はじめに

- (一) 三井甲みついこうし之先生・三代の歌と歌論と思想
- (二) 川出麻須美かわでますみ先生・三代の歌人逝く
- (三) 黒上正一郎先生・友情の歌
- (四) 田所廣泰さん・国士の悲歌

はじめに

次にかかげる四人の方々は筆者にとって文字通り歌の師であり、道の師であります。戦前、戦中、戦後にわたって、この方々の教えを仰いで生きることのできたことを私はこの上なくありがたいことだと思っております。しかしこの方々は私にとってありがたい師友という以上に、明治、大正、昭和三代にわたって、国のいのちをまもるはげしい戦いのあとを残された方々です。私はこの方々にはじない生涯を送れる自信はありませんが、この方々のあとにつづきたいとは思っています。その心持を、この方々のことを知らない多くの方々におつたえしたいと思って、筆をとったのが本文であります。しかし対象の大きさにくらべてつたなく小さな文章になってしまつて、師友を傷けることがなかつたかとそれが心配です。

この方々についての研究はそれぞれ長篇の劇詩とか研究論文となるような性質のものですが、私の書いたものはほんのデッサンにすぎません。それでも私としては精一杯の努力でしたので、筐底に置くにもしのびがたいものがありまして、附録として掲載させていただくことにしました。

この方々を知らない方々に向つて公表する文章の中に私にとつての関係を主に「先生」とか「先輩」とかいうことばを遠慮なく使つたことを押しつけがましくお取りになる方があるかも知れませんが、私としてはそう書くよりほかの書きようがありませんでしたので、許容していただきたいと

思います。その点について気がかりの読者諸氏は、私が「先生」とか「先輩」とか書いたところを、それぞれの名前に読み代えていただければ幸甚であります。ただ敬語法についてはできるだけ簡略なものにしました。この方々のことは、私は今後とも研究をつづける考えであることは勿論ですが、なお若い方々の中に、もっと深くこの方々の足跡をたどってみようとする人があらわれるならば、幸いこれにすぐるものはありません。

(夜久正雄)

(二) 三井甲之先生・三代の歌と歌論と思想

① まえがき——正岡子規の系譜と三井甲之



三井甲之先生肖像(1)
(明治40年ころ)

正岡子規の死後、子規創立の「根岸短歌会」は、伊藤左千夫^{さち}を中心として短歌雑誌「馬酔木^{あしび}」を発行しました。これは明治三十六年の創刊で四十一年廃刊となりました。つづいて、左千夫の依頼を受けた三井甲之^{こうし}が、「根岸短歌会」の名義で明治四十一年二月「アカネ」を創刊したのです。「アカネ」歌欄には、「馬酔木」

同人が名を列ねて、長塚節^{たかし}、安江不空^{ふくう}、柿の村人(島木赤彦)、依田秋圃^{あきう}、平福百穂^{ひらふくひやくすい}、胡桃沢勘内^{くわみざわかんない}、

望月光、岡麓（おかくら）、斎藤茂吉、古泉千樫（こいずみ）、増田八風、三井甲之、蕨桐軒（わらび）、蕨樫堂（きょうどう）、伊藤左千夫たちの短歌が載っています。子規系歌人を網羅したものでした。ところが、やがて短歌の評価について左千夫と甲之との間に意見が対立し、左千夫は、節、茂吉、赤彦、千樫たちと蕨真（樫堂）の創刊した阿羅々木（「アララギ」）（明治四十一年十月創刊——）に拠ることになりました。つまり、「アカネ」は分裂して「アカネ」「アララギ」平行となったのです。こうして、「アララギ」は大正時代を通じて歌壇の主流となり、いわば専門歌人の牙城となりました。これに対して「アカネ」は短歌中心の思想評論誌としての性格を強め、明治四十五年五月「人生と表現」と改題し、大正五年までつづきました。（大正十年復刊）

左千夫・甲之の論争、甲之・茂吉の論争は齒に衣を着せぬ率直な応酬が当時の歌壇を賑わした。その内容は当時の「アカネ」「アララギ」その他でたどることができませんが、いまここでは触れません。甲之の意見については第三部の「近代の連作短歌」にその一端を述べました。ただ当時、東大国文科卒業の新進の三井甲之が、子規、左千夫の後継者と目されて、花々しく歌壇論壇に登場したことを記しておきたいと思います。当時の思想界に大きな権威を持っていた三宅雪嶺主宰の「日本及日本人」（月二回発行）が明治四十一年九月から歌欄の選者に三井甲之を迎えたことによっても甲之に寄せられた当代識者の期待の程度が推察できます。当時俳句欄の選者は内藤鳴雪で、三井甲之がこれと並んだのです。子規系の短歌の系譜をたどる場合に、大正以後の「アララギ」の隆盛に

眩惑されて、子規―左千夫―茂吉―土屋文明という系譜のみに目を奪われ、三井甲之を中心とする「アカネ」及び「人生と表現」系歌人の存在を見落してはならないということを一言しておきたかったのです。

子規の系統にはこの他にも、安江不空・花田比露思・依田秋園等の関西根岸短歌会系や赤木格堂・雑賀鹿野（さか）の福本日南系の有力歌人がおり、戦後「安江不空全歌集」とか「鹿野歌稿」とか、すばらしい連作短歌集が出て、歌壇以外のところで高い評価を得ております。子規の短歌革新の命脈は「アララギ」よりもむしろこうした国士的な人々の活動と作歌によって伝えられたと私などは信じています。この点については、前著「短歌のすすめ」に、現代短歌の批判にふれて、山田輝彦氏の指摘するところですし、また広瀬誠氏が「国民同胞」誌上その他にその研究を発表しているところでもあります。一般的には、前述のように「アララギ」一辺倒の見解が行なわれておりますので、当時の事情の一端を述べて異をとなえさせていた次第であります。

② 青年時代の歌と歌論

さて、三井甲之先生の歌ですが、前述のとおり本書第三部の「近代の連作短歌」に、青年時代の歌と歌論の一端を紹介しました。

三井先生は明治・大正・昭和三代にわたる歌人・評論家として著名な文学者ですが、戦後の思想

界から完全に追放されましたから、いまでは知る人が少いかも知れません。「日本文学大辞典」「和歌文学大辞典」の記事を参考にして一代の業績を述べてみたいと思います。

先生は、本名甲之助。明治十六年山梨県甲府市の郊外にあたる松島村に生まれました。明治三十三年旧制第一高等学校に入り、三十七年東京帝国大学国文学科に進みました（二十二歳）。自撰（昭和六年）「三井甲之年譜」に拠ると、三十七年当時の思想生活について

△一高徳風会及び求道学舎にて近角常観師ちかひつねにより親鸞の宗教を信じ、松本亦太郎教授によりウント研究の端緒を与えられ又ゲーテを研究す。根岸短歌会に入り、伊藤左千夫の茶道を中心とする造形美術趣味と親鸞の「心理学としての宗教」との連絡をつけつつ「アシビ」に歌及び論文を發表す▽

と書いてあります。「三井甲之歌集」は昭和三十三年刊行で、いわば遺歌集であります。その巻頭には、「正岡先生三年忌歌会」の二首が掲げられています。

秋海棠の花咲き出でてくれ竹の根岸の庵に秋三たび来ぬ（根岸庵）

椽に近く秋海棠の花咲きて昔を思ふ秋となりけり（同前）

二首とも子規系らしい素直な作風で三井先生が子規から出発したことがわかります。子規の三年忌、

明治三十七年十一月「アシビ」所載、甲之二十二歳の作です。「三井甲之歌集」にはまた翌三十九年の歌として「心のままを」十七首を、近角常視師の雑誌「求道」くどうから採って掲載しています。そのはじめの二首は次のとおりです。

人の事を偽りといふわれが身をかへりみすれば偽りのわれ
偽りのわれをもすてぬ御仏みほとけの慈悲はおもへど憂なほやまず

宗教的思索の表現です。こういう人間の内面的精神生活の思想的表現は子規の歌の中には見られないところで、三井先生たちがはじめて開拓した世界ということができましよう。解脱を求めてうずまく青年の内心のなやみが表現せられたのです。先生の思想的短歌の世界はこうしてひらけたのでしょう。前の子規忌の二首にもまして、三井先生の作風を示しています。つづいて当時名作の名の高かった「御嶽に遊びて作る歌」「四尾連湖に遊びて作れる歌」等郷里の自然を詠んだ連作短歌があり、四十二年一月一日「日本及日本人」に「民の憂」が発表されたのです。その作は「近代の連作短歌」に挙げたとおりです。川出麻須美ますみの「航海」と並ぶ明治短歌の傑作の一で、先生の青年時代の代表作ということができましよう。

これよりさき、先生は明治四十年、二十五歳で東京帝大を卒業しました。卒業論文は「万葉集に

つきて」で、四十一年から根岸短歌会発行雑誌「アカネ」に発表された歌論がこの論文です。昭和四十年松田福松先生が三井先生遺稿中から卒業論文の毛筆原稿を発見しました。その表紙には

△過ギ去ルモノハ美也 愛ハ死也 人生ハ生存也 人生ハ不美也 人間の目的ハ死ノ美ヲ追求ス
ルニアリ 涅槃即美也 生キ居リテ涅槃ノ刹那ヲ経験シ生ノカギリ之ヲ追想ス 詩歌存在ノ意義
ココニ存ス▽

と書かれてあります。（「三井甲之存稿」に拠る）。歌論というよりも人生論宗教論を予想させる文章です。この論文は先生の最初のまとまった歌論で、先生の生涯の研究の方向をも示しております。

この論文の価値について論ぜられたものを近年まで見たことがありませんでしたが、たまたま、土屋文明「折り折りの人」（昭和四十一年一月二十七日朝日新聞連載）の中に「三井甲之」の一章があつて、当時の評価の一端を示しています。

△……（アカネ）毎号の三井甲之の和歌入門という題で万葉集を主とした記事は、特別に興味を引いた。あとで聞いた話であるが、これは甲之が国文科の卒業論文を元にして書いたもので、あるいはそのままの部分も多いだろうということであった。

その時代には、東京大学の国文科の卒業生で、万葉集を研究題目としての論文は、何年に一人と
いうくらいのものであったとも聞いた。たぶん古泉千樫、斎藤茂吉たちからであろう。
とにかく『アカネ』の所説は私にはすべてがめずらしく、すべてもっともに受けとれた。ホヤホ

ヤの文学士たちが気負って書くのであるから、田舎の中学生には、むづかしい所があるにしても、大体は共鳴することが出来たのであろう。大須賀乙字の俳句論、広瀬哲士の仏蘭西文学紹介、皆目新しかったが、やはり甲之の万葉集論を中心とした、甲之の書くものが、私にはいちばん印象的であった。

私は甲之の論旨をば直ちに実行に移した。万葉集を読めとあるので、中学生としては大きな負担であるが、大阪版の略解を買い、さらに歌学全書本を求めた。歌をいちいち暗誦するぐらいにせよとあるので、暗誦にとりかかった。中学四年生であるが、進学の希望を打ち断たれて、そのため学科の重圧はなかったから、万葉集を手製のカードに取って、通学の道々復誦した。短歌だけであったが、第三巻くらいまで出来たのではなかったかと思う。私は時々私が学校で心理学科を選んだ気持を尋ねられることがあるが、これなども甲之の『アカネ』の記事が最も大きな動機であつたろう。▽

先生の研究は、子規の万葉復活を一步すすめて、万葉集の歌を万葉歌人の人生体験の表現とみて、そこに、彼らの人生の根本的態度を汲み取り批判しようとしたものであります。例えば、人麿の歌の優劣を、完成せられた形についてのみ論ずるのではなくて、正岡子規が、源みなもとのよむらへ実朝の歌について論じたような態度——つまりその歌の出でくる根本の人生態度にさかのぼって、万葉歌人を論じ、

万葉集の価値を批判したのです。そうして彼らの精神を味わうことによって研究者自身の実人生の目標をうち立てようとしたものでした。いわば、子規の文芸的な態度から、人生全体の問題をとりあげようとする宗教的態度へすすんだものとみることがができます。これはこの研究ばかりではなく、実作や選歌にもあらわれて、「アカネ」「人生と表現」「日本及日本人」所載の短歌は「国民同胞和歌集」となったのです。そういう意味で、三井先生の生涯の研究の方向につながるものであるのみか、後年、「明治天皇集研究」に結実した「文献文化史的研究方法」の萌芽を明らかに本論にみとめることができるのです。（「今上天皇御歌解説」附「万葉集論」——斑鳩会、いかるが昭和四十二年発行——参照）

③ 先生の求道心と明治天皇崩御

大学における先生の指導教授は芳賀矢一博士であつたはずで、「自撰年譜」同年の記事に「高よりの同窓増田八風、広瀬青波及び仙台の大須賀乙字と提携、根岸短歌会の岡麓、長塚節、安江不空等と交る」とあります。つづいて四十四年の記事に「川出麻須美、松本金鶏城同人に加はる」とある川出麻須美は旧制第七高等学校出身、松本金鶏城は本名松本彦次郎（歴史学者）で一高一年先輩で東大出の文学士であります。この人たちが同人となって明治四十四年「アカネ」（タブロイド版）が創刊され、四十五年「人生と表現」と改題されました。そしてこれと平行して、三井先生

は、明治四十一年から「日本及日本人」に和歌を選び昭和六年に至っています。また同誌にはほとんど毎号論文を寄稿して昭和十年に至ったということです。前述のとおり「日本及日本人」は三宅雪嶺主宰の綜合雑誌で当時最も權威あるものであったといえるでしょう。その歌欄の選者であり評論の寄稿家であった三井甲之の名は、東大出身の新進の文学者としてまことに花々しいものであります。しかし、三井先生の当時の志は、評論家としての花々しさとは対照的に、内面的求道的なものであったのです。

明治三十七、八年の日露戦争を大学国文科在学中に経験した先生は、後年、「日露戦争に死ぬべかりし身をながらへて」と述べておられます。これは後年の人生観に立ったロマンチックな回想とみられがちですが、勿論、単なる言葉のあやではありません。明治四十年の東大の卒業式に、明治天皇の行幸があったことを感激をもって書いてあるところを見ても、先生の青年時代の国民的情意がしのばれます。これがまた先生の思想・人生観の基礎になり、求道発心のよりどころとなったのです。

近角常観による親鸞の宗教への開眼は、「求道学舎」という名のしめす通り、「求道」ということが重要で、野心を持って！という意味で普通にいわれるポイズ・ビー・アンビシャスとか、立身出世とかということが先生の社会活動のライトモチーフではなかったのです。旧制一高の文科から東大の国文科に進んで旧制中学教員になったという経歴にその思想がうかがわれます。同窓の法科出

身の著名人、郷古潔（三菱重工社長）、杉村陽太郎（フランス大使）、鳩山秀夫（法律学者）、穂積重遠（東大法学部長、最高裁判事）などと比べてみても、三井甲之を動かしたものが何であったか、想像できましよう。

こうした先生の心魂をゆるがす大事件が起りました。明治天皇の崩御です。先生は主宰した雑誌「人生と表現」大正元年九月号に黒枠付きで「先帝をしぬび奉る」という題の次の文章を発表しました。

△明治四十五年七月三十日先帝は崩御あらせられた。御惱あらせられ崩御あらせられるとうけたまはり驚き悲みまどひ泣ける国民の心はとこしへに一すぢの心である。われらは長き眠より目さまさされたのである。いにしへより一すぢに伝へさせ給へる大御心はとこしへにわれらにのぞみ給ふのである。

われらは明治の大御代に新しく世界にあらはれたのである。われらは今われらであり、世界の人類であるがために日本民族であることを自覚せねばならぬ。

大正の大御代に先帝をしぬび奉り今上陛下につかへまつらむは先帝に対し奉るわれらの信念である。▽

「日本及日本人」八月十五日号には、三井甲之助の名で「先帝の御製」と題する、奉悼論文ともいふべき論文が発表されました。これがその後の先生を導びいた明治天皇御製の研究の最初の論文と

なつたと思われます。その中で、先生は、明治天皇の御製のしらべに切断のないことをくりかえし述べてその事実を畏おそこみ、明治天皇にとって和歌が趣味の一つではなく人生の根本の道であつたことを述べて、佐佐木信綱の説を批判しています。

九月十三日、先生は中学校の教員として生徒を引率して御大葬の道すじに堵列して御葬列を奉送したようです。その印象をうたつたのが長詩「九月十三日」です。

△細き月あらはれ松かげうすれて暮れゆく空にみともしかゞやき、みちのべの篝火たきびよるをしめす。
しづしづと歩み来るはさきのみかどにつかへまつりしつはものの列。▽

にはじまり、

△遠きむかしのことそぎてちからあるみ魂よ今よみがへれ、

あゝわが心かなしなみだのごはむああ▽

に終る、三十行の長詩は、同じ悲しみと自覚とをうたつた川出麻須美の「暗夜」とともに、当時の国民的な悲しみと決意とを永遠に記念する詩作であります。(詩集「祖国礼拝」所載)

④ 大正時代の言論活動と長詩への開展

かくして先生は明治天皇崩御によって触発せられた国民的自覚にもとづいて、大正時代の言論活動に従事されました。先生は、芸術的創作と時事評論とが精神科学そのものであると信じておられ

たので、作歌と選歌と評論の執筆に全生命を賭けられたのです。一例として、大正二年一月（三十歳）の執筆状況をみると、

△「鎌倉時代の道徳宗教芸術の表現」を「人生と表現」五ノ一。「精神科学の将来」を「日本及日本人」一月一日号。「民族的生活の縦横断面」を同一月十五日号。「源氏物語」を「帝国文学」一月号。「現代日本の内的生命」を「新仏教」一月一日号。▽（「三井甲之存稿」附録「著作を主としたる——三井甲之略年譜」松田福松編より）

細かいことになりませんが、右の「鎌倉時代の道徳宗教芸術の表現」は、「愚管抄」と「教行信証」と「金槐集」とを統一的に論じた日本思想史研究上の画期的論文で松本彦次郎「日本文化史論」（昭和十九年）に再録されたほどのものです。A5判九ボ組みで、約五〇頁の長篇です。他はそれほどの長篇ではありませんが、それにしても、長篇を含めて五篇の評論研究論文を発表し、「日本及日本人」（月二回発行）の歌欄の歌を選び、なお「人生と表現」の編輯を行なったのですから、全く超人的努力というほかありません。前述「略年譜」は、二年三年四年と同じ程度の論文執筆量を記しています。文字通り決死の思想言論戦の展開であります。この頃の論文は一部「明治天皇御集研究」「親鸞研究」「和歌維新」等の著書におさめられ、最近「三井甲之存稿」に収録されて刊行されましたが、なお大部分未刊行であります。「自選年譜」大正四年、三十三歳の五月の項に、

△研究、私立中学教師、雑誌経営（「アカネ」「人生と表現」）「日本及日本人」其の他への寄稿等の

文壇活動の為過勞に陥り郷里に帰る。▽

とある記事が、東大卒業以来八年間の活動を要約しています。

爾來、昭和二十八年七十一歳で歿するまで、遠山に囲まれた山梨・甲府盆地の一隅の敷島村をはなれず、約四十年間の文筆生活に入られたのです。帰郷後は、村会議員と、昭和十四年（五十七歳）から四年間の村長就任が、唯一の職業であつて、他は、すべて文筆活動に注ぎこまれたのです。しかも、その文筆活動は、ほとんど原稿料収入のない文筆活動であつたと思われまゝ。また先生は「原理日本社」の活動等に対しても、経済的援助をしておられたらしいのです。原稿料印税収入等があればむしろそちらに投入してはなからうかと思ひます。いわゆる作家と同じ程度の文筆活動を行いながら、文筆活動に生活の経済的基礎を求めなかつたように想像されます。そこに先生の言論の自由の地盤があり、また一面、高踏性があつたということができましよう。

甲之の思想の形成に重大な影響を与えたのが、前述のとおり、子規と親鸞とヴントとゲーテであつたといふことは、もちろん、その後の思想の開展をみちびくこととなりました。子規の和歌と信鸞の信仰とヴントの学術とゲーテの人格という、——この、いわばばらばらな思想と事業との統一といふところに、先生は、時代の自己に課した使命を感じられたのでしよう。東西洋文明の綜合統一が日本の文化史的使命であると信じて、その使命の遂行に全力を尽されたのです。その点、先生の生涯の論敵となつた斎藤茂吉の短歌一本の行き方とははつきりちがっていました。専門歌人とし

て終始するには、先生の国家生活に対する現実的思想的関心は強すぎたといふべきでしょう。また先生は、ゲーテがそうであったように思想詩人を目ざしていたといつてもよいでしょう。抒情的の短歌から思想的長詩へ向つたところに、先生の真骨頂をみる事ができます。先生の処女出版は、明治四十年二十五歳の詩集「消なば消ぬかに」であったことも、その生涯からかえりみてみると、自然のことであつたといえるでしょう。昭和二年四十五歳の詩集「祖国礼拝」がこれにつき、昭和十六年五十九歳の「日本の歡喜」が詩業完成のしりとなつたのです。あれだけ多くの歌を発表し、龍大な分量の歌論を書いた先生は、昭和六年、改造社の現代短歌全集中の第十九卷の中に自選歌集「三井甲之集」を作つただけで、終生積極的に歌集の出版をはかられなかつたことを考えあわせますと、先生の詩業の中心がどこにあつたかがわかるような気がするので、先生の短歌の中核もまた思想詩でした。

⑤ 短歌二首

先生の短歌の中で最も人口に膾炙かいしやしているのは

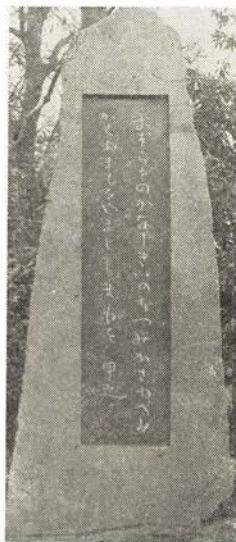
ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を

の一首でしょう。「ますらを」は、

「丈夫」とか「益荒男」とかいいう字を宛てます。万葉歌人たちが自らを呼んだ言葉で、国事に身を挺する大乗菩薩行の「大士」を言いました。

「かなしきいのち」は「悲劇的生命」とも「悲劇的生涯」ともとれま

す。建国以来無数の「ますらを」たちがそのいのちをつみ重ね、つみ重ねて、このなつかしい大和島根の国を守る、という意味です。この歌は、幾多の悲劇をのりこえてこの大和の国を守りつづけてきたいのちのちからが、各語の音調にも、一すじの、切れ目のないしらべにこもっていて、永遠にわれらを鼓舞する絶唱です。この歌は、多くの人に伝えられて、いまでは作者が誰であったかさえ忘れられているほどですが、先生の昭和二年の作「蕨機関長故福田氏をしぬびまつる」九首の連作の末尾の一首として発表されたのです。「蕨」は駆逐艦で、演習中に沈没しました。「機関長故福田氏」は福田少佐のことで、「米英研究」の著者松田福松先生の御親戚とのことです。思想的抒情詩ですが、すこしも概念的に感じられないのは同志の親戚の演習中の死という切実な具体性に支えられているからでもあります。頭の中で考えて詠める歌ではありません。昭和三十三年先生ゆ



歌碑（山県神社境内）

かりの竜王町山県神社境内に立派な歌碑が建てられました。

また次の一首も名歌として愛誦されています。

心しる友とかたれば心なごみながるる涙とどめかねつも

先生は、前述のとおり「アカネ」創刊以来その同人と同信の深交があり、「日本及日本人」の歌欄の選者としては、歌によって多くの人々と心を通わせておられたので、その作歌の中には、友人にあてた歌が数多く残されています。「三井甲之歌集」は、前述のごとく巻頭が「正岡先生三年忌歌会」で明治篇の終りが、「岡田質兄に」四首となっています。

さねさしさがむのくにの鶴沼の海べ忘れじ君のうたゆゑ

その日から約三十年経って、昭和十三年の「上領一郎兄の霊にさよぐるのりと」の中に、

△この世には相見ざりしが

しきしまの道につながりて

わすられぬ歌人岡田質うたびと おかだ しつの

病やしなひたりし

さびしき海べをながめてひるげをとり、

見えがくれする海をながめて一人歩きぬ。▽

とあるのを読むと、先生の友情が道の友であり同信の友であり永遠の友情であることがわかります。これは一例で、先生の詩集「日本の歓喜」（昭和十六年）は、その半分がなくなった友への「のり」となっています。

また「三井甲之歌集」の「大正篇」は、「雲か萍か」の作者「田代順一兄に」二十首ではじまるといった具合です。

大正時代の代表的長詩「祖国礼拝」も「祖国主義」もともに「友よ、はらからよ」の一句をもつてはじまります。「祖国礼拝」の「五」には、

△やまとのことばに

やまとのいのちを

ともにうたひて

こゝにあつまる

友よ、はらからよ、

ともに喜び、悲み、泣き、憤り、

行かなむ、友よ、もろともに、

世界に於ける今の日本は

名もなき民のわれらの上に

押しかゝれりと感ずるときに

くしき力ぞわれらにあらむ。▽

と歌っています。また、ますらをの悲劇的生命をしのばしめる長詩「恩愛」は、

△友よ！

とよべば

友は来りぬ。▽

とくり返すのです。国民生活をもって同信同朋生活と感ずることが先生の理想であり現実的地盤でもありました。

少し説明が長くなりましたが、「心しる」の歌にもどりましょう。この歌をふくむ連作は次のとおりであります。大正五年八月の「日本及日本人」所載の歌と推定されます。

友に

からだいたみつかれて思もまとまらずもだしてあらむいましばらくは

人のちからつひにはかなしと思ひしりてくるしきこの世にみちをみいでむ

かたかたにすてしちからをかたかたにむかはしめなむみくのために
われをすてゝ堪へむと思ふこゝろよりみくにゝつくすちからわきいづ
心する友とかたればこゝろなごみながるゝ涙とどめかねつも

たゝかひてつかれ傷つき息絶ゆるいまはのくるしみしぬびつゝ生く
はらからのみくのために命すてしことをしぬびてつとめ来にけり

きのふまで膝をちかづけかたりにし人はいまなし心にとどまれど

わかるゝにふして思へるこゝろはもとはのかたみとわがむねに生く

思へども思へどもつひにわれをすつるほかにみちなし生けるあひだは

⑥ 日本主義宣説とマルクシズム批判

前述のように、明治天皇崩御、歐洲大戰の勃発、ソヴェエト・ロシアの建国、デモクラシー・マルクシズムの流入——という大正時代の国内国際生活の動乱によって、日本国民は非常な思想的動揺を経験しました。先生は、この思想的の嵐の中で、国民生活の思想的原理は何かと問いかけ、日本主義＝祖國主義＝国民主義を宣説しました。そして、外来思想を鵜呑みにして日本の現実を忘れた流行思想家の国際主義個人主義デモクラシー・マルクシズム等を痛烈に批判しました。その一部は

「三井甲之存稿——大正期諸雑誌よりの集録」に収載されています。その「出版頒布趣意書」(昭和四十年)に書かれた言葉が当時の先生の活動を伝えております。

△(先生は)歌壇においては斎藤茂吉と、文壇においては漱石門下と、白樺派と、論壇においては吉野作造、河上肇と、——といふ具合に、当時の時代思潮に抗してはげしく論戦をいどまれたのであります。すなはち、……日本人が日本の歴史と現実とに立脚して思惟すべきことを、「名も無き民の確信」に立つ「野に叫ぶ声」として、身をかへりみぬ求道者の一心に、強くはげしく説きつづけられたのであります。大正十二年に歌はれた次の短歌を読むと、当時の氏(三井先生)の言論が今日を予言したものであることが、五十年の年月をこえて私どもの心に強くひびいてまいります。

党派支配と大学教育とみ国をみだすわざはひのもとなり

おほくの名もなき民らぞひのものとまことのいのちをささふるものは

名もなき民のいのちのひらけすすまむをさふるしれもの打ちてしやまむ

ああこの無用の学問ぞうちやぶるべきわれらのめあてぞ

ここに批判の対象としてうたはれた政党政治の党弊と大学における学問の誤謬が、それから半世紀にもわたる日本の思想界の癌となって、今日そのキャタストロフに突入して居るのではないでせうか。▽

宮崎五郎作「三井甲之、主要著作年表」(『新公論・三井甲之追悼号』)をみると、マルクシズム批判を論題にかかげた最初の論文は、大正八年五月「日本及日本人」掲載の「マルクスの遡源的研究と日本宗教の矯正」という論文です。爾来、マルクシズムの批判は先生の論説の中心テーマの一つとなりました。先生は若い時からドイツ語に堪能でしたので、ゲーテ・ヴント等の著作はドイツ語で読破しておられたことは勿論ですが、ドイツ新聞をも継続して購読しておられたので、それによって歐洲大戦後のドイツのマルクシズムによる惨状を調べておられました。またロシア革命の惨状についても、尼港事件によってあらわされたボルシェヴィキの残虐さにも、その根底に憎悪にもとづくマルクシズムの破壊の心理と論理とがあることを洞察されたのです。一方、人生の事実にもとづく学としての精神科学を大成したヴントのマルクシズム批判を参考にされたようです。そして、論理的分析と事実の検討とからマルクシズムを批判しつづけられたのです。また、先生のこのマルクシズムとの戦いは言論の上の批判のみにとどまりませんでした。先生は当時小作争議の渦中において、遂に「郷土を追放」されるに至りましたが、先生は、くりかえし誇りをもって、実生活者として共産主義と戦ったと述べておられます。

戦後の左翼思想家が先生を右翼の巨頭のごとくに書いて文学史や思想史から抹殺しようとしたのは、共産主義の批判においてはたした先生の先覚的業績を葬り去ろうとするからに外ならないのです。しかし、先生のマルクシズムに対する学術的批判こそ心ある人々に祖国防護の学問に対する確

信と勇氣とを与えたのです。

しかし、この先生のマルクスイズム批判は、その銚先を母校の東京帝大法学部に向けねばならなくなつた時、その悲劇性を濃くしました。先生は、近代日本の思想的混乱の原因を、明治以降の大学教育の欠陥に見出しました。法学（政治学経済学）等の社会科学が、自然科学と同じく西洋の科学の移入のみを目的として、日本の歴史と現実とを忘れるとき、恐るべき混乱が起ることを指摘されたのです。これは、明治天皇の「聖諭記」（明治十九年、元田永孚記）にあらわれたお考えに通うものであります。先生は「しきしまのみち原論」（昭和九年）に「聖諭記」全文を引用しました。軍部に刃向つたものは英雄とされ、資本家財閥に刃向うものも英雄となりましたが、東西の帝大に刃向つたもので狂人とされないものはありません。三井甲之の論壇からの追放、文壇における孤立の原因はここにあつたのだと私は思います。先生のマルクスイズム批判は、今日再評価されるべきだと思います。

先生は大正十三年「人生と表現社宣言」を書いてその中に、明治天皇御製拝誦を国民宗教行事たらしむべし、と宣説しました。これが先生生涯の結着点でした。当時はまだ年輩の人の間に、短歌に対する愛着と明治天皇に対する心からの崇拜が残っていましたから、この宣説は、今日ほどは奇異にひびかなかつたでしょう。しかし、昭和に入ると、知識階級の中核はマルクス一辺倒となつて、先生は完全に反動家と見られるに至りました。昭和三年先生は、その主著の「明治天皇御集研究」

をまとめて東京堂から出版しました。

思想的言語をリズムカルに展開する詩的表現は、くりかえし読むことによって理解と勇氣とを与えられますが、多くの人にとっては難解であり、ある人にとっては非現実的でした。先生の散文の文体は、哲学的思索の詩的表現で、直接具体的な迫力を欠きますが、それは思想を憎んで人を憎まずをモットーとした先生の求道心が、そういう思想的概括論の形をとらしめたものであると思います。具体的に言いたいことは言いつくせなかつたにちがいないのです。また具体的の問題は短歌によって芸術的に表現されたのです。東西両帝大がマルクイズムの温床であると指摘したことはあまりにも概括的な言い方でしたが、その通りであったことは、戦後のいわゆる全学連の学生運動によって暴露されたではありませんか。先生の批判は根本において正しく、今日を予言したのです。

大正の中頃から昭和へかけてのこの頃、かつての「アカネ」同人たちは自然に離れ離れになってそれぞれ独自の道を進みましたが、先生の周囲にはさらに新しい同志の人々が集まりました。その人々のお名前と主著とを左にかかげます。

田代順一（「雲か萍か」、河村幹雄（「名も無き民の心」等）、井上孚磨（「雲のゆきかひ」「靈法研究」等）、
養田陶喜（「学術維新原理日本」等）、松田福松（「米英研究」等）、木村卯之（「山鹿素行研究」等）、田代
二見（「いまの世に生きる道」）、井上右近（「聖徳太子三経義疏の研究」等）、大津康（「フイヒテ・独逸国民
に告ぐ」訳等）、橋川正（「蓮如上人の和歌」等）、黒上正一郎（「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」そ

の他の方々。

⑦ 敗戦——墓碑銘

やがて昭和も十年前後になり、陸軍を中心とする軍部の政治力は、遂に米英戦争の準備段階に入り、つづく国家総動員法の発令、政党政治の否定、軍人官僚の独裁的傾向の増大という時代に入りました。日本は国共合体による国際コミンテルンの政略に陥って、米国の挑発に乗り、対米戦争への道を驀進してしまつたのです。勿論、大東亜戦争は祖国防衛の戦争であつたのですが、戦争の指導精神に新体制、革新派的迷いがあつたことを否定することはできません。

かくして明治憲法による明治以来の体制は崩れはじめました。同時に、憲法に表現された明治時代の思想・精神も、軍人を中心とする独裁的支配意志によって圧迫されるようになったのです。「戦陣訓」が「軍人勅諭」に代るような勢を示したことなどがその一例です。「憲法恪遵」を終生



三井甲之先生肖像(2)
(晩年)

の念願とした国民精神研究所所員井上孚磨先生は、その思想の故を以て退職させられ、「自由主義経済学者」山本勝市博士は罷免されました。三井先生に師事した田所広泰氏を中心とする精神科学研究所は、反戦反軍自由主義の故を以て弾圧され、小田村寅二郎氏はじめ所員の大半は約半歳の間東京憲兵隊に拘留されるに至つたのです。

「原理日本」も廃刊となり、先生の長い執筆活動も終わったのです。（附録四田所広泰先輩・「国土の悲歌」参照）つづくものは敗戦でした。

先生の御長男（大尉）は昭和十九年マーシャル群島にて戦死。二男時人氏は昭和二十一年白衣の帰還（二十三年戦病死）。二十年蓑田胸喜先生縊死、斎藤隆而氏死去。二十一年、「てのひら療治」の江口俊博先生、先生の思想の実現に身をささげた田所広泰氏逝去。九月、先生は墓碑銘「石にしるすことば」を作りました。

コノ石ハ

天地ノアヒダニアリテ

天地ニツラナリテ

ココニアリ。

コノ石ニコトバラシルス。

人ハ死スレドモ

コトバハ生キテ

イノチヲツナグ。

コノツナガリハ

地上ノサカヒヲコエテ

へダテナキ宇宙ニヒロゴル

コトバコソ

カギリナキ生命ノシルシナレ。

イマソノコトバラシルス。

ワガイノチノシルシナリ

ココニシルスヤマトコトバハ。

⑧ 「今上御歌解説」

「今上御歌解説」という冊子は、昭和二十七年三月、三井先生が病床において執筆され、自費をもって騰写印刷の上、頒布されたものです。半紙B6判型わずか十八頁の騰写印刷の小冊子でした。先生は当時、戦後の文筆家追放によって言論活動の自由を失っておられたうえ、御病中でもあり、世間一般も経済的な復興未だしき折柄であり、私どもにも力がとほしく、活字印刷にすることができなかつたのです。これについて、「三井甲之歌集」(昭和三十三年二月十一日発行)の「三井甲之年譜」に、次のとおりに書かれています。

△昭和二十七年 七十歳

三月「今上御歌解説」(夜久正雄騰写)出版。「今上御製集」と併せて知友の間に贈呈頒布す。これ

病間一切の不自由に耐へ幾度か稿を改めて成れるものにて、しきしまのみち最後の御奉公なり。

自ら『永訣の書』となす。▽

昭和二十六年五月十日消印の先生のお葉書に次のようにあります。

△……「今上御製」を「天皇御歌」と題して三二頁で五〇〇部印刷しようとして目下構想に時間をすごし又執筆に「仕事」を見出しております。天皇御歌はまことに未曾有の作であることを実感しつつこれをねがはくは有志同信にわかちたいと念じ、「講和」と「解除」を目あてとして、それがうまくゆかなくとも「純學術的」に自費出版し、そのために葬式に村人に酒をふるまふことをやめて之をくばることにすると申せば妻子はそれは後にのこるものに任せよと申すやうの次第です。年をこせば七〇歳になるので遺言をしたためましたのです。仏教戒名は二、三年前にきめました、一寸申上ます。▽

先生は、昭和二十二年四月十日脳溢血に倒れ、二十三年文筆家追放にかかられたが、左手左脚の自由を失われた病臥の床で、隻手執筆をつづけられ、同信友人門弟との文通に、學術的宗教的論文の執筆に、不撓不屈の文筆活動をつづけておられたのです。しかし、先生の言論の発表の世界は極めて限られた世界になっていて、小冊子の出版も意に任せられぬ状態であったことが、このお手紙でわかります。

つづいて、六月二十一日付のお手紙には、次のとおりにあります。

「天皇御歌」はすでにかきをへましたが、三度かきなほし今度三度目の完成をゆっくりこころみつゝあります。

「枯れたてるコスモスのみにむらがりこがはらひわは冬立つあした」

このミウタ、小鳥の体位を示すやうのことばではありませんか。

「秋ふけてさびしき庭に美しくいろとりどりのあきざくらさく」

と二首つぎ／＼によんでをります。

つづく七月二十二日付のお手紙は、△拜啓、昨日の新聞で追放非解除とわかりましたについて一寸申上ます▽にはじまる長文のお手紙で、世界の大勢からシキシマノミチの前途を論じられたもので、その中に、

「天皇御歌研究」も脱稿しましたがナホ再考しつゝこれを十六頁位の「生前訣別辞」として諸兄に呈したいと思ひます。当路の大官にも呈するやうになるかもしれませんがミノダ兄霊前にさげたいと思ひます。▽

とある。そうして、この文章の書かれた原稿用紙の欄外に、たどたどしい字体で、

「△コノテガミカキテ出スイトマナク病勢重クナリソノマ、一ヶ月八月三十一日アサコレヲソノマ
マ出シマス

神ノマモリヲアリガタクイタダキツ、シルス▽

と書かれてあります。御病勢は九月には回復され、十月には前に変らぬおたよりをいただくことができましたが十二月二十二日付で△一二、四カラ、マタワルクナリ、シツレイシテマリマス、シカシイマフタタビヨクナリツ、ケフハシヲモツテゴハンヲタバウルヤウナリマシタ、トシガアケレバ執筆デキマセウ△という先生としては異例の鉛筆書きのおたよりをいただき、二七年一月一日付で葉書一面

△だん／＼よくなりつゝあり 大丈夫です 執筆困ナンノ外ハ△
というおたよりでした。

たしか、その三月の末日ごろだったと思います、田代二見画伯の版画装幀で、同じく騰写印刷の「今上天皇御製集」と併せて、印刷が出来上ったのです。

その後、もう一度先生は回復なさり、執筆文通をさかんにされはじめましたが、六月ごろからは執筆を止めました。お手紙も夫人の代筆になさって、再起の御努力をつづけられたが、遂に翌二十八年四月三日永眠せられたのである。「今上御歌解説」は文字通り、三井先生七十一歳の御生涯の「永訣の書」、老大な量にのぼる文筆活動の最後の遺書となったのであります。なお戦後の遺稿としてまとまったものに宮崎五郎氏発表の「平和の大海へ注ぐ一滴の水」(敷島道及手末道奥伝書)があります。二十五年六月脱稿で「御歌解説」とあわせ読まざるべきものであります。

私は病後で御葬儀にも参列できませんでしたが、弔問の手紙に対する未亡人の御返事の中に△一

生を祖国の為に、そのみ念じて終りましたとあったお言葉が心にしみて忘れられません。

遺骨は菩提寺甲府市外青松院に葬られました。戒名は前に引用したお手紙にあるように自撰で、「承命院無端甲之居士」といわれます。「承命」は聖徳太子十七条憲法の「承詔必謹」の「承詔」の「詔」の字を避けて「命」に代えられたのでしよう。「大君ノミコトカシコミ」「大君ノマケノマニマニ」という万葉集の歌詞を先生は何十回となく引用されましたが、そのコトバとともに眠っておられるのでしよう。「無端」はいうまでもなく同じく十七条憲法の「相ともに賢愚なること鏝の端無きが如し」に採られたのです。「共に是凡夫」という太子の信に対する讃仰の心をもって戒名とされたわけです。昭和二十八年十月「新公論」は三井甲之追悼号として先生の霊前に捧げられました。その後、三十二年宮崎五郎編「三井甲之書翰集・無限生成」、三十三年、三井甲之歌碑建設歌集刊行会による「三井甲之歌集」の刊行ならびに歌碑建設(山県神社境内)、小県一也復刻「行く春」、四十年桑原暁一編「三井甲之歌論拾遺」、宮崎五郎編「三井甲之選集」、四十二年斑鳩会「今上天皇御歌解説・付万葉集論」(復刻)、四十四年松田福松他三井甲之遺稿刊行会「三井甲之存稿」および「平和の大海に注ぐ一滴の水」等、御遺稿刊行による追悼のいとなみがつつげられております。

なお本文中に閑説できなかった著書に、「てのひら療治」(昭和五年)、「てのひら療治入門」(同年)、「樗牛全集から」(大正四年)、「和歌維新」(昭和十七年)、「しきしまのみち原論」(昭和九年)、「三条実美伝」(昭和十九年)、「親鸞研究」(昭和十八年)等があり、また訳業として「ヴント氏民族心理学

研究」(大正二、三年論文、昭和四年刊)、「ゲエテ・ファウスト」(明治四十三年—四十五年)があります。

(夜久正雄)

(二) 川出麻須美先生・三代の歌人逝く



川出麻須美先生肖像

川出先生がなくなられた。「一巻の歌集を残せばよい」と言われた先生の言葉のとおり、明治・大正・昭和三代にわたる大歌人、近代の人暦とも言うべき大天才は、昭和四十二年五月二十五日、ひっそりと、しかし、ささやかな歌集一巻を残して世を去られたのであります。

先生の歌集「天地四方」(昭和二十八年十月「昭和篇」、昭和三十二年一月「明治篇」)の「序」に先生はこう書いておられる。

「一巻の歌集を残せばそれでよいと私は昔から考えて居た。それ以外には途がないと思ったからである。しかし歌でもまだ足りない、もどかしさがあるけれど、それはどうにもならない。」

先生のいのちは、「歌でもまだ足りないもどかしさ」はそれとして、その歌にこもっている、と、私は信じます。八十三歳の生涯は歌にかけられたと言ってよいであります。

かつて先生はこんなことを語られたことがあります。たしか、故雑賀博愛氏(福本日南に師事し、

次で赤木格堂に親多し、「大西郷伝」「鹿野歌稿」を遺す。」とのことだったとおぼえている。雑賀氏から「慕親帖」を送られて、深く感動して歌を作ったが、その歌を送らなかつた。あとで何かの折に雑賀氏の遺族がその歌を見て、非常に喜んでくれたので、やはりそういう歌は送っておくべきだつたと思つた。しかし、わたしは、歌を作ればそれで相手に通うものだと思つて信じている。だから送らなくてもよい、歌を詠むことで私の表現は完結する、というようなお話でした。この話をうかがって、歌を詠むということが先生にとって行為そのものであることを憶つたのでした。

先生が好まれたホイットマンは、彼の「一卷の歌集」ともいうべき詩集「草の葉」について自から、「これは単なる本ではない。これを手にとる者はひとりの男にふれるのだ。」(This is not a book. Who touches this touches a man.)という名句を残したが、先生の歌集も、単なる本ではない。先生の歌は、先生のいのちそのものと言えるでしょう。

それでまたこんなこともありしました。昭和十二年、私をはじめて川出先生から歌をいただいた時のことです。先生が年賀状に、誰だったかよく覚えてないが既に亡くなつておられた私の先輩のどなたかに年賀状をくださったので、そのことをお知らせした時のこと、先生のこういう歌があります。

今はなき人とも知らず年賀せしは誰にかましけむなつかしきかな

世にあるもなきも同じぞたまきはる命はかよふ万代までに

爾来この歌は私の心の中で鳴りつづけています。

先生は、歌を詠む行為によって人と語り故人とまじりまた子孫に訴えられたのです。「国民同胞和歌集明治篇」（昭和四年発行）という本は、「日本及日本人」の三井甲之先生選歌の歌を集めた歌集ですが、われわれはこの歌集ではじめて川出先生の歌を読んだ。その裏表紙に先生の次の歌があります。

神風の伊勢の大宮あらむかぎり我歌生きむやしまのたみに

とつづくに華はなに呻うめかむうまごらによきかてのこせあがせますらを吾兄

先生はその歌が先生の生をこえてひびきつたえられることを信じておられた。自らの力を信じておられたというよりも、歌そのものを信じておられたからであります。それはまた日本人の永遠の生命に対する信仰でもありました。

五月二十五日東京信濃町千日谷会堂において神式により返通夜がしめやかに挙行せられました。私も参列させていただいて祭壇場の遺影と御遺骸にお別れを告げました。玉串奉奠を終って式場を

出ると、そこに二首の歌が掲げられてありました。

墓碑銘

極ればまたよみがへる道ありていのち果てなし何かなげかむ

辞世

「明アイヤ・リヒトるく」とゲーテは言ひきチャーチルは「もアイ・アム・ポアード・ウイグ・イット・ナールう 沢 山」と「ねむたし」かわれは

参列した人々は特許庁長官（当時）の御長男の御知り合いが多いらしく、政治家とか実業界とかの方々に、普段歌に親しんでおられるようには見受けられなかったが、「いゝ歌だなあ」という囁きが、そここに聞えた。集る人々はみなこの墓碑銘の歌に救いを感じ、辞世の歌にユーモアと達観とを感じて、心のひらけるのを覚えたことでしょう。私もその一人です。ちょうど——というのはヘンな言い方ですが、その時私は仕事の上の悩みごとがあつて、心がうわずっておちつかなくかつた。しかし、このおうたをよんで、豁然と心のひらける感がしました。自分の心のもちように道がひらけたのです。歌が現実的なちからをもっていることを、私は、川出先生のおうたを読んで実感する。青年時代に、陰湿な俳句など作つて暗く心が閉ざされてどうにもならなくなつた時、私は川出先生に救いを求めた。その時いただいたのが、次の歌です。

白雲にのりてや来つる思はぬに君がみたより机の上にある

ましみづの流るゝ如きみ歌よめば涸れにし心ながるゝごとし

若き人らあひつぎつぎてしきしまのまことの道はたゆる日なからむ

老いぬればかなしみ多し若ければなやみ多きぞ人の世にはある

物みなのならみ集まる現し身を投げ出し生く天のまにまに

次に前掲の「今はなき人とも知らず」「世にあるもなきも同じぞ」の二首があつて、次の一首で終る。

東京はただそこもとぞひむがしのかたぶく空のやまにつくあたり

この一連八首のおうたは、爾來三十年、私の心の中に生きつづけている。私は、その時、この歌で救われ、その後ずつとこの歌を忘れません。

先生の歌で私の忘れぬ歌は沢山あるが、その中の数首をあげます。

かなとでに妹がわたせしふみよめばやさしことのは見るに堪へずも

火を噴きし昔ゆめむか開聞のみ岳もだせりゆふべの空に

佐多の門に船ちかづけはおほなだの俄にかたぶき疾吹くあま風

海角にかがやくともしあな悲しゆらぎだにせず荒海にむかひて（明治時代「航海」連作二十七首のうち）

ち)

朝日さす庭のしげみにかがやきて星よりも濃き露ひとつあり（昭和十七年十八年「朝」三首の中）

青年は愉快なるかな風の日は平生よりも出席多し（同右「颯風」七首の中）

おのづから通れる道はいかづちのくづれ撃つともそのままならむ（昭和十一年「夏雑詠」七首の中）

あめりかとりしやの力とりすべて立ちあがる日本の神を信ぜむ（大正末年又は昭和初頭の作）

高空はつね晴れたりき大地は雲はびこりてやまず動けど（昭和十一年「友に、田所広泰宛」五首の中）

大倭あぐる歓呼をよものくにきゝつゝいまして念ふらむ（昭和八年、皇太子殿下御降誕をことほぎ

まつりて三首の中）

こうした歌は、いままた強く私の心の中で鳴りひびく。その歌のしらべは強く明るく雄大で私の心の内部から私をみちびく。改めてそのことに気づいた。私はこの感謝の心を先生の御霊前にさげたいと思います。

戦後、私は、南波惣一氏とはじめて川出先生を小坂井のお宅にお訪ねしました。先生は奥さまと御一緒に私共二人を本当にあたたかく迎えて下さって、沢山のことを話して下さいました。「宇宙をサガミに嘯むものは詩人である。詩人の目には宇宙は言語の急流である。」と若き日に記した（「古代

日本語」より)この詩人の口からあふれいずる言葉の大きな流れに私は圧倒され渾融させられてしまった。それは言葉というよりも生命そのものと言うべきものでした。私は、「言語の急流」にもまれて心身ともに変化するのをおぼえました。この時の先生のお話ほど感動を受けた話はない。いまでも思い出すが、先生が話の中で、「驚いた。」と言われると私は飛び上って驚いた。明治天皇の御大葬と昭憲皇太后の御葬儀の折の御霊柩車のわだちの音を再現されるのを聞いて心が戦慄しました。最後の参内に参上する馬上の乃木大将と目礼をかわされたというお話もその時うかがった。またその時私は不健康で、先生に手をあてていただきたいと思っていたが、何となく遠慮されて口に出すことができなかった。しかし、先生のお話は、私の心身をゆり動かして、身体にたまった毒が排泄されてしまったように感じた。あとで、先生は、「言葉で治療した」と語られたそうである。勿論私の希望を見抜いておられたのです。私もそう信じていた。千里眼の霊能を持っておられるという噂があり、触手療法の達人で、遠隔療法をなさる先生に、目前の私の希望がわからないはずはないと思ったからです。またその時、腸閉塞を手のひら療治で直されたというお話があつて、後、私はその恩恵で、自分の息子の腸重腸を助けることができた。と、思っている。川出先生は歌の師であるが、同時にいのちの恩人という感じがある。先生の歌がそういうもの、と言ったらよいか、あるいは、本当のうた、とか、ことばとかは、そういうものだというべきでしょう。

三井先生が、概念の形を借り、思想的に述べて一般化せられた内容を、川出先生は、具体的に、

生の体験そのものを以て表現された。古事記、万葉集への傾倒・連作短歌創作・長詩への開展・明治天皇憶念・てのひら療治・短歌を中心とする思想という思想的開展を、お二人はそれぞれ独自に平
行して辿られたのです。三井先生は、それを一般化し形式化し概念的思想を以て表現された。川出
先生は、具体的体験の直接的表現には終始された。三井先生は、談話の中で、ものの音声を真似
なさるようなことは、私は聞いたことがない。川出先生は、鳥の声、ものの音、すべて再現しよう
とその音声を真似された。独自で、模倣や口まねを絶つぎさびしさがあるが、一般化されないから模
倣不能である。それを先生は歌にこめられたのでしょう。先生の歌は、独特で、言葉のつながりが
強く、全体として、雄大な胸廓と健康な体軀からあふれ出る呼吸そのものであります。ホイットマ
ンは先生の愛する詩人だったが、その調子はよく似ていると思います。

たしか昭和二十五年頃だったと思う。「ホイットマン詩選」をお送りした時、こういうお言葉をい
ただいた。

「……私は青年時代彼の詩を読み、海原の様にふくれ浪だってくる興奮を禁じ得なかったのです
が、今この訳詩を見て同様の感激を覚えるのです。広く、すこやかに、清く、あかるい彼のたま
しいは吾々の遠い祖先の魂と相通するものが多分にある。この魂を把握すれば日米相戦ったこと
や冷めたい戦争がいかに愚かであるかが分ると思ひます。東洋に古くからある陰陽の思想からす
れば、ソ聯は陰で米国は陽でせう。陰陽は相反撥するけれども亦相引くものでもあるでせう。吾

吾は正に冷熱に拘らず相反撥する戦争を駆逐する中心に立つべきでせう。飽くまで実践し、その実力を養ふところに日本再建の方向があるのではないか、それは天の如く海の如く新しき太陽の如く、あゝ生命のいぶきは朝霧の如く吾々の面を打って来る。」

先生のおたよりは、そのまゝ詩であった。

御子息様のお話によると、なくなられる数日前、先生は、大正時代の長詩「海の舞踏」の中に間違つた箇所があるから訂正するように、ということ、夜久に伝えるように、話されたそうです。仮通夜の夜、小田寅二郎氏からの伝言でこのことを承って、すぐしらべたが、私の手元に、この長詩はなかった。例によって、広瀬誠氏に問いあわせたところ、早速、こういう返事をいただいた。

—— 昭和二十四年川出先生にお目にかかったとき、先生は朗々とこの詩を誦読されました。当時のこと、限りなくなつかしく回想されます。その後、『人生と表現』の切抜で、この詩を送っていただき、書き写して、返送したのですが、印刷に『磯とは浪は』となっているのを、ペンで磯うつ浪はと二字訂正してありました。おそらく先生は、この誤植が気にかかつて居て、それで遺言されたのではないかと存じます。この詩は、先生が富山中学教師のとき、教壇で朗誦され、当時の生徒が強い印象をうけたということです。この民謡的な明るい歌を、いま手写しつつ、うたた感慨にたえません。

海の舞踏

してさっさ！

海のどなかでうづまく浪は、

中につめたくうはべはあつく、

底のまた底あひとしほあつい。

してさっさ！

あ、こりや！

とほる白帆は日月ひつぎの印しるし、

権威をみとめぬいたづら子僧、

とってまるめて尊王攘夷、

これ排世のうごかぬ原理。

してさっさ！

しらなみ立つは暗礁のしらせ、

島にひびくはとほなみこなみ、

裾をからげて磯うつ浪は――

おれらの力だ！

さっさい！ えっさい！

ぢどもとびこめ、ばよさもおいで、

わかい女子おなこはなおさらだ！

あ、来たぞ！

「いゝかこんやは？

磯いそ湯のかへり……」

「はいよござんす」

（みつけた男が）

「こりや何ぢゃ！」

「おりや知らぬ」

「いま云った」

「いや云はぬ」

して又せんとはいつはりものだ！

さっさっさ！

ひばりのふところ陣笠小笠、

うちふる手足にみなぎる力は

すべてを生かす神らのいきほひ。

どーどーと、

もーもーと、

そーそーと、

ろーろーと、

ほーほーと、

こーこーと、

吹きだすしほかせ、

ひたひをくろめて、

なやめるものは

いきかへれ！（「人生と表現」大正二年十一月号）

素朴で強靱な古代精神に通ずるこのしなやかさとたくましさとは、明治日本のヴァイタリティーの

言語表現そのものであります。

六月四日、先生の御郷里の小坂井で行なわれた御葬儀に参列させていただいた。しめやかな雨のふる中に、広瀬君と並んで、先生の葬儀に参列し、はるかに、祝詞の奏上に耳を傾けました。△：△：アカネ、人生と表現、原理日本に歌を発表し、△：△：思はざる人のまことにふれて歌集『天地四方』とはなりぬ△：△：という祝詞の言葉、戸外に立ち並んでいた私どものところまで流れてくるのを承って、私はありがたく、悲しいなかにも心の晴れるのを覚えました。

あとで、広瀬君に、「海の舞踏」を川出先生が、「誦誦された」というのは、文字通りかどうか確かめたところ、全部誦誦とのことであった。「ひばりのふところ陣笠小笠」とはどういう意味か訊いたら、それは不明ということであった。元来この詩を、先生が広瀬君に暗誦して聞かせられたのは、万葉集中の意味不明の歌について話をされ、御自分の詩の中にも意味のわからないところがあるとしてこの箇所を暗誦されたということです。先生は御自分の詩も歌も暗記しておられた。詩作が行為であったからでしょう。昭和二十四年に訪ねた広瀬君に大正元年の長詩を誦誦せられたのです。

川出先生のものは前述のごとく、「アカネ」「人生と表現」「日本及日本人」「原理日本」「七高校友会誌」「興風」等に発表された。うち、明治のものは、「天地四方」明治篇にはぼまとめられ、昭

和のものは、その「昭和篇」に昭和二十七年発行までのものがまとめられています。その後のお歌も多く、その他、洩れたものも多いと思う。大正時代のもものは、小説、詩、歌、評論と多彩で分量も多いが、未集録です。

なくなる年の四十二年賀状に「年頭一首」と題して次の歌を残された。

老いの坂のぼるがまゝにひらけくる視野茫々と天につらなる

先生の詩歌の研究は、広瀬誠氏のものが唯一の貴重なものであるが、「興風」誌上に一部発表されたもののほか、ほとんど未公表であります。掲載の写真は昭和三十五年十月、小山吉之助氏の撮影で、先生の非常に喜ばれたものです。（昭和四十二年八月「国民同胞」所載）

追記。最近ホイットマン研究家の間に川出先生のホイットマン論が問題になり、亀井俊介氏の好著「近代史におけるホイットマンの運命」（学士院賞受賞・研究社）は、先生のホイットマン研究を高く評価しています。しかしそのほかには、歌壇文壇学会等で先生の詩歌研究に関説したものはごく稀です。ただうれしいことにいま、先生の教えを受けた七高卒業生を中心にして遺稿集の刊行が進んでいることです。隠れたるこの大天才歌人の全貌の現われる日が待たれます。

（夜久正雄）

(三) 黒上正一郎先生・友情の歌



黒上正一郎先生肖像

黒上正一郎先生の創立された旧制一高昭信会（旧制第一高等学校学内団体、昭和四年結成昭和十八年解消）にわたしどもが入会した時、既に先生は此の世におられませんでした。ぼくらは先生に会ったことはありませんでしたが、衣鉢をまもる先輩の熱情にみちびかれて、先生の遺著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」（昭和五年騰写印刷本、昭和十年活字本、昭和四十一年復刊）を熟読、再読、三読―何回読んだかわからぬくらい読んだものである。ですから、その中の先生のことばは、いまでも心の奥に刻みこまれていて、ぼくらの日々の心をみちびくがごとくです。

先生は昭和五年三十歳でなくなられたのですから、その年令を、二十数年も前にぼくらは通りこしてしまったことになります。しかし先生のことばは、いつでもぼくの行手に輝いています。先生は、ぼくらにとって永久にかわらぬ心の師です。

畏友小田村寅二郎君が、年既に五十をこえ、多難複雑な人生体験を背後に、むかしのぼくらと同輩の学生諸君を前にして、この黒上先生の遺著の講義をするのを聞いていると、永久に変わらない

世界をのぞきみるような不思議な感動にひたらしされるのです。人生の真実とはこういうところにあるのかも知れない。

先生の歌は、戦前に出版された「黒上正一郎先生遺歌集」（日本学生協会昭和十五年十月発行）におさめられています。もちろん歌壇とは没交渉ですから、その歌を知る人は少ない。その歌集は、主として、先生がなくなられてから、先生の師友弟子あての手紙の中の歌を集めたものであります。先生の師事した三井甲之先生が選んでその主宰する歌欄に載せた歌もありますが、それも三井先生宛の歌の手紙か、あるいは手紙の中の歌のようです。してみると、今日残っている黒上先生の歌は、ほとんどが手紙の中に書かれた歌ということになります。

歌集の原稿になった先生の手紙をいくつも見たことがあります。どれも同じように力強い筆致で、一字一字楷書で心を込めて書いてありました。人伝に聞く素朴篤信の人がらがよくしのばれます。いそいで書き流すというようなのはひとつもありませんでした。その書体の通り、歌も綿密に心をこめて詠まれたものです。師友をおもう熱情が自然に歌になって流れ出た、というふうの歌ばかりです。ですから内容もほとんど同じで、その点歌集としての変化にはとぼしいのですが、ともかく徹頭徹尾友情の歌です。恋愛をよんだ歌は古来無数にあります、父子母娘、家庭恩愛の歌も数多い。愛国の歌、忠君の歌、叙景の歌、哀悼の歌、——歌の内容は人生そのものですから、あらゆる歌がありますが、その歌のほとんどすべてが友情の歌であるということは黒上先生一人かも知

れぬことで、驚嘆すべきです。したがって歌集を読んで、どの歌を抜き出したらよいか随分考えましたが、決めることができませんでした。どれでも同じような気がします。ここには歌集の最初と最後の歌をあげておきます。

次にあげる歌は歌集巻頭の歌で、大正九年とありますから、先生二十歳、入信の歌とみるべきでしょう。てがみの宛先は、京都在住の井上右近氏であろうとおもいます。井上右近氏は、「青人草」の編集者で「聖徳太子三経義疏の研究」の著者、大正九年というその当時は真宗大谷大学教授として住寺深草瓦町の善福寺におられたのでしょう。いまから五十年の遠い昔のことです、送った人も送られた人もともにこの世にはおられません、歌は、その情意を今日のように伝えていきます。

てがみのはしに（大正九年六月二十七日）

あひまつりしその日よ空はうすぐもり大比叡がねはほのにけむりし
みことばにつながりを得て一信海にわれも入らむとおもふよろこび
こののぞみわれはもてりと思ふことわれ生くらくのこちするかも
あゝ一信海われもつながらむと求むるこゝろそのこゝろにこそわれは生くるか
ありともへどなきかとおもふ悲しみよおなじなげきをおもひたまふらむ

あひまつりし日

あひまつらむ時はちかづく汽車まどに雲かゝる比叡を仰ぎみるかも（原本「雲」は「雲」の誤植か）
汽車降りてみ家にいそぐこの大路けむりて朝の山はみゆるも

うつし世にかくあひまつるよろこびにいくたび君とかたりまつりし

大谷の御廟の橋を聖徳皇のみことかたりまつり君とまゐりし

一信海を求念しまつるこのころそこにみ言をきゝまつりしか

みことばをきゝまつりつゝわがゆきしその鳥辺野の小路うかび来

たちならぶ諸天の像にかまくらの国民的緊張をかたりたまひし

しめしたまふ鏡のみ影みまつりてつきぬいのちのながれをおもふ

とほざかる京の町々おくりみてまたあひまつらむときを思ひぬ（第三句「みおくりて」の誤植か）

はろくくとくだりたまひしみちにしておもはずもわがあひまつりけり（松本彦次郎氏にあひまつり

て）

いろさびし丹ぬりの古塔そのもとの草原に秋の虫なきしきる（葉師寺にて）

秋の風二上山にゐる雲のとほきひかりをながめつるかも

あひまつりしその日をおもひ河内なる岩屋の山を今日こゆるかも（河内より大和へ行きし日）

くれかゝるうら山あたり灯のつきぬをぐらきまどにみたよりするかも（今まどにて）

きまさむ日共にのぼらむとわがおもふこのうらやまのくれかゝるかも

この最後の歌の「うら山」というのは、徳島市の先生のお宅の裏手にあった、たしか「渭の山」とかだったとおもいます。あるいは勢見山か眉山か。いまはもうたずねるすべもない。先生の歌の中に出てくる徳島の自然は、ほとんどこのうら山が中心である。郷里にあっては先生はその書斎を出ることがまれだったのでしょう。終日読み書きつづけられたもののようにです。たしかその山の麓に先生のお墓があって、漢文で書いた碑が立っています。先生の母堂とおまいりしたのも、もう三十数年の昔である。

次にかかげる歌は先生歌集の最後の部分にある、一高昭信会の会員に対する返信である（昭信会員新井兼吉氏宛）。この歌をよまれた頃から病勢がつのって、もう歌をよみあげるだけの体力がなくなれたものようです。結核の末期で、すべての活動を抑制した安静病臥の中に、次第に生命の火が消えていったのです。しかし、そのおうたにあるように、マルキシズム闘争の説に代うるに聖徳太子和の精神の高揚をもってした求道心は、数多の青年の行手を照らすともし火となりました。

そこで「友情」は「同信の友情」となり、国民同胞協力の世界に没する感激として味われることとなりました。先生の歌ほど純粋な歌はまれです。ほとんど子供のような精一杯の歌いぶりですが、その素朴さは、篤信の単純さで、その調子には、純金ののべ板のような強さがあります。二十歳から三十歳まで、大正九年から昭和五年まで、聖徳太子の信仰をかかげて、日本文化の使命を説き、わき目もふらずに精進の生涯をおくられた心のリズムが、その歌の一首一首に流れています。

たよりに代へて（昭和五年二月六日）

み心のこもりしみことかず／＼をいかにうれしく今日はよみけむ

聖王の大御言葉のすりぶみをひらきをろがみ涙ながれぬ

聖王の大みをしへのおこるべき時にあひぬる身こそたふとき

ひとの世のひとしく帰すべき大きみに共に帰しつゝつとめあはなむ

いかにして今宵はますと記念祭のさま思ひつゝみ部屋を偲ぶ

思ひてもなつかしきかなもろともに会のはじめのわざなし日は

古へも今も希なるみ教を共に仰ぎ得しことのかしこさ

もろともに偲びあひ又たすけあひつとむることのありがたきかな

ひととせを思ひかへしてはらからを偲ぶところに胸せまるかな

（二月十日）

はらからとわかれし日よりかゝなべてはやひと月はすぎにけるかな

なつかしと偲ぶ心の胸にあふれつくせぬおもひをくみたまふらむ

友偲ぶ心も迫る夜々の月を仰ぎみる日の又めぐりきぬ

裏山にさゆる月夜の大ぞらの遠くはれしがさびしくあるかな

かゝる夜は都もとほきこゝちしてはらから切にしたはるゝかな

「はらから」。「友」というにはあまりに親密で、兄弟の意をもつこの語を使われたのであろう。信の友を、先生は文字通り「はらから」と感じておられたのである。

(二月十日)

はらからのみ文みうたをいたゞきてけふも力となくさめ得たり

もろともに大み教へを仰ぎますみ心偲ぶがありがたきかな

この信を共にしつとむる力よりみ国をになふわざは生れむ

闘争の説に代ふべき「和」のみちを今の世にこそあらはしつとめむ

くもりなき大御心のもとにして共にすまむねがひは果てなし

信を共に偲びあひ又たすけあふつどひはとはの力なりけり

なつかしきつどひのときのみたよりに泣かしめられぬ力を得つゝ

(昭和三十七年八月「国民同胞」所載)

〔参考文献〕

* 「黒上正一郎先生遺歌集」Ⅱ日本学生協会「学生叢書第六輯」昭和十五年十月五日発行

* 「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」Ⅱ第一高等学校昭信会 昭和十年七月二十一日発行(復刊第二刷)Ⅱ
社団法人国民文化研究会昭和四十四年十月二十五日発行)

* 同(抜萃本)Ⅱ国民文化研究会 昭和三十三年八月十五日発行

* 一高昭信会機関誌 「伊都之男達」(イヅノオタケビ)Ⅱ「黒上正一郎先生遺著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』発行記念号」昭和十年七月発行
(夜久 正雄)

(四) 田所廣泰さん・国土の悲歌



田所廣泰氏肖像

「田所さん！」と僕ら後輩が、変らぬ畏敬の心をこめて呼びならわしている故田所広泰氏は、黒上正一郎先生創立の一高昭信会創立期会員の一人であります。昭和四年のその会の創立は、黒上先生と四人の一高生とでしたから、その四人の一人であった田所さんは、いわば会の創立者といってよいでしょう。同期の新井兼吉・河野稔両氏は昭和七年一月、二人つれだつて黒上先生のとを追うようにして病死しました。他の一人の会員は、漢文を専攻して東大教授となりましたが、早く会をはなれました。したがって田所さんは、黒上先生亡きあと、独力、会を育成して、のち日本学生協会・精神科学研究所の創立を主導し、当時の学生運動の指導者となりました。

次にあげる五首の連作短歌は「興風」という戦後の小雑誌で南波恕一氏の編集した「田所広泰歌集」の冒頭に載っている歌です。昭和六年、黒上先生死後の翌年に当る作で、三井甲之先生宛の書簡の末尾に記されたものとみられます。

冬ごもり春さりくれば日の本のゆくへのこともおもほゆるかも

春きなば楽しき日をとおもへどもかなしきおもひふかまざるかな

師の君のみまかりましゝ去年の秋の遠ざかり行くもかなしとおもへり

あはただしき悲嘆もすぎてしみとほるころとなりぬ月日経ぬれば

春來むといふことにはにさまさまのふかきおもひをこむるころかな

この歌には、黒上先生の歌にみられるあの純朴な、悲哀をたたえたしらべと用語とがつつたえられていて、田所さんの思想生活の出発点が黒上先生の思想信仰・生活感情のみちびきによるものであることをはっきりと示しています。当時田所さんは数え年で二十二歳でしょう。第一高等学校在学中、三年生の終りごろに当ります。いまでいえば、新制大学の二年の終りの年令です。亡き師の悲願はポートで鍛えた田所さんのたくましい双肩にもにない切れぬものがあつたらうと遠い往時の思いがしのばれます。

それから四年、昭和十年にはまた「黒上先生」と題する次の十首の歌があります。

師の君をいたも恋へども在りし日のいや年さかりゆく悲しさよ

み書くりかへし読みは来つれどしたはしきみ声きかずに五とせすぎし

なつかしく笑ませる君にいめのほか語りまつりしときはなかりき
朝な夕な机の上の師の君の写し絵をがみ来は来たれども

われら稚きころに堪へしこれの世の重き悲しみ消ゆるときあらじ

よるこびの去らば去りなむうつし世のつきぬ苦しみに貫き生きむ

みくにいまだならざるになくさまむことは求めず生きゆくあひだ

二日あはぬとたよりによびて語らししそのみたよりはいままよめども

徳島のみ家にかくりたまひにしことあまりにもまことにしあれば

いくちとせこのようつるとも君にあひしありし日こゝにまたかへらめや

少し口ごもるようなしらべの中に、亡き師をしのぶ悲哀とそれを克服しようとする強い意志とがこもっています。田所さんは多感な少年時代に父君（海軍中将田所廣海氏）を失ったのです。いつだったかその時の悲しみにふれて、父君の墓碑の文字を書いた時の気持を話してくれたことがありました。田所さんとは数年間ほとんど毎日のように顔をあわせていましたが、僕の性質もあるのか、こういう話をしたことはめったにないので、いまでもよく覚えています。そこで父君の志を継ぎ一時海軍兵学校を志願したが近眼のため志望を変え、東京府立一中から一高文科にすんだのです。海軍とは別の、いわゆる出世コースに入ったが、そこで信仰の師ともいべき黒上先生にめぐりあ

ったのです。

田所さんの生涯を貫いている宗教的心情は、おそらく父君を失った悲しみに発しているようです。その悲しみのなぐさめともなったと思われる黒上先生とのめぐりあい、その下での兄弟よりもっと親密な交流のある同信生活、その楽しい求道の日々も長くつづきませんでした。せいぜい二年間にもすぎなかったでしょう。黒上先生は病み、亡くなり、つづいて、師の面影とともに生涯を生きることを誓った親友の河野・新井の両氏も死んだ。田所さんの強烈な意志はこの悲哀の底から生れ悲哀によって鍛えられたのです。黒上先生も田所さんも新井さんもみな一人っ子で、ともに早く父親に死に別れたようです。昭信会の初期を彩る濃密な友情と信仰生活との合一はこの辺にもその原因の一つがあったかと思えます。

黒上先生の悲願を継承するということは、単なる会の維持や外面的な発展をはかることではありません。また単なる研究の継続でもありません。黒上先生がその著書の中でくりかえして言っておられるごとく、それは研究そのものも亦現実生活に於ける（聖徳太子に対する）憶念の信の実現を念として、同信師友の協力によって無窮に相続せらるべきと共に又それは（太子の）御心によって開発せしめられたる研究者の信念告白を内容たらしむべきものであるというとき、実人生における信の相続であったのです。太子の言われる自行化他の菩薩行を日々の生活に実現することこそここに黒上先生の遺志の継承も太子の讃仰も集中するものでありました。これはもちろん国民生活全

体として実現せらるべきものであって数名の青年同志の能くするところではない。しかし田所さんたちは黒上先生に導かれてその課題に身を捨てて―現世の榮達をかえりみずに―とりくんだのであった。

さて田所さんはもちろん専門の歌人になろうとしたのではありません。黒上先生亡きあとは、黒上先生の師事した三井甲之先生についた。三井先生は、正岡子規の根岸短歌会の後継者と目されたことがあるくらいの方で、大正・昭和を通じて斎藤茂吉の論敵でもあった、いわば専門歌人の一人といってもよい。「日本文学大辞典」「和歌大辞典」(参照)その三井先生に心酔傾倒して教を乞うたのですから、田所さんの歌は単なる趣味ではなかつたので、三井先生の教えにしたがつて短歌の創作と鑑賞とをいわば思想生活の中心においたのです。田所さんの歌の中には歌をよむことの意義について詠んだ歌があります。次はその中の一例で、昭和十一年のもです。どういう気構えで歌をよんだか、また歌がその生活の中でどういう位置を占めていたかが推察されます。

歌をよむことたゞならず生死はそこにただちにさだめられむとす

われらいま歌をもてりやわれらの中より生れしとこしへの歌をもてりや

はらからよふるひたちいまぞとこしへの歌よむときといよいよおもはずや

生死をただちにさだめむとする歌ぞこれみ国をまもる道にぞありける

当時の田所さんの歌はほとんどが「伊都いつの之男建おたけび」という昭信会の機関誌に発表されたので歌壇とは交渉がありませんでしたが、その歌作は数の上でも優に専門歌人の習作に劣らず、その質も右の歌にも見られる通り本格的のものでした。

田所さんの師事した三井先生は、短歌の創作と批評とからはじめて思想評論・文明批評にすすみました。が、言論の世界にとどまって、よほどのことがない限り現実の政治に関与しようとはされなかつたと思われます。しかし田所さんには、時代思想の批判から直ちにその政治的処置に進む政治的の意味で実行的な面がありました。殊にその活動期が戦争前および戦争中という時でしたから、民族・国家・国民の興亡が現在の一点に賭けられているという強い危機意識が生活の底を貫いていて、青年の身分だとか学問の限界とかの顧慮を捨てさせてしまったのです。強烈な実行意志をもつもののみが味わねばならぬ憤りと悔恨と不満と煩悶とがその歌の中にうずまいています。数百首にのぼる当時の歌の中からどれを代表作として抜き出せばよいか、ぼくはいまだに決めかねていますが次の歌をかかげておきます。

くろどりの鳥とならむ夕ぐれの砂山につどふ鳥とならむ

つどひてはまたやすからずとびたちて夕空かける鳥とならむ

つちのへに餌あさるとすれどうちむすぶさまはみられず鳥のむれは

西日やまにうすづき野かぜふきはらふなかにさびしも鳥なく声

夕空にゑひしれし鳥そが羽根をやすむるひまなくめぐりとぶなり

夜のとばりおりむ一とき鳴きさけび飛びかふ鳥われはなつかし

星らいで空にまたゝけば鳥らは森の高枝にひそむか姿を

朝ときの風にこころをうごかさず夕べのみなく鳥こほしも

とこしへにさやけき声を青ぞらになかぬ鳥かも鳥なつかし

神奈川県の上野で療養していた時期の歌です。この頃田所さんは自分が養子であったことを知ったようです。母一人子一人のその母君は養母であったわけです。そうした家庭の環境から思想生活の上からも孤独と憂悶とを味わっていた当時の気持が「鳥とならむ」という異常の発想となつてあらわされています。素朴なしなやかさよりもたくましい指導性がきたえられている感じがします。この指導者としての使命感は過重になると歌のしらべを破る危険があつて、田所さんの歌の失敗作はこの危険が露呈したものと思われまふ。だからこそ田所さんは歌をよみつづけることによって自己

の思想生活を正すように努力しつづけたのだと思う。この意味では明治維新以来ここにふたたび歌をよむ政治家の誕生の陣痛があったのだらうと思う。この意義は重大でありましたが、昭和前史は、こうした精神のすくよかな生長を許さなかつたようであります。

右の田所さんの精神の生長に見られるような、一高昭信会の中に用意され蓄積された思想生活が全国的規模に拡大したのは主として小田村寅二郎氏はじめ数名の後輩の活動が契機となつたのです。昭信会と同じような同信団体が全国旧制各高等学校に結成され、その横断的連絡は「日本学生協会」と名づけられました。昭信会の機関誌「伊都之男建」は日本学生協会の「学生生活」に生長しました。田所さんは毎号巻頭言を書いて指導的論策としましたが、さらにこの雑誌に歌欄を設けてその選をし、歌論をも展開しました。三十前後の年令で、実に超人的な活動でした。その当時の歌には、長年の鬱結した憂悶を現実の活動の中に忘れさるようなたくましい強いしらがあって、最後の歌をのぞくと一番ぼくらへの心へのこる歌をのこした時代だつたと思います。また思想運動に躍り出た田所さんの心のリズムは連作短歌から長詩に力点を移しましたが、次は当時の短歌の一例です。昭和十三年十一月「学生生活」第一巻第二号より。

夕

夕ぐれの野に立つ煙もゝすぢのことごとくそびくその煙はも

あか雲の遠山のへにのこりつゝ日は地そこに沈みはつらし
波たてる多摩川の水あをぐろくけはしき色にみちあふれたり
川べりをゆく人の子のかけみえずさびしきかなや冬の夕ごろ
さびし心かそかなぐさむわが汽車の母ます家路ゆくとおもへば

今度この稿を書くにあたって田所さんの歌を通読して、その歌に孤独の悲哀のしみわたっていることに、いまさらのように心うれました。生前にこの気持をおもうことのなかった自分の心のあさはかさがなげかれました。このさびしさは、家庭的環境からも時代を抜く見識のゆえの孤独感からも師友と死別したことからきたものでしょう、田所さんの歌の本質であります。

元来、黒上先生のご思想、信仰は、どちらかという宗教的教育的の傾向が強く政治的活動を目ざすものではありませんでしたが、時代の危機感と田所さん自身の天稟と環境とによって、田所さんの活動は政治的活動に向ったのです。そこで教育改革の思想運動が反共運動となりました。そうしてついに戦争指導方針として打ち出されて来たマルキシズムまがいの社会変革思想と真正面から対決することとなったのです。つまり当時喧伝された「百年戦争論」には「戦争を革命へ」という革命思想の危険を、翼賛会運動には一国一党の全体主義を、国防国家論からはじまる軍政論に軍部

独裁の軍国主義を、独伊ソ日同盟論に共產主義の戦略を、南進論に親ソ援ソ傾向を看取して、軍人の政治独裁による社会革命よりもむしろ自由主義財閥の支援する政党政治の方が実害が少ないだろうとみたようです。つまり全体として当時の戦争指導方針としての新体制の思想動向と対峙して、明治憲法を中核とする旧体制に基礎を置く思想運動を展開したことになります。これは田所さんが母方の関係から岡田啓介（海軍大将・総理）の甥に当ることから来る情報にもよったのですが、主としては思想的の検討によって得られた結論でした。もうこの頃は短歌も長詩も多く発表されず、政治的の危機に対応する論策が中心となりました。

こうして田所さんは昭和十八年、主として軍人の政治干与と統制経済との批判によって、同志十数名と共に東京憲兵隊に拘置され、半歳の後出所しましたが、出所の条件として、その主宰する精神科学研究所および日本学生協会の解散、ならびに二ヶ年間の政治活動の禁止を命じられました。憲兵隊で拘置した理由は、昭和十八年二月十五日「第八十一回帝国議会衆議院決算委員会会議録第十回」の速記録によると、「反戦反軍平和主義者」の故をもってでありました。戦後の今にしてみれば、光栄ある拘置ではありませんが、当時してみれば反戦反軍主義者の烙印ちくいんを押されて政治的発言を禁圧されるという、いわば戦時下の政治犯として軟禁されたわけで、苦難の極でした。つづいて行われた反東条運動の嫌疑による再度の拘置は病身の田所さんに起ちがたい傷痕を与えてしまったのです。憲兵隊による政治活動の禁止命令の期限が二十年八月三十一日、すなわち敗戦の降伏

文書署名の日であったことはくしき暗合でした。憲兵隊の命令が時効になって田所さんが自由になった時は同時に発令者である憲兵隊ならびに軍そのものの解体した時でもあったのです。しかしその時既に田所さんは、再び起つことのできない病床に呻吟していました。稀に見る蓋世の見識と忘我捨身の勇氣とはこうしてついにふたたび陽の目を見ることなく倒れ去ったのです。田所さんこそ明治維新の志士を継承する昭和の国士というにふさわしい人物であったと思います。

戦時中、反戦反軍の故をもって政府や軍から弾圧された人は戦後英雄視されましたが、田所さんは戦後は逆に超国家主義者の故をもって公職追放の対象とされました。天才はその時代に容れられないというが、田所さんにはたしかにそういう悲劇的などころがありました。今日「国民文化研究会」の先輩として活躍している高木尚一、小田村寅二郎、加納祐五、桑原暁一の諸氏は田所さんと終始行動を共にした人々であります。

田所さんの生涯と思想とについてここに述べつくすことはできない。それは正に一篇の劇詩であり現代史の研究のテーマでもあると思います。ここにはその思想行動の概略を寸描したにすぎませんが、われ人ともに挙世時流に流れ権勢におしつぶされた戦争中のことをおもうにつけ、明治天皇と聖徳太子との研究に専念しながら「反戦反軍自由主義者」の烙印を押されて弾圧され、戦後は「超国家主義者」とされて祖国再建への道そのものも封殺され、なつかしい友人からはなれてただひとり疎開先の旅宿に、老いたる母と妻と乳呑子とをのこして死んでいった、その心情をおもう

と、ことばありません。文字通り万斛ばんかくの思いを胸に死んでいったにちがいない。その一端が敗戦の悲歌となつてのこされていきます。

前述「興風」の「田所広泰歌集」はその表紙に敗戦直前の病床詠をかかれています。昭和二十年八月八日と日付けがあります。見知らぬ福島の疎開先での歌であります。老母と若妻と幼児とが病床の田所さんと一緒であつたということです。

みちのくの旅路に病みて臥りつゝ砕くるおもひ人の知らなく

我を柱とたのます母や妻子らの面見るごとに心に泣かゆ

夕日かけかくろひはてし西山の木々たちこめてひぐらしの啼く

乳房すふあ子のふる手のうらもなきその手を見れば心ぞいたき

国のことには直接何もふれていませんが、敗戦の日の悲哀がしみわたっています。よむごとに何ともいたましく、ことばもない。あれほど戦争の将来を心配し、その心配のために身をかえりみることのなかつた田所さんが、敗戦の悲しみを永久にのこす歌をよむことになろうとは。いや敗戦をさけるために身をかえりみなかつた田所さんだからこそ敗戦の悲しみをじかによむことができたのでしょう。田所さんの長い歌の生活はこの四首につきるといってもいいのではなからうか。つづい

て同年八月十一日の歌が載っています。その時田所さんは広島・長崎の原爆投下を知っていたのだろうか。田所さんにとってはすべて予言のとおりであったでしょうが、あまりにもしずかな歌がそれだけに深く悲しみをたたえているのです。

八月十一日

朝よりとのぐもりつゝひやゝけきけふ夕まけてわれは入院す

あ子が泣くこゑもきかえずさびしかる宵々ならむ今日よりの後

このまま田所さんは起ち上ることができず、日本再建の雄図を胸に翌年の六月十八日に死んでしまったのです。前述小歌集の跋に「岩手県盛町の客舎で急逝、享年三十七歳」とあります。

東京の多摩墓地に墓があり、先ごろはじめて参拝しました。死後、数えてみると二十五年になるわけです。墓地正門の正面二区一種二側、たしか名誉墓地の中に入っていると思う。父君の故でしょう。父君「海軍中將田所廣海之墓」の文字は、田所さんが中学の時書いたものだと言った、その文字です。とても中学生の書いた字とも思えない達筆です。その隣に、昭和三十一年母君ます子建つと裏面にあるやゝ低い「田所家之墓」というのが並んでいて、遺骨はそこに眠るものようです。ありし日のその声と姿とは日本学生協会製作の菅平合宿記録映画「文化の戦士」にのこる。また

莫大な数に上る短歌・長詩・歌論・論説は既述のとおり、一高昭信会機関誌「伊都之男建」、日本学生協会機関誌「学生生活」、精神科学研究所発行「新指導者」に載る。

(昭和三十八年七月「国民同胞」所載)

昭和四十五年、待望の的であった田所廣泰遺稿集「憂国の光と影」(五百頁)が社団法人国民文化研究会から発行されて、多くの人に深い感銘を与えています。亡くなられてから年月がたつにつれてますますその人物の豊かさと識見の大きさとが感じられて、今の世にあらばと憶う心切なるものがあります。田所さんが身をもって当った時代の弊風は、今日も昔と変わらず、田所さんの魂は今なお現代を叱咤しつたすることくに思われます。その意味で、田所さんの思想と生涯の価値は、そのあとをつぐものの肩にかかっています、今早急に定めることはできないように思われます。(夜久 正雄)

あとがき

実のところ本書には苦勞しました。せめてこれだけは書いておきたい、と思う点が、前著「短歌のすすめ」篇から約百五十頁分はみ出してしまったのです。やむなく、続篇としてもう一冊つけ加えることになりましたが、続篇の構成がさらに大変で、苦心の末に成ったのが本書です。前著も本書も、一般の入門書や研究書とは、構成のしかたが異っています。私どもは、単に歌を上手に作るための用意を述べようとしたのではないからです。歌を通じて人生の生き方や日本の伝統的生命の継承や時代思潮との対決を学ぼうとする志を述べたかったのです。そのためには、どういう問題について述べたらよいのか、また最も基礎的な知識としてはどういう点を挙げるべきなのか、苦心して考えて、本書の構成を作ったのです。なお参考のため前著目次を巻末にかかげました。

文章はなるべく平易に書くのがよいのですが、はばのひろい問題を簡潔に述べようとして、概括的な言い方をしたために、難解になったところがあったようで、申訳ないことをしました。これは私どもの文章が拙いということと恥ずかしいことですが、今後の努力を誓うほかに道がありません。文章というものも、歌と同じように大変なものであるということ、いまさらながら痛感しました。ともかく、二冊計六二〇頁の紙面を与えられましたので、歌について思うことはほぼ尽させてい

いただきました。本書が、学問の根底としての短歌創作を少しでも鼓吹できるならば、著者の努力はむくいられると思う次第であります。

この間に寄せられた小田村寅二郎氏はじめ友人諸氏の激励を深謝いたします。なお「国民同胞」発表の論文を数多く利用させていただいたことについて、宝辺正久氏たち下関の国民同胞編集の方々に感謝いたします。

また文中に長文の引用をさせていただいた関正臣氏（横浜・舞岡八幡宮司）、広瀬誠氏（富山県立図書館長代理）はじめ、文献を引用させていただいた方々にあつく御礼申し上げます。なお、表紙、扉の美術写真は、多くの方々の書物の中から借用させていただきました。一々その出典を示しませんでした。撮影された方々、写真を発表された方々に、お礼申し上げます。前著は鳥を主題にしましたので、この書物は波を主題にしました。また特に本書のために写真を撮っていただいた青砥宏一、稲津利比古、川井泰彦の諸氏に御礼申し上げます。

出版に当りましては、特に国民文化研究会副理事長浜田収二郎氏、事務の山内恭子（旧姓石井）さんに、何かと御厄介になりました。末筆ながらあつく御礼申し上げます。

昭和四十六年九月二十一日

著者

△参考▽本書の前編「短歌のすすめ」の目次

序文

第一部 短歌のつくり方……………1

一 歌をつくるよろこび……………3

(1) はじめに……………3

(2) なぜ、青年学生諸君に短歌の

創作をすすめるか……………7

(3) はじめて短歌を創作した学生

の感想……………13

(4) 短歌の創作と相互批評の意味

について……………19

(5) 創作体験の発展のあと……………26

二 歌のつくり方……………35

(1) 短歌の原則……………35

①歌るつくるには ②短歌の形式

上の原則―一首一文ということ

③内容に関して―自分の体験をよ

むこと ④題材と用語とについて

⑤深い感動をよむ ⑥連作短歌に

ついて

(2) 歌をつくる目的……………59

①経験の意味すなわち生き甲斐の

把握―その芸術性 ②短歌と国民

同胞感―その倫理性 ③永久生命

への没入―その宗教性

(3) 質疑応答……………68

①字あまりについて ②感情の直

接表現と客観的描写について ③

各句間の連絡構成について ④結

論を冒頭に出すことについて ⑤

歌は人がらの表現である

(4) うそとまこと……………78

①盗作の歌の問題点―短歌の真実

性 ②戦争の歌―短歌の人間性 ③

岩倉具視と三条実美―短歌の思想

性 ④吉田松陰の遺歌―短歌と真心

習作と添削……………99

国文研叢書目録

No. 1 夜久正雄著「古事記のいのち」 新書判246頁

No. 2 桑原暁一著「日本精神史鈔—親鸞と実朝の系譜」
新書判279頁

No. 3 高木尚一著「弁証法批判の歴史」 新書判241頁

No. 4~No. 8

小田村寅二郎編「日本思想の系譜—文献資料集」
全5冊（各新書判） （上巻—古代・中世）309頁
（中巻その1—近世）317頁
（中巻その2—近世）409頁
（下巻その1—近代）403頁
（下巻その2—近代）381頁

No. 9 川井修治著
「歴史と人生観—マルクス主義の超克」 新書判283頁

No.10 小田村寅二郎編「欧米名著邦訳（明治）集」
新書判483頁

No.11 桑原暁一著
「続日本精神史鈔—花山院とその系譜」 新書判310頁

No.12 夜久正雄、山田輝彦著
「短歌のすすめ」—創作と鑑賞— 新書判309頁

No.13 夜久正雄、山田輝彦著
「短歌のあゆみ」—続「短歌のすすめ」— 新書判316頁

著者略歴

夜久正雄

- 一、大正四年東京都渋谷区に生れる
- 一、東京府立一中、第一高等学校を経て東京帝国大学文学部国文学科卒業
- 一、現職 亜細亜大学教授・教養部長
- 一、著書 「三条実美歌集」梨のかたえ」とその研究」(昭和十九年)、「ホイットマン・草の葉抄」(昭和二十五年、松田福松氏と共著)、「歌人・今上天皇」(昭和三十四年)、「自選歌集」(流星)、「戦後」(武蔵野)、「いのちありて」、「古事記のいのち」(昭和四十一年)、「同書英訳『The KOJIKI in the Life of Japan, translated by G. W. Robinson, 1969. 共著『短歌のすすめ』(昭和四十六年)

山田輝彦

- 一、大正十年北九州市若松区に生れる
- 一、若松中学、佐賀高等学校を経て九州帝国大学法文学部国文学科卒業
- 一、現職 福岡教育大学講師
- 一、著書 「大正の文学」分担執筆(昭和四十四年桜楓社)、「共著『短歌のすすめ』(昭和四十六年)

短歌のあゆみ

国文研叢書 No. 13

昭和四十六年十二月一日 二、〇〇〇部

資料Ⅱ非売品

著者 夜久正雄

山田輝彦

発行所 社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

東京都中央区銀座七一〇一八(柳瀬ビル)

電話 (五七二) 一五二六一七

振替 東京 六〇五〇七番

印刷所 奥村印刷株式会社

東京都千代田区西神田一一一四

落丁乱丁のものは、お取り替えいたします

